金色の御子伝説

世捨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
金色の御子伝説

【Ｎコード】
Ｎ８４１０Ｎ

【作者名】
世捨人

【あらすじ】
両親を失い行方不明となっていた王子が帰ってきた。神の加護を受けた王子は何をなしていくのか？

序章（前書き）

改定版のスタートです。
旧作の焼き直し＋追加エピソードとなりますが、旧作程の更新速度は出せませんのでご容赦ください。

序章

無限に広がる次元の片隅にある小さな世界にユーロネシアと呼ばれる大陸がある。

大陸の中央には大陸最高峰の『神龍の山』があり、その周囲には『神狼の森』と呼ばれる広大な森林が広がっている。

『神龍の山』と『神狼の森』は神域と呼ばれ、人間が入ることはできない。

大陸には４つの国家が存在していた。

神域を含む大陸の南西に広がるローレンシア神聖王国。

ローレンシア神聖王国から東に広がるシンカ共和国。

シンカ共和国の北方に広がるグランディカ帝国。

そしてローレンシア神聖王国の北方にある小国からなるソヴィエ連邦。

『神に祝福された国』と呼ばれるローレンシア神聖王国。

王城内にある祭壇にベビーベッドが置かれ、白銀の髪に鳶色の瞳をした赤ん坊がスヤスヤと眠っている。

すこし曲のある赤毛の青年が祭壇に向かい両手を広げ大きな声で宣言した。

「我が子　アーサー・フォンライン・ローレンシアを王位継承権１位の王太子とし、ここに王太子の証である聖なる短剣を授ける！」

赤毛の青年こと国王ジェファーソン・フォンライン・ローレンシアは王家の紋章が入った短剣を赤ん坊の胸の上に置き、満面の笑顔で王子の額にキスをした。

１０歳年下の王弟アルフレッド・ボガート・ローレンシアを筆頭に、儀式の参列を許された国の重役達や４人の公爵、大神殿神官長から大きな拍手と歓声があがった。

大きな声と拍手の音に驚いたのか、ぐずり始めた王子をチラリと見て

「王子はこれから食事じゃ。少し休憩をして洗礼の儀式を行おう。皆の者　それまで寛いでいてくれ」

と言い王子を抱き上げ王妃に渡し、控えの間に下げさせた。

真紅の髪と鳶色の瞳で幼少期から武術ばかりだった国王が、大神殿で見かけた白銀の髪に翡翠色の瞳を持つ美少女『神の巫女』に一目惚れし射止めたのが現王妃フレデリカ・アッサム・ローレンシアである。

フレデリカは『神の巫女』と呼ばれる通り、幼い頃から神の声を聞き人々に福音をもたしてきた。（自身の結婚についても神の祝福を

得て決意したと言われている）

フレデリカの居た大神殿はローレンシア神聖王国に総本山を置き、世界の理を司る『知の神』と生き物全てを司る『生命の女神』の天上神２柱を祀っている。

他にも天上神の決めた理を世界で実行する『精霊』や、理を乱す者から世界を守る『神獣』を祀った精霊神殿がある。

一般的に貴族は権威の象徴として天上神を信仰し、平民はより身近な精霊を信仰している。

先代王が流行病で急逝し２０歳にして王位についたジェファーソンは、王妃から神の教えを説かれ戦乱の無い民が笑顔で暮らせる国を作る為に善政を行い『賢王』と呼ばれている。

戦乱が無いということは、武勲を挙げ恩賞を得ることができない。民が笑顔で暮らすということは、領地の民に重税を課し富を得られないということで、不満に思う貴族もいるが、口に出して王の信頼を失うことを恐れ誰も逆らうものはいないのである。

また、他国からも信頼が厚く王族や有力貴族からの留学依頼があるほどである。

戦乱が無いとはいえ、決して軍事力が弱いわけではなく、炎王近衛騎士団や風王騎士団、地王陸戦隊、水王海戦隊を擁し大陸でも有数の軍事力を誇っている。

その他にも、各貴族は私兵を持ち自領の治安を維持しているが、一

度戦が始まれば国軍に組み込まれ戦力となることが決められている。

「兄上　おめでとうございます」

「お～　アル　ありがとうな。どうだあんな可愛い赤ん坊見たことないだろ～　俺に似てハンサムになるぞぉ～　ワーッハッハッハッ」

「どう見ても大陸一の美女と言われた義姉上に似てると思いますよ～　兄上に似ているのは鳶色の目くらいです。兄上に似なくて良かったと臣下の者達も申しております」

「おお～～～！！アルが突っ込みを覚えた！！成長したなぁ～　兄はうれしいぞ！」

賢王は、王弟の頭をガシガシと撫で回し上機嫌で他の列席者へ挨拶に向かった。

「陛下　此度は王太子殿下ご誕生おめでとうございます！！」

そこかしこで同じようなやりとりが行われ終始穏やかな雰囲気で時は流れていった。

しばらくして控えの間から王子を抱いた王妃が入ってきて、参列者も所定の位置に立ち居住まいを正した。

「これより神々による祝福の儀をとり行う」

大神殿の神官長が宣言し、参列者全員が跪き頭を垂れた。

本来であれば、神官長が祝詞を捧げ祝福をあたえるのだが、王妃は神々の声を直接聞くことができるので、神官長は祭壇に一礼し後方に退いた。

「神々のご加護により　この子を無事出産することができました。感謝いたします。この子にも神々の教えを説き正しく人々を導けるよう祝福を賜りますようお願いもうしあげます」

王妃の声が響き渡った　その時、祭壇の陰から2つの黒い影が飛び出してきた。

うおおおおっ

黒い影のひとつは手にした剣を王の胸に突き立て、もうひとつの黒い影は王子に剣を振り下ろそうとしていた。

きゃぁぁぁーーーーーー!!

王妃は自分の身体を盾にし王子を守り

「神よ　この子を・・・・・・」

と言い残し息絶えた。

その時、眩い光が王子の身体から発し、光と共に王子の姿は消えてしまった。

「フハハハ　神など誰も助けにもならぬわっ」
と言い放った黒い影はその場で自刃した。

「兄上っ　義姉上っ！」

「陛下っ　王妃様っ！」

王妃以外の全員が跪き頭を垂れていたことが災いし、誰一人対応できず悲痛な叫びが室内に響き渡る。

部屋の外にいた衛兵が異変に気付き中に入ってきた時には全てが終わっていた。

「王子様は何処だっ」

「王太子殿下が見当たらないぞっ」

「探せっ　必ず無事に連れ帰るのだっ」

国を挙げて王子の大捜索が行われたが、賊が連れ去った形跡も無く王子の行方は杳として分からなかった。

犯人の身元も、前日まで王都の酒場で酔い潰れていた傭兵くずれとしか分からず、王城への侵入を手引きしたであろう共犯者も全く分からなかった。

第1章　1話　～旅立ち編～

＜アーサー、巣立ちの準備はできたのかい？＞

「うん。　森のみんなにも挨拶したし、持って行く物も無いからね」

＜人間には気をつけるのだぞ。人間は森の者ほど優しくないからな＞

「心配性だな～エルザは・・・・・・　大丈夫だよ。悪意の見分け方は習ったからね」

『神狼の森』にある洞窟の中で、腰まで伸ばした白銀の髪をした少年アーサーはエルザと呼ばれた金色の狼の首に抱きつき頬摺りをしながら話している。

＜母よ、俺も付いて行くから心配いらないぜ＞

アーサーの髪と同じ色の体毛をした２ｍはあるかという狼が入ってきた。

＜シロバンテイン、お前が付いて行くから余計心配なんじゃないか。おバカなお前がアーサーに迷惑をかけるんじゃないかとな＞

「アハハ・・・・・・・　シロも森からでるのは初めてだからなぁ～」

＜うるさいっ　何があっても俺がアーサーを守ってやる　頭は悪いけど強いぞ＞

「自分で認めてるし・・・・・・」

「ところでシロ　その姿では連れて行けないよ」

＜ふむ　問題ない＞

一瞬シロバンテインの身体が輝くと子犬の大きさに変化した。

「お～～～～！！かわいいなぁ～～」

＜ふんっ！＞

「それではアーサー様、参りましょうか」

4人の女性がアーサーの前に現れた。

「ええっ～～～～君たちも来るの？」

「アーサー様、何を当たり前のことを？」

「アーサー、アタイ達が一緒じゃ嫌なのか？」

「御子様、吾等守役が同行するのは当然のことだ」

「アーちゃん、ノーちゃんも一緒だよ～」

「君たちは忙しいんじゃ？」

「アーサー様のお世話以上に大切な用事などございません」
「はぁ～……僕が呼ぶまで大人しくできる？」
「もちろんでございます」
「わかった。本当に大人しくしててくれよ……」
「畏まりました」
＜アーサー　大変な旅になりそうだな＞
「シロ　なんだか目から汗が出そうなんだけど……」
＜俺には関係ない＞
「……」
「じゃあ　エルザ行ってくるね」
＜アーサー　気をつけて行くのだぞ。困ったことがあればいつでも呼べ。いつでも駆け付けるでな＞
「わかってるよ。エルザも元気でね」
エルザは目を細めてアーサーを送り出した。
五分丈のズボンに膝から踝までの黄金の脛当、五分袖の上着に肘か

ら手首までの黄金の篭手、脛当と篭手にはそれぞれ精霊石と呼ばれる石が嵌め込まれている。

腰帯の左側にはダガーと呼ばれる短い剣、腰帯の背中側には日頃使うナイフが差してあるだけの簡素な格好で森を後にした。

第1章　2話

『神狼の森』を出て南西に隣接する『魔狼の森』に沿って続く街道に出たのは3日後のことであった。

＜アーサー　どこに行くんだ？＞

「う～～ん　とりあえず父上が武術をならったって人に会いに行ってみようかと思ってるんだ」

＜そうか　その人はどこに行けば会えるんだ？＞

「さあ？」

＜……＞

「誰か知ってるかい？」

独り言のようにアーサーがつぶやくと緑色の髪をした美女が現れた。

「アーサー、そりゃランバート・アーノルド・レジアス公爵って人だよ」

「ふ～ん　どこに行けば会えるのかな？」

「前は王都にいたんだけど、１０年前に家督を息子に譲って、今は領地に居るんじゃないかな」

「へえ～　よく知ってるね」

「風の噂ってやつよ。アーサーに関わることなら何でも知ってるよ。
例えば　＝＾ー＾＝うふっ♪」

「えっ！？何？　何しってるの？」

「ひ・み・つ」

「……」

「領地って何処なのさ」

「このまま街道を西へ１０日くらい行ったところに「武術の里」と
呼ばれるロレンツォっていうとこだよ。そこに公爵家の城があるよ」

「じゃあ　そのロレンツォって町に行けばいいんだね」

「うん。でも領地への出入りは身分を証明する物がいるよ」

「えっ！？そうなの？僕何も持ってないよ」

「じゃあ、近くの町の組合（ギルド）に立ち寄って登録すればいいんじゃない？
登録証っての貰えるから、それを身分証明に使えばいいのよ」

「誰でも登録できるの？」

「問題ないはずよ。お尋ね者以外はね」

「ありがとう、シルフ。まずは組合（ギルド）ってとこに行ってみるよ」

のんびりと街道を歩いていると森から何かが飛び出してきた。

ガサガサ　バキッ！

ＧＵＲＵＲＵＲＵ……

背中に籠を背負い剣を構えた男に向かって、黒い狼が威嚇している。

「シロ　あれは魔狼だよね」

＜うむ　なにやらかなり怒ってるようだな＞

「森の外まで追いかけてくるって相当な怒ってるね」

この世界での生き物はすべて魔力を持っている。

なかでも特に魔力の強いものを「魔獣」という。

狼の場合は「魔狼」熊の場合は「魔熊」などと獣の名称の前に「魔」を付けて呼ぶことが一般的である。

その強さは通常の獣の数倍と言われている。

籠を背負った男は剣を振り回し魔狼を牽制してはいるものの、顔面は蒼白で完全に魔狼の殺気に呑まれていた。

「おじさ～ん　どうしたの？」

「うるさいっ　ガキは離れてろっ」

＜アーサー　あの籠から子狼の臭いがするぞ＞

アーサーは、はぁ～と溜め息を吐いた。

「おじさ～ん　早く子狼返さないと殺されちゃうよ～」

「やかましいっ　魔狼の子は高く売れるんだっ」

はぁ～ともう一度溜め息を吐き

「シロ！」

＜仕方ないな＞

アーサーの横からシロの姿が消え、ズドッという音とともに男の鳩尾に白い塊がぶつかり男は意識を手放した。

シロはフンッと鼻をならし、男の背負った籠に頭を突っ込み子狼を引っ張りだすと魔狼のほうを見て頷いた。

魔狼はゆっくり近づき子狼の無事を確かめると、シロに感謝するように顔を嘗め回し子狼を咥えて森に帰って行った。

騒ぎを聞きつけて駆けつけた男達にアーサーが事情を説明していると、男が目をさましたようだった。（もちろんシロが気絶させたことは内緒である）

「うう～ん　俺は生きてるのか？いきなり意識がなくなったんだが・

・・・・・あっ！！」

男は自分の背負っていた籠を見て子狼がいないことに気づいた。

「おい小僧っ　子狼はどうした？」

「魔狼が連れて帰ったよ」

「なんで黙ってみてたんだっ　高く売れるんだぞっ　どうしてくれるんだ」

「僕には関係ないよ」

「小僧っ　その白い子狼を渡せっ　俺が高く売ってきてやる　分け前はやるぞ」

「やだよ」

「当分遊んで暮らせるくらいの金だぞ」

近くで様子を見ていた男が呆れたように

「お前なぁ～命を助けてもらった感謝をするどころか野盗みたいに脅してどうすんだっ」

「なにをっ　うるせぇっ」

「そんなに金がほしいなら自分ひとりで誰にも迷惑をかけないようにするんだな」

「おおっ　次はうまく親狼に気づかれないようにやってやるさ」

「おじさん　次は無いと思うよ」

周囲の男達も一斉にアーサーにふりむいた。

「おじさん達　狩人なら森の掟知ってるでしょ」

「あんな誰が決めたかもわかんねえような掟なんか守ってられるかよっ」

「迷信じゃないのか？」

「森の掟を決めたのは『生命の女神』だよ。信じれないならそれでも良いけどね。それに森に入ろうとすれば直ぐにわかるしさ」

「そうなのか？」

「そんなのデマに決まってるっ」

そう叫ぶと籠を背負ってた男は森に向かって歩いて行った。

だが男はいつまでたっても森に入れない。

「どういうことだ？」

「それが森の裁きだね」

「もう森に入れないのか？」

「心の底から改心して女神が受け入れれば入れるようになると言われてるよ。子狼を自分から返していれば裁きを受けることもなかったんだろうけどね」

「そうか。迷信じゃなかったんだ」

籠を背負った男を哀れんだ目でみながら男達は口々に神への畏怖の言葉を呟いていた。

「ところで小僧は何処に行くんだい？」

「とりあえず組合（ギルド）ってところに行って登録したいんだけど、何処にあるか知ってますか？」

「それなら小さいけど俺たちの村にもあるぞ。案内してやろうか？」

「助かります」

「いや　いいってことよ。あんな奴でも助けてもらったお礼をしなきゃな」

「お礼を言われるようなことはしてないですよ。アハハ」

「じゃあ　あいつはほっといて行こうか」

アーサーは男達に連れられて村にむかった。

第1章　3話

アーサーを連れた男達は、村の中にある小さな食堂に入って行った。

「小僧ここが組合（ギルド）の受付だ」

「ここが？」

「町の組合（ギルド）から簡単な受付だけ委託されてるんだ。お～いエレナいるかい？」

男は店の奥に声をかけた。

店の奥からエレナと呼ばれた若い女性がパタパタと出てきてアーサーを見るなり固まってしまった。

「お～い　エレナ～　もどってこ～～い　お客さんだぞ～」

「あんた達こんな綺麗な子・・・まさか・・・攫って・・・坊や私が守ってあげるからね」

キッと男達を睨み付けて近くにあったフライパンを握り締めた。

「おっおい　勘違いすんな　この子はダグの馬鹿を魔狼から救ってくれたんだ」

「本当かい？坊や　こいつらに何にもされなかったかい？」

アーサーは苦笑しながら頷いた。

「まあ詳しい話は後だ。小僧が組合(ギルド)に登録したいって言うから連れてきたんだ。手続きをしてやってくれ」

「おねがいします」

男達はテーブルに腰掛て脱力していた。

「坊や　組合(ギルド)のことは知ってるの？」

「いいえ　登録証があると他の領地にも行けるってことしか・・・・・・」

「じゃあ簡単に組合(ギルド)のことを説明するわね。
組合(ギルド)の種類にはね『傭兵』『狩人』『商人』があるの。
『傭兵』は野盗や山賊の討伐や戦などの人間相手の仕事ね。
『狩人』は依頼された獣を狩ってきたり狂獣の討伐などの獣相手の仕事。
『商人』はそのまま商売人のことね。坊やがなりたいのは？」

『狂獣』とは『魔獣』が怒りなどで魔力を暴走させ、破壊本能だけで動く獣のことである。

「僕はずっと森の奥に住んでたから狩人ならできると思います。人間相手の戦いはいやだなぁ～」

「そうね。坊やみたいな綺麗な子が野盗討伐なんてお姉さん想像できないものね」

とニッコリ笑いアーサーの格好を見て

「その装備で狩りなんてできるの？」

「シロと一緒なら熊くらいなら狩れますよ。この子も強いですから」

「まあ危ない依頼は受けなければ大丈夫ね」

とあまり信用してなさそうにしながら紙をだしてきた。

「この申請書に必要事項を書いてね。って字は書ける？」

「大丈夫です」

用紙を見てみると、申請者氏名、出身地、主に使用する武器、主に使用する魔術属性、契約している精霊の属性等の記入欄があった。

「聞いてもいいですか？」

「ええ　なんでも聞いてちょうだい」

「出身地って・・・・・・僕は『魔狼の森』なんですけど、そのまま書けばいいんですか？」

「住んでた村に名前はなかったの？」

「村じゃなくって家族だけで住んでたんですよ」

「じゃあ　そのまま書いておけばいいわ」

「わかりました。使用する武器はっと・・・・・・魔術属性って？」
「火の魔術が使えるんなら『火』とかって書いとけばいいんだけど、魔術使えない人のほうが多いから別に書かなくってもいいわよ。精霊のところもテキトーで」
「結構いい加減なんですね」
「ここは正規の受付じゃないからね。大きい町の受付行ったらしっこいくらい聞かれるわよ」
「ここで良かったです。親切に教えてもらえるし」
「こんな田舎で登録する人なんて村人以外いないから、登録内容なんてどうでもいいのよ」
っと笑いながら申請書を受け取ると内容を確認した。
「アーサー君ね。魔狼の子供を連れてることは備考欄に書いておくわね。密猟を疑われちゃ嫌でしょ」
「ありがとうございます」
エレナは申請書を水晶玉に翳して組合本部（ギルド）に転送した。
「申請書送ったから登録証がくるまで少し待っててね」
その後しばらくの間、男達と一緒にダグと呼ばれた男のことをエレ

ナに説明した。

「はぁ～　なにやってんだか　あの馬鹿は！！」

「そういえば　この前通りかかった商人が魔狼の子供を欲しがってる貴族がいるとかなんとか言ってたから請け負ったんじゃないか？」

「そうかもしんないね」

「そういえばアーサー君　他の領地に行きたいって言ってなかった？」

「うん　亡くなった父の先生に会いに行って、父の話を聞きたいなぁ～なんて……」

「じゃあお母さんだけ森に残してるの？」

「いや　僕が生まれて直ぐに両親共に死んじゃって、養子として育ててもらったんです。
僕が15歳になったんで、森だけじゃなくって色んな事を勉強しておいでって旅に出ることを許してもらったんですよ」

「かわいそうに……なにか困ったことはないの？」

「僕はずっと森で育ったから世の中のことがあんまりわかんなくって……」

「例えば？」

「お金の使い方とか……価値とか……」

「まさかお金持ってないの？」

「旅に出るときに養父がくれました」

と懐から皮袋を取り出して中身を見せた。

中身を見た全員が固まった。

「こんな大金……これだけあれば一生……」

「アーサー君これ誰にも見せちゃ駄目よ！！」

そう言って皮袋を懐にしまうよう促してお金の説明をしてれた。

銅貨１００枚で銀貨１枚。
銀貨１０枚で金貨１枚
金貨１０枚で白金貨１枚
食堂で普通にご飯を食べて銅貨５枚、ちょっと贅沢なものを食べて銅貨１０枚くらいだと。

皮袋の中には白金貨が２００枚くらい入っていた。

「アーサー君　そんな大金懐に入れてちゃ危ないわよ」

「大丈夫ですよ。魔術で他の空間に置いてますから」

「えっ！？空間魔術って……高等魔術じゃないっ」

「でも　これって攻撃にも防御にもなりませんよ。便利だからって養父が教えてくれたんですけど……変ですか？」

「お養父さんって何者なの？」

「養母からは『ロリコン変態親父』って言われてます。アハハ」

全員がズッコケタ……

「他にも使える魔術はあるの？」

「他は焚き火に火をつけたりできる程度です」

「あ～吃驚した～」

水晶玉からピロリ～ンと音がしてなにかが出てきた。

「アーサー君の登録証ができたみたいね」

１０ｃｍ角くらいの皮製の登録証を受け取ったアーサーは

「ありがとうございます。これで旅ができそうです」

「いえいえ　どういたしまして」

「今日は俺達の奢りで宴会だぁ～～～～！！！」

「えっ！？そこまでお世話になるわけには……」

「何言ってるんだ　ダグの馬鹿野郎を助けてもらったお礼とアーサーの門出祝いだぁぁぁ」

「アーサー君　こいつらは宴会の理由が欲しいだけなのよ」

と笑ってエレナは料理を作りに厨房へ消えて行った。

第1章　4話

エレナが厨房に消えると男達が話しかけてきた。

「小僧　ダグは『森の掟』のなにを破ったんだ？」

「『捕食目的以外で子供を害してはならない』ってやつですね」

「だけど俺達も売るために小鹿や猪の子を狩ったりするぞ？」

「その獲物は結局食べちゃうでしょ？」

「まあそうだな」

「それに比べてダグさんの攫った子狼は食べる為じゃないでしょ？」

「そうか　子狼なんて食べないもんな」

全員が納得した。

「『森の掟』なんて真剣に考えたことなかったが怖いもんだなぁ～」

「僕も裁きを受けた人は初めて見ました」

「じゃあ『水場で狩りをしてはいけない』ってやつもダメなんだな」

「でもオラは水場で仕留めたことあるぞ？」

「それは他で狩りを始めて偶々仕留めた場所が水場だったんじゃないですか？」

「そうだども……」

「それは大丈夫ですよ。水場で水を飲んで寛いでいる獲物を狩った場合だけですから」

「へえ～気を付けないといけないなぁ～」

「でも小僧はなんで子狼を連れてるのに裁かれないんだ？」

「僕は『魔狼の森』でシロと一緒に育ったからシロが自分から付いてきたんですよ。シロの親も僕のことを自分の子供だと思って一緒にいるのが当たり前って思ってるみたいです」

「そりゃすごいな。小僧は魔狼が怖くないのかい？」

「赤ん坊の時から一緒ですから怖くないですよ。一緒に狩りをしたりしてましたよ。何度か狂熊（マッドベア）を狩ったりしましたよ」

「すげぇ～」

「狂熊（マッドベア）と戦う魔狼はかっこいいですよ！目にも留まらぬスピードで……」

目をキラキラさせてアーサーは狩りの様子を語った。

「狂獣を倒したら『魔力石』ってのが手に入るって本当かい？」

「う～ん　綺麗な石のことかな？」

「そうそう　すごく貴重で高く売れるらしいぞ」

「それなら僕持ってますよ」

アーサーは懐から小さな皮袋をとりだした。

「これがその綺麗な石ですよ」

とテーブルの上に出してみせた。

「はじめて見た……綺麗だな……これ一つで1年は十分食える……」

全員呆けた顔で『魔力石』にみとれていた。

『魔力石』は狩人なら誰でも一度は自分で手に入れてみたい憧れの石なのだ。

「さあっ皆ボケッとしてないでテーブルを片付けてっ　料理が置けないじゃない」

アーサーは『魔力石』を皮袋に入れ懐にしまい、他の男達は自分の荷物を床におろした。

「私が腕によりをかけて作ったんだから不味いって言わせないよ！！」

とエレナは大量の料理を並べはじめた。

「しかし小僧はとんでもない金持ちだな。『魔力石』一つで金貨１０枚以上だぞ」

「あんた達っ人の懐を羨ましがってるん暇があるんなら、自分で稼ぐことを考えなっ」

とエレナは一喝した。

みんなグラスを片手に乾杯をしようとした時、フラフラと憔悴しきったダグが入ってきた。

「お～いダグ大丈夫か？」

「俺は……もうダメだ……何度やっても森には入れねぇ」

「まあ自分でやったことだからなぁ～」

「どうやって暮らしていったらいいんだ？　教えてくれよ～～～」

「まあ腕っ節は強いんだから農業の手伝いとか大工の手伝いとか村の皆が助けてくれるさ」

「そうそう　それがこのパイク村の良いとこじゃないか」

「でも　もう欲に目をくらまされるんじゃないぞ？次やったら誰も

助けちゃくれないぞ！それだけは覚えとけよ」

「わかったよ。はぁ～自分が情けないよ」

「ダグっ　ゴチャゴチャ言う前にすることがあるんじゃないの？」

鬼のような形相でエレナは言い放った。

「な・なんだよエレナ……」

「一番最初にアーサー君にお詫びとお礼を言うのが筋だって言ってんだよっ　わかんないのかい？」

「あっああ　そうだな。小僧悪かったな。そして助けてくれてありがとう。感謝してる」

パコーン

フライパンを握り締めたエレナがいきなりダグの頭を殴った。

「なにが偉そうに『小僧』だよっ　だからお前は馬鹿だって言われるんだ」

「まあまあエレナさん　僕は気にしてないですから……ダグさんもこれから頑張ってくださいね」

「お　おう」

ダグは頭を押さえ涙目でアーサーに答えた。

「おいっ　そんなとこに突っ立ってないで一緒に飯くうぞっ　かんぱぁ～い！！」

「「かんぱぁぁぁい」」

アーサーは初めて目にする料理に早速手をのばしてみた。

「おいしいっ　すごくおいしいですっ　エレナさん　すごいっ」

リスのように頬を膨らませて料理を頬張るアーサーを見てエレナは笑顔を向けた。

「そんなに喜んでもらえると、作った甲斐があるわ」

この日深夜まで宴会は続くのであった。

第1章　5話

翌朝日の出少し前にアーサーは目覚めた。

「うう～ん……ここは？……」

周囲をキョロキョロとうかがうと酒瓶を抱えた男達がアチコチに倒れていた。

「あっそうか昨日の夜は……」

「アーサー君起きたようね。遅くまで起きてたようだけど大丈夫？」

「はい。大丈夫です。お世話かけました」

ペコリと頭をさげた。

「アーサー君　手持ちが白金貨と『魔力石』じゃ旅するのに不便でしょ。これ持っていきなさい」

と少しの銀貨と銅貨を差し出した。

「えっ！こんなことしてもらう訳には……」

「いいのよ。それと隣町にある組合（ギルド）では両替もできるから寄ってみるといいわ」

「じゃあ色々と教えてもらったり親切にしてもらったお礼にこれを受け取ってください」

と小さな『魔力石』を手渡した。

「これじゃあ　こっちが貰い過ぎになっちゃうわ！！」

「これなら沢山持ってますから大丈夫ですよ。皆さんが困った時にでも使ってください」

と言い残しシロと一緒に駆け出した。

「もうっ！！不思議な子だったわね～」

と笑顔で走り去ったアーサーを見送った。

街道をはずれ森の中を真っ直ぐ進んだアーサーは昼過ぎには町が見えるところまで来ていた。

「あれがエレナさんが言ってた町みたいだな。おっきいなぁ～」

ワクワクする気持ちを抑えながらシロを伴って町の入り口までたどり着いた。

「おいっ　旅のものか？身分証がないと町には入れんぞ」

横柄な態度で番兵が声をかけてきた。

アーサーは昨日作ったばっかりの組合(ギルド)の登録証を差し出した。
番兵は登録証の内容を確かめジロリとシロを見た。
「本当に魔狼の子なのか？」
「そうですよ」
「人に危害は加えないのか？」
「大丈夫です。子犬とかわりませんよ。ちょっとだけ動きが早いのと力が強いだけです。まだ子供ですから」
と笑いながら答えた。
「それなら通って良し！」
「すいませんが、この町の組合(ギルド)って何処にあるか教えてもらえませんか？」
「このまま真っ直ぐ大きな道をいけば右側にあるぞ。組合(ギルド)の紋章が看板にあるからすぐわかるはずだ」
「ありがとうございます」
ペコリと頭を下げ教えられた道を歩きだした。
「ほっ　魔狼って聞いたときにはチビルかと思ったぜ。意外にかわいいもんだな」

と番兵は呟いた。

今まで見たことがないほどの人間が行きかう通りをアーサーとシロは歩いていた。

＜アーサー　さっきからジロジロ見られてるな＞

「うん　僕たちってそんなに変なのかな？」

通りを歩く人々はアーサーを見かけると女性達はポッと頬を染め見とれていたり、男達は悔しそうに唇をかみ締めたり項垂れたりしているのだ。

しばらく歩いて組合（ギルド）を見つけ中に入って行った。

入って左側には食堂兼酒場、右側には種類別に依頼書の張られた掲示板があった。

何故か全員の注目を浴びる中、正面のカウンターに向かって歩いて行った。

「いらっしゃいませ。今日はどんなご用ですか？」

受付のお姉さんは事務的に話しかけたが、その頬は赤みがさしていた。

「えっと……これを買い取ってほしいんですが……」
と懐から『魔力石』をひとつ取り出した。
「では2つ向こうの受付が買取専門の窓口になっていますので、そちらで交渉してください」
と片方の手で別の受付を指した。
教えられた受付に行き
「えっと……これを買い取ってほしいんですが……」
「いらっしゃいませ。　それでは組合(ギルド)の登録証を拝見させてください」
懐から登録証をとりだし受付の女性に手渡した。
「アーサー様ですね。　あれっ？　これって昨日エレナ姉さんが申請してた……」
「エレナさん知ってるんですか？」
「彼女は2年前までここで働いてたのよ。っと無駄話の前に『魔力石』を鑑定に回させてね」
「あっ　はい」
と手渡した。

受付嬢は奥に座ってる鑑定士らしき人に『魔力石』を渡し、すぐにもどってきた。

「鑑定結果まで、お話していいかしら？」

「いいですよ」

「エレナ姉さんは2年前に事件で旦那さんと息子さんを一緒に亡くしちゃってパイク村に帰っちゃったのよ」

「そんな風には見えなかったですよ。明るく村の人達の面倒をみてたようでしたよ」

「エレナ姉さんらしいわね。自分がどんなに辛くっても顔にださないで明るくして強い人なのよね。旦那さんも精霊術を使った治癒師でね面倒見の良い人だったんだよ」

「流行病かなんかで？」

「いえ　それがね、患者さんがいきなり切りつけて、そばにいた息子さんと一緒に……」

「なんかトラブルでもあったんですかね？」

「温厚な人だったから、それは無いと思うわ。ただ犯人がね『精霊なんて無力だ！！』って叫んで自害したらしいのよ」

「なんか不思議な話ですね」

アーサーは自身の身の上から他人事とは思えなかった。

アーサーの足元で『伏せ』をしているシロを狩人の連れた猟犬達がジロジロみていた。

＜鬱陶しいな＞

シロがキッっと猟犬達を睨んだら、猟犬達は尻尾を下げ震えながら目をそらした。

「鑑定の結果がきたわよ。随分上質だったみたいね。金貨１２枚で買取できるそうよ？」

「それでお願いします」

「じゃあ買取書にサインしてね。お金用意してくるから」

「はい。できれば金貨2枚分は小さいお金でお願いできますか？」

「わかったわ。金貨じゃ不便だものね」

買取書と引き換えにお金を受け取った。

「そんな大金持ち歩くの危ないわよ？」

「僕　空間魔術使えるんで問題ないですよ」

と笑いながら答えた。

その笑顔に受付嬢はカチンと固まってしまった。

「お〜〜い　おね〜〜さ〜〜ん」

「あっ！！」

と現実に戻ってきた受付嬢の顔は真っ赤になっていた。

「僕　変ですか？　さっきも通りを歩いてたらみんながジロジロと……」

「い・いや　あんまりにも綺麗だから……みとれちゃって……」

とハニカミながら答えた。

用事を終えたアーサーはすぐに町を出て街道へ足を向けた。

第1章　6話

アーサーが町を出た後、猟犬を連れた狩人風の5人組が出て行った。

「おい　あの小僧は本当に金持ってるんだろうな？」

「おおっ　『魔力石』売ってたからな」

「ガキから奪い取るなんざ手間もかかんなくって楽勝だぜ」

「あの小僧も綺麗な顔してたから娼館にでもたたき売ったら高く買ってくれそうだぜ」

「でもルディアの町じゃ売れねえぞ？」

「なぁ～に隣の男爵領なら問題ないさ。領主からして悪党だからな。ウヒヒ……」

「てめえら見失うんじゃねえぞっ　町から見えなくなったら直ぐやっちまうからな！」

「おう！」

狩人風5人組の後ろを、少し距離を開けて二人の騎士が尾行していた。

「間違えなく犯行に及びそうだな」

「うむ」

「あの少年には悪いが囮になってもらうしかないな」

「今まで証人になりそうな人々は皆殺しにされてるからな。少年が殺される前に助ければ問題なかろう」

「いや助ける必要もないと思うぜ」

「どういう意味だ」

「少年の歩く姿を見てみろ」

「普通に歩いてるようにしか見えないぞ？」

「隙がないんだ　それも恐ろしいほどに自然体で……」

「そうは見えんけどなぁ～」

一方、アーサーはシロとじゃれ合いながら暢気に歩いていた。

「シロ　後ろの人達って野盗って人達かな？」

＜悪意の篭った目で俺たちをみてるからなぁ～＞

「面白そうだからこのまま様子をみよう」

＜犬ッコロは俺が相手するから、人間はアーサーが相手しろよ＞

街道から町が見えなくなった所で、二人の男と猟犬２匹がアーサー達を追い抜き振り返った。

「おい小僧っ　さっき受け取った金全部置いてけ　命だけは助けてやる」

「ん？おじさん達　組合（ギルド）で見てたの？」

アーサーは特に慌てた様子もなく平然と答えた。

男達は猟犬を嗾けようとするが、猟犬は尻尾を下ろし耳を伏せ尻込みして動こうとしなかった。

「おい犬の様子が変だぞ？」

「そんな馬鹿犬ほっとけ！！」

と男達は全員剣を抜き放つとアーサーを威嚇するように前後からジリジリと近寄って行った。

「大人しく渡さねえと痛い思いをすることになるぞっ」

「おじさん達　悪い事は止めたほうが良いよ。いつか捕まって酷い目にあうのは自分達だよ？」

「うるせぇっ　ガキに説教される覚えはねえ　身包み剥いで売り飛

ばしてやるっ！！」

「やっちまえっ」

男達は一斉に飛び掛って行った。

ガキィーーーーン

男達はお互いの剣をぶつけ合っていた。

剣の下に蹲っていたアーサーは、全員鳩尾に拳を放ち意識を刈り取った。

「おーい　木の陰にいるおじさーーん」

「「誰がおじさんじゃっ　おにいさんとよべ」」

「助けてくれないなんて酷いじゃないですか～　この人達捕まえにきたんでしょ？」

「いや～悪い悪い……君が強そうだったから見学させてもらってたんだ」

と笑いながらアーサーの肩を叩いた。

一方猟犬達はシロの前に伏せ、まるで子分のようにおとなしくして

いた。

騎士達は男達を縛り上げ、一人は町に護送用の馬車を取りに走って行った。

「しかし見事な体術だなぁ」

「いえ大したことないですよ。あの程度だったら森の獣達のほうがよっぽど怖いですよ」

「はっはっはっ　俺も剣術には自信があるほうだけど、あんなに素早いのは久しぶりに見たよ」

「おにいさんだったら一瞬で倒せたんじゃないですか？」

「あいつらは問題にならないよ。それより君の動きは俺の師匠以上かもしれんなぁ～」

「おにいさんの師匠だったら強いんでしょうね」

「うむ　レジアス公爵って言って、この国でも有数の剣士なんだぞ」

「レジアス公爵ってランバートさんのことですか？」

「おっ　よく知ってるな。そうランバート・アーノルド・レジアス公爵だ」

「僕その人に会うために旅してるんですよ」

「弟子入りかい？もう引退されたと聞いてるが？」

「いえ　父の師匠がランバートさんで、ロバートさんとは仲が良かったそうなんです。それで父の修行時代の話とか聞けたら良いなぁ～って」

「そうか　お父さんは一緒じゃないのかい？」

「ええ僕が生まれてすぐに他界しました」

「そりゃ悪い事聞いたな。すまない」

「いいえ気にしないでください」

「そういえばロバート卿の奥様は、ここの領主シュベルト伯爵の妹さんなんだ。その縁で俺はランバート様の弟子になれたんだ」

「どんな方なんですか？怖い人？」

「剣術の修行は厳しかったけど、普段は豪快で面白い人だ」

「よかった～　怖い人だったら会わずに帰ろうかななんて・・・エヘヘ」

「公爵様のお城に行ったら門番に話をしたら気軽にお会いしてくれるはずだ」

「ありがとうございます。ランバート卿の武術にも興味があります。見学くらいできますよね」

「誰でも見学は許されると思うぞ。俺がいた頃にもたくさん見学者がきてたからな」

「楽しみです。できれば手合わせとかできれば嬉しいかも」

「叩きのめされる覚悟があれば受けてくれると思うぞ。なにせ『武術の里』って呼ばれるくらい好戦的な連中が多いからな　アハハハハ」

しばらく武術談義に花を咲かせていたら馬車が到着した。

「それじゃあ俺達は野盗共を護送してルディアの町に戻るんだが、申し訳ないがこいつらのことで聞かなきゃならんことがあるから同行してくれないか？」

「構いませんよ。別に急いでるわけでもないですから」

「そうしてもらえると助かるよ」

騎士達は馬車の荷台に作られた檻に野盗達と猟犬を入れ、自分達は御者台に乗りアーサーに声をかけた。

「君も乗ってくれ」

「えっ　いいんですか？」

「当たり前じゃないか」

「僕、馬車って始めてなんです」

シロを抱きかかえて、アーサーは御者席に腰掛けた。

第1章　7話

馬車に乗ってルディアの町に帰ってきたアーサー達はシュベルト騎士団の本部に到着した。

馬車の檻に入れられた野盗は、他の騎士に連行されどこかに連れて行かれた。

「アーサー君、こっちに付いて来てくれるかな」

と建物の中に案内された。

応接間のような部屋で、簡単な事情聴取が行われ調書が作成された。

アーサーは騎士（ルイスという名らしい）と雑談をしていると、ルイスが少し困ったような顔をして話かけてきた。

「アーサー君はレジアス領に行くんだったよね」

「はい　そうです」

「このままレジアス領に行くにはバーニング男爵領を通って行くんだけど、困ったことにあそこは治安が悪いんだ」

「野盗が多いんですか？」

「それもあるんだが……領主が旅人を嫌ってるようでな……」

「なんか言い難そうですね」

「ああ…自分の領地のことを外に知られないように、旅人を殺してるとかいう噂があるんだ」

「それは怖いですね」

「商人達も決して男爵領のことは口にしないしな」

「口止めされてるってことですか？」

「そうらしいんだが、俺達も他領のことだから余計な詮索はできんしな」

「じゃあ領地への出入りも難しいんですか？」

「それは他の領地と一緒だよ。だから領地に入ってからが危ないんだ」

「僕も気をつけないといけないですね」

「まあアーサー君ほど強い相手を倒せるとは思わないが、注意するにこしたことはないな」

「じゃあ領地に入ったら街道を歩かずに森をぬけよっかな」

「森のほうが危ないんじゃないのか？」

「僕は森で育ったので、森の獣達のほうが扱いやすいんですよ」

ガチャっ

部屋のドアが開き、立派な甲冑をつけた男が入ってきた。

「君が被害者の少年か？」

「団長、彼が被害者というか野盗を捕まえた本人というか……」

「アーサーって言います」

アーサーはペコリとお辞儀をした。

ルイスは団長に野盗捕縛の経緯とアーサーの旅の目的を説明した。

「旅の途中、この領地で不愉快な思いをさせたこと深くお詫びする」

団長と呼ばれた男は深々と頭を下げた。

「いえいえ、団長さんが頭を下げるようなことじゃないですよ」

「そうもいかんのだ。あのような野盗を野放しにしておったなどと我が騎士団の恥でしかないんだよ」

「じゃあ僕もお役にたてたってことで嬉しいです」

「そう言ってもらえると、こちらも助かるな」

「じゃあ僕はそろそろ出かけてもいいですか？」

「引き止めて悪かったな。でも、こんな時間から出発するのか？」

「ええ、夜は適当に森の中で寝ますから」

「それじゃあ気をつけてな。ランバート卿にお会いしたらルイスが宜しく言っていたと伝えてくれ」

「わかりました。それでは失礼します」

騎士団の建物から去っていくアーサーを見ながら、

「あの立ち居振る舞いは平民ではないな」

と団長はひとりごちた。

ルディアの町を後にしたアーサーは、一晩森で過ごして翌日にはバーニング領の関所に来ていた。

組合（ギルド）の登録証で何事もなく関所を通り街道を歩いていると、野盗のような格好をした男達が後をつけているのに気がついた。

アーサーは面倒事を避けるため、直ぐに森に入った。

野盗達が森でアーサーに追いつけるはずもなく、直ぐに気配は消えていった。

「シロ、なんだか嫌な感じだね」

＜森から出ぬほうが良いな＞

「あの人たち野盗じゃないみたいだしね」

＜うむ、訓練されておったからな＞

アーサーは森を進みはじめた。

時折、森の間から見える人里は畑も荒れ果て、人々も活気がない状態だった。

中には村全部が焼き払われ廃墟となっているところもあった。

アーサーは街道沿いの森の中から、街道をみてみると野盗にしてはみすぼらしい格好をした集団に荷馬車が囲まれていた。

それぞれ手に農作業用の鎌や山の下刈に使う鉈や蛮刀を持った１０人の男達が荷馬車を囲み威嚇していた。

「おいっ　荷物をおいてけっ」

「荷物さえ置いてけば危害はくわえねえだっ」

荷馬車の御者台に乗った二人の男は無言だった。

森から駆け出してきたアーサーは男達に駆け寄って話しかけた。

「おじさん達　野盗の真似なんてしちゃダメだよ」

「うるせえっ　オラたちゃこうでもしねえと殺されちまうんだ」

「どういうこと？」

「この領地じゃ税が払えねえと見せしめに殺されるんだっ」

男達は必死の形相で答えた。

「その話は俺達も詳しく聞きたいな」

と馬車に乗った男が言った。

「ど・どういうことだ」

「俺達は王都からこの地を調査に来てるんだ。全部話してもらおうか」

「ほ・本当に王都からなんだな。領主様の手先じゃないんだな」

「ああ、本当に王都からだ。安心して話せ」

野盗達は顔を見合わせ武器をおろし話はじめた。

税が高く生活がままならないこと。

ここ数年不作で収穫が減っても税が軽減されないこと。

税が払えなければ見せしめに誰か殺されること。
逃げ出せば一族もろとも皆殺しにされること。

「オラ達は野盗でもして金を作るしかねえだ」

「女は犯され殺されるんだぞ」

「不平を口にしただけで半殺しだ」

口々に領主の悪政を吐き出した。

荷馬車の男達は無言で話を聞いていた。

アーサーは荷馬車の男達に聞いた。

「おじさん達、王都から調査に来たってことは、近いうちになにかするんでしょ？」

「詳しくは言えんが、放っておくことはない」

「じゃあ、みんなで森に逃げ込みなよ。森に隠れてればいいよ」

「森は危ねえだぞ？」

「おじさん達の中に森に詳しい人はいるんでしょ？」

「ああ、狩人や木こりもいるからな」

「その人達と森の水場で過ごすんだよ。水場なら安全だよ」
「どういうことだ？」
「森の掟で、水場での狩りはできないことになってるんだよ。獣も襲ってこないよ」
「そうなのか？」
「そのかわり、おじさん達も水場で獣を狩っちゃダメだけどね」
「村に帰って相談するべ」
男達は詫びを言いながら去っていった。
アーサーは荷馬車の男達を見て話しかけた。
「おじさん達、あの人達を助けてあげてよ」
「そのつもりだ」
「隣の領地の騎士団の人達も心配してたよ」
「そうか……君はこの土地の人間じゃないな」
「うん、僕はロレンツォの町まで旅してるんだ」
「それは大変だな」

「そうでもないよ。僕は森を抜けてるから野盗にも襲われないしね」
「あはははは　それで森に逃げることを勧めたのか？」
「森は優しいからね。掟を守る人は受け入れてくれんだ」
「俺達も今度野盗に会ったら勧めてみるよ」
「それじゃあ、おじさん達も気をつけてね。王都の騎士団さん」
「おっ　よくわかったな」
「だって、おじさん達強そうだもん」
「あはははは　君も気をつけて行くんだぞ」
走り出した荷馬車に手を振り、アーサーは森に戻って行った。

第1章　8話

アーサー達は街道沿いの森で狩りをしたり、川で魚を捕ったりしながら一路レジアス公爵領に向けて進んでいた。

夕食の後、木の枝にすわり今まで人間の世界で見てきたことを思い出していた。

お金という誘惑に負けて掟を破ってしまう弱い心。

失敗した者を叱咤しながらも助け合う優しい心。

恐怖に怯え法を犯す者。

領主の考え方の違いで多くの人々が笑顔になり、笑顔を失うこともあると間近に見てアーサーは『民が笑顔で暮らせる国を作る』という父の理想に誇りを持った。

しかし、ただの旅の狩人であるアーサーには何もできることがなく、人間社会の身分とか権力とかが如何に理不尽で今の自分には理解できないものであるかを思い知った。

アーサーは精霊王達を呼び出した。

「人間の社会って、みんなから教えてもらった事より複雑なんだね」

「アーサー様、我々精霊は傍観者として見ているだけで、詳しく知っているわけではございませんから」

「ウンディーネ、そうかもしれないね。僕はもっと知らなきゃいけないんだね」

＜俺達『獣』のように戦いの強さだけで王を決めれば簡単なのにな＞

「アーサーは王子なんだから、身分を明かせば悪い奴なんて倒せるんじゃないの？」

「シルフ、その身分というのが難しいんだよね」

「我々が御子様に力を貸せば、こんな領地の一つや二つ簡単に焼き尽くしてやるぞ！！」

「サラマンダー、そんなことしたら領民が困るだろ？」

「アーちゃんが王様になればいいんじゃない？」

「ノーちゃん、僕は王にはなれないよ。
神の子が人間を支配するわけにはいかないからね。
これからのことはランバートさんに会ってから決めようと思ってるんだ。
できれば国のこととか貴族のことなんかも教えてもらわなきゃ僕には知識が無さ過ぎるからね。」

「アーサー様のお考えなら、それがよろしいかと存じます」

「それからみんなに頼みがあるんだけど……」

「なんでございましょうか」

「パイク村のエレナさんのこと覚えてる？」

「おおっ　アーサーが未亡人の色香に「違う！！」」

「彼女の旦那さんや息子さんが亡くなった状況が、僕の両親の事件と似てるような気がするんだ」

「確かにそんな気がしますね」

「それで、似たような事件が他にもあるんじゃないかって……」

「それを私達に調べろと？」

「うん。シルフが噂を集めて、同じような事件があれば契約していた精霊に状況を聞いて欲しいんだ」

「わかったわ」

「一番気になるのは、精霊が付いていながら『何故犯行に気づかなかったか？』ということなんだ。
悪意には敏感なはずだろ？
ましてや母上は『神の加護』を受けていたのに神ですら気づかなかったんだ。
これは人間だけでできることじゃないと思うんだ。
なにか得体の知れない相手が居ると思う」

「アタイは大陸中の精霊に指示して、早急に調べてみるよ。風の情

報収集能力の見せ所だね」

「僕とシロは、このまま公爵領に向かうから、みんな頼んだよ！」

「「「「はいっ」」」」

もう半日も歩けばレジアス領への関所というところで、アーサーは森を出て街道におりた。

少し先のほうに商隊らしい荷馬車が数台止まって、荷馬車の陰に数人が隠れているのが見えた。

「シロ、野盗かな？」

＜いや、禍々しい魔力を感じる。おそらく狂獣だな＞

「そりゃ大変じゃないかっ　急ぐよ」

アーサーとシロは荷馬車に向かって駆け出した。

アーサーが荷馬車に元に着いた時、少し離れた場所で護衛の傭兵達が狂熊（マッドベア）を相手に戦っていた。

魔術で火球をぶつけても、剣で斬っても全く効果がなく傭兵達はジリ貧の様子だった。

周囲には狂熊（マッドベア）に倒されたであろう傭兵が転がっていた。

「おじさん達っ　怪我人を連れてさがって！　シロは治癒を手伝ってっ」

と一声かけてアーサーは狂熊（マッドベア）に突っ込んでいった。

嵐のように振るわれる爪や牙をかわし拳を突き入れるが、全く効果はなかった。

「坊主っ　お前も逃げろっ」

声に振り返り傭兵達が離れたのを確認してアーサーはもう一度狂熊（マッドベア）に突っ込んだ。

鋭い爪を掻い潜り力強く踏み込んで、薄く光を放つ掌を狂熊（マッドベア）の腹に打ち込んだ。

ズドオオォォォォォン

大音響とともに狂熊（マッドベア）の動きが止まった。

アーサーはゆっくりと狂熊（マッドベア）から離れ、狂熊（マッドベア）は口から煙を吐き倒れていった。

「ふう～」

大きな溜息を吐きながらアーサーは傭兵に近づいていった。

「おじさん達、だいじょうぶ？」

「ああ、なんとかな」
「怪我人は？」
と怪我人に目をやると、先ほど火球を放っていた男とシロが治癒魔術を使っていた。
「なんとか全員生きてるぞ」
「よかったね～」
「坊主のお陰だ。　ありがとよ」
「いえ、当たり前のことをしただけですよ」
「そう言われると、俺達が情けなくなっちまうぜ　あはははは」
「でも危なかったですね」
「おお、いきなり街道の横から出てきて襲ってきやがったからな」
「みんな無事でよかった」
「どうやって倒したんだ？　俺達がいくらやってもダメだったのに」
「最初殴ってみて、魔力障壁か肉体強化か確かめて、あとは魔力を身体に打ち込んで身体の中で爆発の魔術を発動させただけです」
「魔力だけを打ち込んで、あとで爆発？　そんなの俺達じゃむりだ」

「あははは　僕の師匠が無茶苦茶だったから……」

「それに、あの体術もすげえや」

「そうですか？　魔狼のほうが早いけどなぁ～」

「こりゃ俺達と次元が違うわ　あははは」

荷馬車に隠れていた人達も集まり、口々にお礼を言い謝礼を渡そうとしたがアーサーは断り、倒れた狂熊（マッドベア）に近寄って何かを拾った。

「僕はこれで充分ですよ」

と魔力石をみせた。

アーサーは怪我人の回復状態を見て、シロを連れて立ち去った。

第2章　1話　～レジアス領編～

アーサーとシロはレジアス公爵領に入った。

バーニング男爵領とは違い、豊かな田園風景に安堵した。

『武術の里』と呼ばれるにふさわしく、空き地では子供達は木剣を振るい剣術の稽古をしているのが見える。

近寄ってしばらく見ていると木陰から老人が話しかけてきた。

「旅のお方かい？」

「はい。父の知人を訪ねてロレンツォまで行くつもりです」

「どこから来なさった？」

「魔狼の森から来たんです」

「魔狼の森？そりゃ遠いところから大変じゃッたなぁ」

「いえ　どこに行っても初めて見るものばかりで楽しかったですよ」

とニッコリ微笑んだ。

「さっきから熱心に見ておるが武術に興味がおありかの？」

「ええ　僕も習ってましたから」

「ほぉ～　どんな武術かの？」

「主には体術です。あとは剣と槍ですね。戦斧も習ったんですが、あれは苦手でした」

「体術が全ての基本じゃからな」

「はい　武器は手足の延長だと教えられました」

「良い師匠にならったな。
これからロレンツォに行くのかい？」

「はい」

「では君も衛士隊の入隊試験を受けにきたのかな？」

「えっ　入隊試験？」

「なんじゃ　知らんのか？」

「ええ」

「年に2度レジアス衛士隊の入隊試験があるんじゃよ。
衛士隊に入れば公爵家の武術も習えるし、腕が認められれば騎士団に入隊できるかもしれん」

「へぇ～　面白そうですね」

「一緒に騎士団の入団試験も行われるぞ」

「衛士隊からの昇格だけじゃないんですか？」

「他の領地の騎士団から修行の為に来る奴らもおるからな」

「見てみたいなぁ～」

「試験は誰でも見学できるんじゃ。
騎士団のほうは国中の猛者が集まるから面白いぞ。
それに今回は公爵家お姫様の護衛選抜もあるから騎士団同士の試合も見られるぞ」

「そりゃ面白そうですね。
レジアス騎士団って、そんなに有名なんですか？」

「ああ、領主の騎士団としては最強じゃな。
王都の騎士団に引き抜かれることも多いと聞くぞ」

「それは凄いですね」

「護衛選抜のほうは、騎士団の精鋭と各地から来る貴族の子息が参加するらしい。
まあ実質婿選びと噂されておるよ。ワハハ」

「おにーさん」

子供達が近寄ってきて話しかけてきた。

「この子　狼？」

「そうだよ　魔狼の子供だよ」
「怖くないの？触っても大丈夫？」
「大丈夫だよ　大人しいよ」

ナデナデ

頭を撫でられてシロは気持ちよさそうにジッとしている。
「わあ～　気持ちいい～～～　モフモフしてる～～～～」
「シロ　子供達と遊んであげなよ」
迷惑そうな顔をしながらも広場に向かって走りだした。
子供達も慌てて追いかけて、鬼ごっこがはじまった。
単純に追いかけても捕まらないと分かった子供達は連携して追い込もうと必死で追いかけていた。
「僕も子供の頃、魔狼とああやって追いかけっこさせられました。懐かしいなぁ～」
「俊敏さと適応力を鍛えるには良い訓練じゃな」
「はい　型にはまってはいけないと言われました。基本をおろそかにせず応用を利かせろとよく怒られました」

「相当な腕の師匠じゃな。それに教え方が上手い。一度会ってみたいもんじゃ」

「今は大陸中を放浪してますから、運が良ければ会えるかもしれませんね」

「それは楽しみじゃ」

「それでは僕はそろそろ出発します。お話できて楽しかったです」

「気をつけて行かれるがよい」

「それでは」

と子供達のいる空き地に足を向け、ヒョイっとシロを捕まえると子供達に手を振って歩き始めた。

「相当な技量じゃな。まったく動きに無駄がないわい」

と老人はひとりごちた。

アーサーはロレンツォの手前で林に入り、旅の途中で狩った獣の毛皮を空間魔術で取り出し、木に巻きついた蔓を紐がわりにしてひとまとめに括った。

＜アーサーそれをどうする？＞

「ああ　旅の狩人らしく組合(ギルド)で売ろうかななんてね」
＜お金とやらが無くなったのか？＞
「いや　他の狩人の真似してるだけ」
と笑った。

毛皮を担いで、町の入り口に差し掛かったところで番兵に声をかけられた。
「小僧　旅の狩人か？登録証を確認させてくれ」
アーサーは懐から登録証を出し、番兵に差し出した。
「その毛皮はどうしたんだ？」
「はい　旅の途中で狩りました。組合(ギルド)で引き取ってもらうつもりです」
「自分で狩りをしたのか？ダガーだけで？」
「ダガーなんて使わないですよ。これはただの飾りです。この程度の狩りなら素手で充分です」
「おいおい猪の毛皮もあるぞっ　こりゃあたまげた」
「アハハ　子供の頃から仕込まれましたから」

「組合(ギルド)はあそこに見えてる建物だ。
明日からの試験で柄の悪い奴等もたくさんいるから絡まれるんじゃないぞ」

「ありがとうございます」

とペコリをお辞儀をして組合(ギルド)の建物に向かって歩き出した。

建物に入り買取受付に進むと

「いらっしゃいませ。今日は買取かしら?だったら登録証も提出してね」

と受付嬢は話しかけてきた。

「はい　お願いします」

と担いできた毛皮と登録証を渡した。

「品質確認おねが～い」

と奥に声をかけアーサーに微笑みかけた。

「君が今アチコチで噂になってる『白銀の美少年狩人』のアーサー君ね」

「なっなんなんですかっ　その呼び名は」

「いや～ルディアの受付嬢の子がね水晶玉通話で全国の受付に『す

っごい美少年発見！！』って教えてくれたのよ。ウフフ……噂以上だわね」

毛皮の検査ができるまでアーサーはカウンターに突っ伏していた。

第2章　2話

「毛皮の代金だけど、銀貨8枚と銅貨５０枚でどうかしら？」

「それで良いですよ。思ってたより高額なんで嬉しいです」

「すごく上物だって評価よ。傷ひとつないってどんな狩り方したのかって不思議がってたわ」

「ああ素手で狩りしてたから傷はつかないですよ」

「すごいわねぇ～　ここらへんの狩人も見習って欲しいわ！みんな弓や剣で穴だらけにして持ってくるんだから！」

ヤレヤレという表情をしながら受付嬢は愚痴をこぼした。

「そういえば明日から町で何かあるって聞いたんですけど、何があるんですか？」

「ああ定例の騎士団と衛士隊の入隊試験よ。　あっそうそう　お姫様の護衛っていうか婿候補の選抜もあるらしいわ。アチコチから貴族のお坊ちゃま達が来てるわ」

「貴族のご子息が護衛？」

「貴族のお坊ちゃまって言っても次男とか三男の家督と継げないような人が逆タマ狙ってきてるのよ」

「逆タマって？」

「格上の女性と結婚して自分の格もあげることね。前々から縁談はたくさんあったらしいけど、全部断ってるみたいよ」

「誰か意中の人でもいるんですかね？」

「お姫様は『わたくしより弱い者に用はありません！！』って宣言してるから、面白いことになりそうな予感がするんだけどね」

「気の強そうなお姫様ですね」

「先代様に剣の天才って言われるくらいの御転婆だけど領民には優しくって可愛らしいお姫様よ。領民からも慕われてるわ　剣の腕前も相当なものらしいわよ」

「へぇ～面白いお姫様なんですね。ところで、入隊試験って何処であるんですか？」

「あら　アーサー君も受ける気？」

「いいえ　とんでもない！見学だけですよ。いろんな武術見てみたいから……」

「綺麗な顔してても男の子なのね～　場所はね、お城の裏にある訓練場よ」

「お城の中通れるんですか？」

「明日は、お城の壁に沿って歩いていくと看板が出てるからすぐ分かるわ。それに人もいっぱいいるから付いて行けば問題ないはずよ」

「ありがとうございます」

「アーサー君　宿は決まってるの？」

「今からテキトーに探そうかと思ってます」

「はぁ～　この時期は見学者で一杯のはずよ。今から探しても無理ね。今夜はおね～さんのベッドで……」

周囲の事務員や受付嬢から鬼のような視線が飛んだ。

「冗談はさておき、組合（ギルド）の宿泊施設なら、たしかひとつくらいは空いてたと思うからちょっとまっててね」

受付嬢は宿泊用の受付のほうに歩いて行き、接客中の女性にヒソヒソと何か話した。

接客中の女性はお客さんに向かって

「たった今　客室が満室になってしまいました。またのお越しをお待ちします」

「おっおい！！今空いてるって言ってたじゃないか！！」

「申し訳ございません。先ほど予約が入っていたようです」

と笑顔で言い放ち急いでアーサーのほうに寄ってきた。

「残念ながら部屋は一杯だったようですね。僕は野宿でも「ちょっ

と待って！」」

「部屋は君の部屋で最後なのよ」

「でも　さっきのお客さんに……」

「だ・か・ら　君の部屋で最後なの。それが嫌なら、組合（ギルド）の女子寮ってのもあるわ　私としては、そのほうがラッキーって感じだけど」

「いえ　宿泊施設を使わせていただきます」

「じゃあ直ぐに手続きするわね。こっちの受付にきて書類書いて頂戴」

「はい」

組合（ギルド）の女性陣が残念そうな顔をしているのを尻目に、手続きが終了し施設の説明を受けて部屋に入ったアーサーは

「なんか疲れた……この町の女性って怖い……」

とこぼしベッドに倒れこんだ。

女性が怖いのはこの町だけでないことをアーサーはまだ知らなかった。

部屋で少し休んだ後、少し遅めの昼食をとりに食堂におりた。

昼時を過ぎていたので満席ではなかったが、明日の入隊試験を受けに来た人や見学に来た人でそこそこ賑わっていた。

適当な席に座りメニューをにていると

「いらっしゃいませ。ご注文はお決まりですか？」

とウェイトレスが声をかけてきた。

「なにか軽いものがいいんだけど……」

「それでしたら特製サンドウィッチがお勧めですよ」

「じゃあ　それと紅茶を……シロには生肉をお願いします」

「かしこまりました」

しばらくして持ってこられた食事を食べ終え、これからどうしようかと考えていると厳つい男が話しかけてきた。

「小僧　お前も入隊試験受けるのか？」

「いいえ　僕は見学です」

「それが無難だな。合格するにゃ俺様のような強靭な肉体が必要だからな」

「入隊試験ってどんな事するんですか？」

「なんだ　そんなことも知らねえのか！？
まずはマラソンだな。それで上位５０位が合格。
次に得意な武器の基本型の審査、最後に自由組み手だ。
だいたい合格するのは２～３人だな」

「大変そうですね」

「当たり前じゃないか。合格して衛士隊に入ったら公爵家の武術が習えるんだぞ」

「入隊できるのは武術家だけなんですか？」

「魔術の才がある奴は別枠でいつでも審査を受けれるそうだ。魔術士は少ないからな。精霊術士にいたっては今は誰もいないそうだ
小僧魔術使えるのか？」

「焚き火に火を点けるくらいなら」

「ワハハ　それじゃ無理だな」

「護衛選定の試合も面白そうですね」

「おおっ！？よく知ってるな」

「騎士団の人も出るんでしょ？」

「騎士団若手のトップ３が出るらしいぞ。『疾風のレオン』『爆風のレックス』『千手のリック』こいつらは凄いぞ～　まあこの中の誰かが優勝だろうな」

「強そうですね～　他に優勝候補はいないんですか？」

「そうだなぁ～　他は貴族の子息だからなぁ～　一応有名なのはバーニング男爵の次男坊くらいかな。でもあの一族は人柄がなぁ～……」

「その領地でそんな事言ったら大変ですよ　アハハ」

「よく知ってるじゃないか。ワハハ」

「じゃあ明日は頑張ってくださいね」

「おおっまかしとけ！！

合格したら祝杯をあげるから小僧も参加しろよ！ワハハ」

アーサーは豪快に笑いながら去って行った男を見送った後、会計をすませて町を散策する為に組合（ギルド）を出た。

第2章　3話

露店の並ぶ町並みを、もの珍しそうに見ながら歩いていた。
1軒の小物屋に立ち寄ると皮紐を1本買い、腰まで伸びた髪を首の後ろでひと括りにして歩きはじめた。

＜アーサー　急に髪なんて括ってどうしたんだ？＞

「髪を括ってる人を見て楽そうだなぁ～って思っただけだよ」

＜アーサー　人前で俺に話しかけるのは念話のほうが良いぞ。人から見たら可哀想な子にしかみえないぞ＞

＜あっそうかそれで変な目で見られるのか！？＞

珍しいお菓子を買ってみたり、武器屋を覗いて自分の身長ほどもある剣を見て驚いたりと散策を楽しんだ。

そんなアーサー達を見てボーっとしていた女の子が路地から談笑しながら出てきた3人組の男達にぶつかり転んでしまった。

「あいたた……」

三人組の中で一番豪華そうな服を着た少年が大声を上げた。

「こらっ　人にぶつかっておいて謝罪もないのかっ！！」

「何言ってんのよ　あんた達がぶつかって来たんじゃないっ」

「平民のくせに貴族に対する口の聞き方もしらんようだな！！」
「ぶつかんのに平民も貴族も関係ないわっ　ぶつかってきた方が悪い」
「おいっ　この生意気な小娘をかたずけろっ！！」
少年は、後ろに控えていた二人に命令すると大柄な男が剣を抜きいきなり切りかかった。
きゃあああぁぁぁぁ
ガキーーーーン
大男の剣は空をきり地面にぶつかっていた。
「君　大丈夫かい？」
と女の子を抱きかかえアーサーが問いかけた。
「は・はい」
アーサーは女の子を降ろし去るように促して、男達を睨み付けた。
「こんな町中で剣を抜き、丸腰の子供に切りつけるとはどういうつもりだ」
「この町の者は、どいつも口の聞き方を知らぬようだな　かまわんっ　やってしまえ！！」

大男はアーサーに向かって剣をふりおろしたが、アーサーは相手の懐にもぐりこんで大男の勢いを利用して投げ飛ばした。

ズシーーーーン

大男は自分の勢いと体重で『ぐえっ』と蛙を押しつぶしたような音を漏らして気を失った。

フードを被ったもう一人の男が右手をアーサーに向けブツブツと呟いたとたん火球が飛んできた。

「シロっ　はじきかえせ！！」

アーサーの前で身構えていたシロの前に透明な幕のようなものができ、火球をフードの男にはじき返した。

フードの男は自分で放った火球に吹き飛ばされ壁に激突し動かなくなった。

「な・なっ……」

「こんな人が多いところで剣を抜くことも信じられないが、魔術まで使うなんて……正気じゃないな」

アーサーは冷たい視線を残った男に向けた。

「俺に歯向かう者を倒す為なら平民などいくら死んでもかまわんさ」

「余程頭の悪い馬鹿貴族のようだね」

「貴様　我がバーニング男爵家を愚弄するかっ！！」
「バーニング？隣の領主だったっけ？」
「そうだ　おそれいったか！！」
「国の決めた税を無視して重税を課してる馬鹿領主だろ？」
「なにをっ　俺が直々に殺してやるっ！！」
剣を抜き、かなりスピードで心臓めがけ突きをはなった。
バキッ！！！
アーサーの拳が男の顔面に突き刺さっていた。

「君も貴族の子息なら、よく覚えておきなさい。
貴族とは領民を守ることと引き換えに地位を与えられてるんだ。
領民を苦しめるような領主は最早貴族の資格すらない！」
鼻血を流し口からも血を流した男爵の息子は
「ふんっ　平民に貴族のあり方を説教される覚えはない。
俺は公爵令嬢と結婚してこの地の領主になる身だ。
お前の一族を探し出して、皆殺しにしてやるっ！！」
「僕はこの領地の人間じゃないよ。
『魔狼の森』にくれば僕やシロの一族が相手にしてあげるよ。

魔狼の群れを相手に戦う気があるならいつでも相手になるよ」

「それは恐ろしい話ね。
どこの馬鹿かとおもったらバーニング男爵家の者なのね。」

人垣からでてきた少女が話に割り込んできた。

「今度は小娘まで俺を侮辱するかっ！！」

再び剣を握り締め、今度は少女に剣を向けた。

「私はこんな馬鹿を婿にするほど世間知らずじゃないわ。
私の領民に害をなし、私に剣を向けるとは我がレジアス公爵家に宣戦布告したと思って良いのですね？
早速お爺様から男爵家に使いをだしてもらいましょう」

淡々としかし底冷えのする声で言い放った。

「ちょ・ちょっと待っていただけませんか。姫様とは露知らずご無礼しました」

とあわてて臣下の礼をとった。

「人の領地で無体を働いて『ご無礼しました』ですむとお思い？」

「すぐに父上からもお詫びのご挨拶に伺うようにしますで、ご容赦ください」

土下座してひれ伏した。

少女は一緒に来ていた衛士達にむかい

「この者達を領地の外に放り出してきなさい！！」

と声をかけると衛士達はすぐに男達を連行していった。

少女はアーサーに向き直り

「すまなかったな　旅の者に不愉快な思いをさせてしまった」

と頭を下げた。

「いえいえ　僕もついカッとなってしまいました」

「女の子が泣きながら衛士達のところに駆け込んできた時は驚いたわ」

「アハハ　おはずかしい」

「それに先ほどの君の言葉、貴族として耳が痛かった。胸に刻ませてもらう」

と胸に手をやったが、それはそれはささやかなものであった。

「それにしても恐ろしいほどの強さだね。

あの男爵の馬鹿息子は剣の天才と評判だったたのに、一撃とは……」

「いえ大したことないですよ。相手が僕を嘗めてかかっただけです」
「あなたも、明日の入隊試験は受けるの？」
「いいえ、見学だけさせてもらおうと思ってます」
「そう　残念ね。君なら衛士隊を飛び越えて騎士団に入れるかもしれないのにね。
明日見学するなら受付で名前をいえば席を良いしておくわ。
名前はなんと言うの？」
「アーサーと申します。そんな事していただいてよろしいのですか？」
「領民を救ってもらったお礼よ。遠慮はいらないわ。
そして私の名はフローリア。フローリア・シュベルト・レジアスよ。
明日は存分に楽しんでね」
「ありがとうございます」
アーサーは頭を下げ、立ち去った。

第2章　4話

アーサーはロレンツォの町を散策した後、組合(ギルド)に戻ってきた。

「アーサー君　随分活躍したみたいねぇ～」

ニヤニヤ笑いながら受付嬢が話しかけてきた。

「ええ～なんのことですか？」

「町中で噂になってるわよ。白銀の美少年が生意気な貴族を撃退してお姫様をメロメロにしたって」

「な・なんなんですかその噂は…僕は子供を助けてお姫様に礼を言われただけですよ」

「あらそうなの？」

とシレッと返答しながらニヤニヤはとまらない。

「お姫様　可愛かったでしょう？」

「そうですね～確かに可愛かったですね」

「明日は一緒に観戦？口説いてみれば？アーサー君ならイチコロよ」

「そんなことしませんって」

アーサーは脱力しながら部屋に帰って行った。

そのころ公爵家の食堂ではランバート卿とフローリアが夕食をとっていた。

「フロー　先ほどは男爵家のご子息と面倒事をおこしたらしいな」

「お爺様　私が起こしたわけではありませんわ」

ジトーっと不満気に祖父を睨み付けた。

「衛士隊の報告書にはフローリアの命令で男爵家のご子息と護衛の者を領地から追い出したとあったが？」

「すでに決着がついていた騒ぎに裁決を下しただけです」

「食事が終わったらワシの書斎に来て詳細を話しなさい」

「わかりました」

そのまま黙々と食事を済ませ書斎に移動した。

食後の紅茶を持ってきた侍女が下がるとランバートは孫娘に話すよう促した。

「ことのおこりは、大通りを歩いてた少女に路地から出てきた男爵の馬鹿息子がぶつかったことらしいわ」

「馬鹿息子とは穏やかじゃないな」
「話を最後まで聞けばわかるわよ」
っと頬をふくらませ続きを話し始めた。
「馬鹿息子は少女をなじった挙句に供の者に切り殺させようとしたの」
「なにっ　それで？」
「間一髪で旅の狩人の少年が飛び込んで少女を助けてくれたらしいの。
少年は少女を直ぐに逃がしてくれて馬鹿息子に文句を言ったらしいわ」
「少女は無事じゃったんじゃな？」
「うん　少女はそのまま衛士隊に助けを求めて駆け込んできたわ。
私も明日の警備のことでその場にいたから衛士達と一緒に現場に駆けつけたわ」
「それで取り押さえたのか？」
「私達が駆けつけるまでの間に、馬鹿息子はまた供の者に殺すよう命じたらしいの」
「それで？」

「少年は一人を投げ飛ばして気絶させたんだけど、もう一人の供が魔術で火球を放ったらしいわ。
それを少年の連れていた子狼がはじき返して魔術士を気絶させたって聞いたわ」

「なんと愚かな……」

「それでも懲りない馬鹿息子は自分で剣を抜いて襲い掛かったらしいけど逆に殴り飛ばされたようね」

「どうしようもない馬鹿者だな」

「そのあと少年が馬鹿息子に説教をしたの

『君も貴族の子息なら、よく覚えておきなさい。
貴族とは領民を守ることと引き換えに地位を与えられてるんだ。
領民を苦しめるような領主は最早貴族の資格すらない！』

ってね」

「なんと！？」

「それでも馬鹿息子は、私の婿になって公爵家を継ぐとか、少年の一族を皆殺しにするとか喚いていたわ」

「はぁ～？」

「到着した私にも剣を向けてきたから、公爵家に対する宣戦布告と受け取って良いのだな？と言ってやったら土下座して謝ってきたわ」

「よく言った！！」

「馬鹿息子を怖がらせたのは、私だけじゃないわよ　うふふ」

「お前より怖いもの知らずはいないだろうに……」

「失礼ねっ！！でも少年はね

『僕はこの領地の人間じゃないよ。
『魔狼の森』にくれば僕やシロの一族が相手にしてあげるよ。
魔狼の群れを相手に戦う気があるならいつでも相手になるよ』

と言い放ったの　私でも怖かったわ」

「『魔狼の森』に手をだせば『神狼』まで敵に回してしまう。
そんな無茶ワシでもできんわいっ！！」

「まあ　こんなことがあったから馬鹿息子達を領地から追い出したってわけ」

「よしわかった。お前の判断は間違っていない」

「でしょ」

「その少年には会ってみたいのぉ」

「そういうと思って明日見学に来たら受付で名前を言うように言っておいたわ」

「でかしたっ！！」

「すっごい美少年なのっ！！あんな綺麗な人間がいたなんて信じれないわ！！」

「公爵家の姫としての自覚をわすれるなよ。
お前の婿はワシのメガネにかなわなきゃダメだぞ」

「私より強い……できればお爺様より強い婿をさがしてよ！！顔も性格も良くないとだめよ！！」

「おう　まかせとけっ！大陸中から探してやるっ！！」

仲の良い爺孫であった。

第2章　5話

夜明け前組合（ギルド）裏にある訓練場で、アーサーは日課の鍛錬をしていた。
柔軟でしっかり身体をほぐし、体術の基本型を繰り返した後シロを相手に自由組手
縦横無尽に駆け回るシロの攻撃を流れるような動作で受け流していき、今まで閉じていた目を開くとスッと手を伸ばしてシロの首を掴んで動きを止めた。
ふぅ～と息を吐いて緊張を解いた。

「小僧　すさまじいな」
昨日食堂で会った男が声をかけてきた。
「そうですか？基礎練習だけだったんですけどね」
「目を閉じてあれだけの攻撃をかわせるなんて、並の技量じゃできねえぞ？」
「僕の住んでた森じゃ、気配だけでかわせるようにならないと魔獣に殺られちゃいますから必死で覚えました」
「まさに命がけだな　ワハハ……そんな小僧に喧嘩売った馬鹿貴族は不幸だったな　ギャハハ」

「……今日はいよいよ入隊試験ですね。がんばってくださいね　応援してますから」

「ありがとよ　しかし小僧の体術見てると自信なくすぞ」

「あはははは　そんなこと言ってると落ちちゃいますよ」

「それもそうだな。精一杯がんばるさ」

と男も鍛錬を始めた。

アーサーは朝食の後、試験会場に来て受付を見ていた。

（申し込みの人でいっぱいだなぁ～　どうしようかなぁ～）

しばらくすると「おや！？君は昨日の？」と通りかかった衛士が声をかけてきた。

「おはようございます」

「おはよう　こんな所で何をしてるんだい？」

「昨日お姫様に受付に来いって言われたんですけど、人が多くて……」

「そうか　んじゃついておいで」

と受付に近づき受付の衛士と何か話した後
「観戦の席が用意してあるから案内するよ」
と観客席入り口とは違う方向に向かって歩きだした。

「あれ？観客席はあっちじゃないんですか？」
「あっちの席からじゃ遠くてよく見えんからな」
と微笑しながら歩き進んで行った。
建物の中に入りひとつの扉の前にたどり着き、扉の両脇に立っている衛士に向かって
「アーサー殿をご案内してきた」
と声をかけた。
「お待ちしておりました」
と扉脇の衛士はアーサーに向かって頭を下げ扉を開け中に入るよう促した。
部屋の中にはフカフカの絨毯が敷かれ、豪華な椅子が並んでいた。

正面の窓からは試合会場が間近に見え、その向こうには入隊試験の様子が一望できるようになっていた。

「おはよう　アーサー君」

「おはようございます。本日は席をご用意いただき、ありがとうございます。

私のような者がこのような場所に入ってよろしいのですか？」

「いいのよ　気にしないで気軽にしてなさい」

とフローリアは自分の隣の席に座るよう促した。

「失礼します」

「堅苦しいわねぇ～　気軽にしなさいって言ったでしょ」

と少し頬をふくらませて言った。

後ろに控えていた侍女風の少女が笑いながら

「姫様は誰にもこんな感じなの。遠慮なさらないで寛いでください」

「はい　わかりました。しかし、こいつまで部屋に入れていいんですか？」

とチラリとシロを見た。

「昨日領民を守ってくれたのは、その子も一緒でしょ？それならその子も恩人いや恩狼ってことになるから大丈夫よ」

「ありがとうございます」

「その子に触っても良い？」

「はい　大丈夫ですよ。名前はシロバンテイン、僕はシロって呼んでます」

とシロを抱き上げフローリアに近づけた。

侍女風の少女も寄ってきて、フローリアと一緒にキャアキャア言いながらシロを撫でてみたり抱いてみたりと大騒ぎした。

「姫様　それにしてもこの子の魔力は凄いですわ」

「そうなの？」

「普通の魔狼の数倍はありそうです」

侍女はアーサーに視線を送った。

「シロは『魔狼の森』のボスの子供なんです」

「「ええっ！？」」

「シロの親は僕の乳母みたいなもんですから、シロとは兄弟みたいなもんですね」

「じゃあ昨日馬鹿息子に言った『魔狼の森』の一族がって話は冗談じゃなかったのね」

「そんなことで冗談言いませんよ。
『魔狼の森』の魔狼のほとんどは『神狼エルザ』の眷属ですから、一貴族くらいじゃ戦いになりませんよ」

「じゃあシロ君は『魔狼の森』の王子さま？」

「そうなりますね」

へぇ～と言いながら、またシロを抱きしめて撫で回していた。

話をしているうちに別の侍女がお茶を用意してくれた。（シロにはミルク）

「後でお爺様がアーサー君に会いたいって言ってたけど、良いかしら？」

「はい　僕もお会いしたいと思っていました」

「お爺様のこと知ってるの？」

「父は子供の頃からランバート様に武術を習ってたらしいです」

「へえ、そうなの」

「ロバート様とも仲が良かったそうですよ」

「お父様とも？」

「ええ、そう聞いてます」

「お父上は一緒にいらっしゃらなかったの？」

「僕が生まれてすぐに両親共他界しちゃったので……」

「ごめんなさい、嫌なこと言わせちゃったわね」

「いえ、別にいいですよ。気にしないでください」

「お父上の話をしたらお爺様も驚きそうね。
お爺様はしばらく入隊試験を見たり試合の審判をしてからこちらに来るから、驚く顔を楽しみにしてようね」

と悪戯っぽく微笑んだ。

第2章　6話

「姫様、入隊試験のほうは始まるようですよ」

「あら今回は参加者多いわね、クレア」

「姫様、例の噂を信じて、見学も兼ねての参加が多いのだと思われます」

「例の噂？」

「あらアーサー様はお知りじゃないのですか？姫様の護衛役が婿選びって」

「そういえば少しだけ聞いたような？」

「アーサー君、それがね根も葉もないデマなのよ。
本当は私の練習相手を決めるだけなの。
最近お爺様もお父様も忙しくって相手してくんないから相手がいないのよ」

「それじゃあ集まった貴族のご子息は？」

「噂に踊らされた馬鹿ですね」

アッサリと言い放つクレアに苦笑しながら

「なんか可哀想ですね」

「それでも腕が本物なら騎士団に推挙するつもりだから、彼らにもメリットはあるのよ」

「それなら良いんですが……下手したら恨まれますから」

窓の外では入隊試験を受ける人々が並び、身体をほぐしていた。

騎士が掛け声をかけると一斉に走り出した。

「みんな何処に行くんですか？」

「一次試験のマラソンよ。ここから街道沿いにバーニング領の手前で折り返し帰ってくるの。片道３０ｋｍくらいよ。上位５０人が合格ね」

「じゃあ　これで四分の一くらいになっちゃいますね」

「まあこれくらいできなきゃ騎士や衛士は務まらないわ。クレアでも5時間かからないわよ。まあ合格ラインは6時間ってとこね」

「姫様　そろそろこっちも始まりますわよ」

「昨日一人減ったから参加者は１５人ね」

「騎士団の人は3人だけなんですか？」

「あらよく知ってるわね」
「昨日組合(ギルド)で聞きました。『疾風のレオン』『爆風のレックス』『千手のリック』でしたっけ」
「アーサー様　騎士団若手の有望株でございます」

組合せ抽選も終わり、参加者は左右に分かれた。
「あら、最初からお爺様が審判をするみたい」
試合場をみると白髪に立派な髭をはやしガッチリした人が立っていた。
「強そうですねぇ～　参加者が萎縮しちゃいそうですね　アハハ」
「ランバート様は大陸有数の武術家ですからね。でも、これくらいで萎縮するようだったら姫様の練習相手はできませんわ」
「クレア　それじゃあ私が怖い人みたいじゃないの！」
「『みたい』じゃなくって怖い人です。私なぞ何度泣かされたことやら」
「プッ！！おふたりとも仲が良いんですね」
二人は顔を見合わせニッコリと微笑むと

「クレアは私が１０歳の頃から傍に仕えてくれてるから、侍女っていうより友達みたいなものよ」

「姫様　もったいない」

「クレアさんは治癒とか得意そうですね。フローリア様が怪我しても安心ですね」

一瞬厳しい目をして

「アーサー様は何故そのようにお思いになるのですか？」

「だって『水の精霊』が回りに集まってますから……」

なんでもないことのようにアーサーは答えた。

「精霊を感じれるんですか？」

「感じるっていうより見えますよ。森には沢山の精霊がいますから慣れてます」

ニコリとアーサーは笑顔で答えた。

「姫様以外には秘密にしておりますので、他言無用でお願いします」

「誰にも言いませんよ。僕も怪我をしたらよく精霊が直してくれてましたから、クレアさんの意に沿わぬことはしません」

「私にも精霊が見えるようになるかしら？一度見てみたいわ」

「フローリア姫なら見えるようになりますよ」
「本当？」
無邪気に言うお姫様も見て、アーサーはニコリと頷いた。

「姫様　はじまりましたよ」
「アーサー君の見立てでは誰が勝つ？」
「騎士団の３人以外は同じくらいの技量ですね。みんな経験も少なそうだし、運次第ってとこですね」
「やっぱりね。昨日の馬鹿息子はどう？」
「そうですね。他の子息達よりは強いけど騎士団には及ばないってとこですね」
「その程度？」
「とても天才って言われるような腕じゃないですよ」
「彼は王都の大会でも突きだけで優勝したりしてたのに？」
「あはははは　突きをかわされたら身体が流れてましたよ」
「突きだけってこと？」

「そうみたいでしたよ。突きをかわされることなんて考えてなかったようでした」

「まあ貴族だけの大会だったからね」

「きっとクレアさんのほうが強いですよ」

とクレアを見た。

「アーサー様、何故でございますか？」

「立ち姿だけでもある程度はわかりますよ。フローリア様は騎士団の3人よりも強いですしね」

「おそろしい眼力ね」

「相手を見て強さを測るのは狩人の基本ですから……そうしないと逆に狩られちゃいます」

「毎日命懸けの修行をしているようなもの？」

「そうですね。一瞬の判断ミスで終わりですからね。試合のように次はありませんから……」

「それを聞けばアーサー君の強さに納得がいくわ。でも他の狩人みんなが強いわけではないでしょ？」

「みんな自分の技量以上の相手とは戦わないからですよ。僕がいた『魔狼の森』では、そんなこと言ってられませんでしたからね。

それに魔狼達が助けてくれましたから」

試合そっちのけで話に夢中になってるうちに1回戦は終了したようだった。

第2章　7話

2回戦の途中でマラソンのトップグループが帰ってきた。
死にそうな顔で地面にへたり込んでいるものが多いなかで、まだまだ余裕とばかり足踏みをして息を整えている男を見てアーサーはホッとした。
組合(ギルド)で会った男は1回戦を突破したようであった。

予想通り2回戦の勝者は騎士団の3人と貴族の子息ひとりだった。

「アーサー君　今までの戦いを見てどう思う？」

「貴族のご子息はここまでですね。騎士団の3人は互角です。
『疾風のレオン』さんはスピードはありますが、一撃の破壊力がありません。
『爆風のレックス』さんは一撃必殺ですがスピードも技量も足りません。
『千手のリック』さんは一番技量がありますが、積極性がないので防戦から隙を窺う戦術なので負け難いですが決め手に欠けるってとこですね」

「それぞれの長短を的確に言い当ててるわね」

「姫様　次の試合は午後からですので、昼食をお持ちしますね」

クレアは部屋を後にした。

「アーサー君　昼からはお爺様も一緒に見ると思うからよろしくね」

用意された食事は二人分とシロ用の生肉だけだった。

「あれっ　クレアさんのは？」

「使用人が主人と一緒に食べるわけにはまいりません」

「クレア　他に誰もいないんだから大丈夫よ。一緒に食べましょうよ」

「しかし……」

「クレア　これは命令です」

「かしこまりました」

その後3人と1匹は歓談しながら食事をし、食後のお茶を楽しんでいた。

ガチャっ

「フロー　見ておったか？」

と言いながら白髪に立派な髭を蓄えた人が入ってきた。

「ええお爺様　少しがっかりだわ」

アーサーは立ち上がって頭を下げた。

「お爺様、彼が昨日お話したアーサー君ですわ」

「ランバート様　席をご用意していただきありがとうございます」

「よいよい　気にせず頭を上げてくれ。領民を助けて貰ったワシのほうが礼を言わねばならんのだから」

「それよりお爺様、アーサー君のお父上はお爺様の弟子だったそうよ」

頭を上げたアーサーを見て、ランバートは目を瞠り

「も・もしや……」

アーサーはニッコリ微笑み頷いてみせた。

「アーサー殿は、お母上に瓜二つじゃ目は父上似ですな。アーサー殿は今どこにお泊りかな？」

「今は組合（ギルド）の宿泊施設に泊まっています」

「そうか……クレア、客間を用意してくれ。

それからアーサー殿の着替えと晩餐の用意をしてくれ。

アーサー殿、組合(ギルド)のほうには使いを出しますので、当城にお泊りください。
つもる話もございますゆえ」
「お爺様の慌てた姿は初めてみましたわ」
とフローリアはコロコロと笑った。

「お爺様、アーサー君は凄いわよ～　今までの試合結果ほとんど言い当ててるのよ」
「それは、たいしたもんじゃな」
「そのうえ騎士団3人の長所や弱点まで言い当ててるのよ」
「アーサー殿は余程の鍛錬をされてきたようですな」
「『魔狼の森』で魔狼達と一緒に狩りをして命懸けでがんばったそうよ」
「その話も後でゆっくりお聞きしたいもんじゃ」

準決勝も終わり、決勝戦は『爆風のレックス』対『千手のリック』の対決となった。
「アーサー殿はこの試合どう見ますかな？」

「そうですね。
レックスさんの攻撃をリックさんが受け流す展開となりますが、両者共いままでの疲れがでるでしょうから、体力に勝るレックスさんが有利だと思います」

「私の予想も同じね」

「なんとまあ　見る前から結果が分かってしまっていれば面白みも欠けるのう　わはははは」

「お爺様　私の練習相手はどうなるんですか？」

「今のままでは該当者なしじゃの。フローより弱いんじゃ練習にならんじゃろう」

決勝戦も予想通りに終わり、入隊試験の合格者発表のためランバートは部屋を出て行った。

「アーサー君はいつまで滞在できるの？」

「さあ？ランバート様に会うのが旅の目的のひとつでしたから、しばらくはゆっくりできますよ」

「そのために私の我侭も役にたつのね」

「お陰様で早くランバート様にお会いすることができました。
可愛い姫様ともお話ができましたから、僕にとっては幸運でした」

「まあ　可愛いなんて……」

うおおおおぉぉぉぉーーー！！

獣のような雄たけびを上げて会場で男がガッツポーズをしていた頃、
お姫様は赤い顔でクネクネしていた。

第2章　8話

アーサーは観戦が終了した後、クレアに案内され用意された客間でメイド達に取り囲まれ着せ替え人形のように着替えをさせられていた。

「いや、僕はこのままで「ダメです！！」」

「先代様のご指示ですので着替えていただきます！！」

「ねぇ～　これなんてどう？」

「こっちのほうがいいんじゃない？」

ワイワイとアーサーの気持ちを無視して着替え作業は延々と続いた。

「どう？できた？」

とフローリアが入ってきた時には、グッタリと疲れきった顔をしたアーサーがソファーに座り込んでいた。

数十着あった中から5着程度に選ばれていた着替えを見て

「これでいいんじゃない？」

とアーサーの服はあっさり選ばれた。

「アーサー君、着替えたらすぐに書斎に行ってくれない？お爺様がお話があるって言ってたわ」

着替えを手伝うというメイド達を追い出して、さっさと着替えたアーサーは迎えにきたメイドに連れられて書斎に向かった。

コンコンッ

「アーサー様をお連れいたしました」

「よし　入ってくれ」

メイドはドアを開け中に入るよう促した。

メイドは早速お茶を用意し部屋を去って行った。

「アーサー殿、いや殿下っ　よくぞお越しくださいました」

とアーサーの前に片膝をつき臣下の礼をとった。

「ランバートさん　頭を上げてください」

と立ち上がるように促した。

キンッ！

とガラスを叩いたような音をたて部屋の空気が変わった。

「殿下、今の音は？」

「部屋に遮音の結界を張らせてもらいました。これからの話は誰にも聞かれないように……」

「わかりました。ささ、どうぞお掛けください」

とソファーに座るよう勧めランバートもアーサーの向かいに腰掛けた。

「その『殿下』ってのは止めてくださいませんか？『アーサー』で結構です」

「さっそくアーサー様の無事を国民に発表してお祝いせねばなりませんな」

満面の笑顔でランバートは言った。

「ランバートさん、それは待ってください。しばらくの間秘密にしていただけませんか？」

「それは、どうして？」

「僕はまだ人間世界のことを多く知りません。
しばらく僕に国のことや貴族のことを教えてもらえませんか？
それに僕にはやらなければならない事があります」

「お教えするのはかまいませんが、せめて陛下や重臣達だけにでも知らせてはいけませんか？」

「今のところは父上の親友だったロバートさんと伯父上だけにしてもらえませんか？」

「やらなければならない事のためですか？」

「はい。本人である証に、これを伯父上にお渡しください」

と懐から産衣と王太子の短剣を取り出した。

「かしこまりました」

と恭しくランバートは受け取った。

「できれば伯父上には内緒にしておいて、突然現れてビックリさせるのも面白いなぁ～なんて……」

「わっはっは　陛下の驚く顔が目にうかびますわい」

アーサーは急に真剣な顔になりランバートを見た。

「これから話すことは他言無用でお願いします」

「もちろんです。なんなりと」

「あの事件の詳細を知っていますか？」

「ワシも現場におりました故、知っております。
アーサー様が突然消え去って大騒ぎになりましたが、犯人はすぐに自害してしまい背後関係を調べても何もわかりませんでした」

「僕が消えたのは、ある方が魔術で転移させて逃がしてくれたんです」

「ある方とは？」

「母上の師匠といいますか、母上が子供の頃に『神の声』を聞く方法を教えた方です。
ときどき念話で母上と連絡をとっていてあの儀式のことを知って、遠見の魔術で見ていた時にあの事件が起こり慌てて僕を転移させて逃がしてくれたそうです」

「そうとうの魔術士のようですな」

「その時、犯人から得体の知れない魔力を感じ僕を直ぐに返すのは危険と思い匿ってくれたそうです」

「それで『魔狼の森』でお育ちになったのですか？」

「実は僕が本当に育ったのは『神狼の森』です。僕を助けてくれた方が神の許しを得て、『神狼エルザ』に預けられたんです。
このシロはエルザの子で、僕の護衛として傍にいてくれます」

「な・なんと……」

「そこで自分の身を守る為に戦い方を学びました。だから僕は人間世界の知識があまりないんです」

「……」

「今大陸中で異変が起きているのはご存知ですか？」

「異変ですか？多少あちこちで争いが増えているくらいしか……」

「実はあの事件と類似した事件が大陸中で起きてるんです。『神の加護』を受けたものや「上位精霊の加護』を受けたものが次々と殺されてるんです」

「それは誠ですか？」

「はい。詳しい事は精霊達が調べてくれています」

「それを解決するのがアーサー様の使命というわけですな？」

「その通りです。
相手は神にも精霊にも気づかれずに犯行におよんでいます。
これは普通ではありえません。
その相手を倒せるのは『神の加護』を受けたものだけだと思っています。
神獣や精霊に育てられた僕が解決することが使命だと思ってます」

「わかりました。できる限り手助けさせていただきます。そんな大事な話を何故ワシなんぞに？」

「僕が信用できるのは、父上の師匠であったランバートさんと親友であったロバートさん、伯父上くらいなんです。旅で見てきた民の顔をみて信用のできる人と確信したからです」

「お褒めにあずかり光栄です。それで、あの馬鹿貴族を叩きのめしたと　ワッハッハ」

「いや　お恥ずかしい……」

「それでは、しばらくここに逗留していただいてお勉強していただかねばなりませんな」

「そうさせていただくと有難いです」

「では、アーサー様はフローリアの練習相手ということで城の者には伝えておきましょう。国のことや貴族のことについては、ワシが直接教えさせていただきます」

「人前で『様』付けはやめてくださいね」

「かしこまりました」

ランバートは話を終え部屋に戻って行くアーサーを見送り

「神はどこまで過酷な人生を殿下にあたえるのか」

と呟いた。

第2章　9話

部屋で寛いでいるとメイドが

「アーサー様、お食事のご用意ができましたので食堂においでください」

と声をかけ、食堂まで案内された。

「アーサー君、ささやかだが夕食を用意させてもらった。可愛い弟子のご子息じゃ自分の家と思って気軽にすごしてくれ」

「ありがとうございます」

「アーサー君、突っ立ってないでそこに座ってちょうだい。シロにも用意してあるから安心してね」

シロには数種類の生肉の盛り合わせが足元に用意されていた。

シロは一度アーサーを見て、フローリアの足元にある生肉に噛り付いた。

「フロー、アーサー君はしばらくここに客人として逗留してもらって、お前の練習相手を務めてもらうことになったから、今日からアーサー君はお前の師匠じゃ」

「よろしくお願いします。お様師匠」

「こちらこそお願いします。それと師匠はやめてくださいよ～」
それからランバートはメイドや執事に目をむけ
「聞いての通り、アーサー君は公爵家の客人じゃ。失礼のないようにな」
「「かしこまりました」」
と一斉にアーサーに一礼した。
「アーサー君も何かあったら遠慮せず言ってくれ」
「なにからなにまで本当にありがとうございます」
「アーサー君、練習はいつから？」
「姫様、明日の朝からでも結構ですよ」
「フロー、午前中は練習じゃが、午後からアーサー君には勉強してもらうことになっておる」
「あら？なんのお勉強ですか？」
「国のことや貴族のことなどじゃな」
「狩人のアーサー君が国や貴族のこと？」
「アーサー君のお父上は貴族じゃったんじゃ。

それをアーサー君は知らんでな、それならとワシが教えてやろうかと思ったんじゃ。
ロバートとも友人じゃったし、できれば再興させてやりたくてな」

「ランバート様、面倒おかけします」

「それじゃあ、私が教えてあげるわっ
難しいことはお爺様に任せるけど、基本的なことなら私でも教えられるわ」

と拳を握り締め言い放った。

食後のお茶を飲みながら、明日からのことを話し合った。

日の出から朝食までは基礎訓練。

朝食後少し休憩してから実線的な訓練。

昼食後フローリアによる貴族教育。

午後のお茶の後は自由時間。

夕食後も自由時間。

というスケジュールが決定した。

「ねえ、アーサー君は魔術や精霊術も使えるの？」
「少しだけなら」
「ん？フローは魔術に興味があるのか？」
「ええ。昨日馬鹿息子の護衛が使った魔術をシロ君が跳ね返したのをみて、私にもできないかなって」
「シロほどの障壁は難しいかもしれませんが、かなりの魔力をお持ちなので、身を守る程度の魔術は覚えても良いかもしれませんね」
「おおっ　ワシも習いたいぞっ」
とランバートも目をキラキラさせてアーサーを見た。
「ランバート様も？お習いになったことないのですか？」
「ワシは武術一筋じゃったから、いままで習う機会がなかったんじゃ。
正面から正々堂々相手を打ち破ることしか考えておらんかった」
「それじゃあ魔術の攻撃を受けた時は、どうされていたんですか？」
「避けるしかなかったの。大体は相手が魔術を放つ前に切り伏せておったが」
「まあ、お爺様ったら、それで素早い動きができるんですの？」
「武術の才にだけは恵まれておったからな。ロバートも一緒じゃぞ

？」

「それなら私が魔術も習得して、公爵家の武術をより高みに上げてみせます」

「頼もしいことを言ってくれるじゃないか　では婿には魔術の才も必要じゃなっ」

「なんでそこで婿の話になるのよっ」

「アーサー君、基礎訓練ってどんなことするの？走ったり、腕立て伏せとか？」

「明日、動きを見せてもらってから決めようと思ってます。なんならシロの一緒にランニングでもしてみますか？今日の入隊試験のコースだと2時間くらいのペースだと思いますけど……」

「無理……ってそんなの人間にできるわけないじゃないっ！！」

「アハハ　それもそうですね」

「人間にできるレベルにしてちょうだい」

「かしこまりました。お姫様」

「その『姫様』ってのやめてよ。フローリアかフローかリアでお願い」

「じゃあリア様で」

「様もいらないわよ。アーサー君は師匠なんだから呼び捨てで良いわ」

「恋人みたいじゃないかっ　フロー、アーサー君に惚れたか？」

「お・お爺様っ　昨日会ったばかりなんですよ」

こうして夜は更けていった。

ちなみに、シロは知らん顔して寝ていた。

第2章　10話

夜明け前、城裏にある鍛錬場でアーサーは日課の鍛錬をしていた。

「おっ小僧　今朝も頑張ってるな」

とにこやかに昨日合格したばっかりの男が声をかけてきた。

「おはようございます。合格おめでとうございます」

「ありがとよ。でも何で小僧がお城に泊まることになったんだい？」

「僕の父がランバート卿の弟子だったんです。
そのことを話したら父のことを、よく覚えておいでで城に留まれって言われたんですよ」

「そうか～　でも良かったな。小僧も武術習うのか？」

「いいえ、僕は世間知らずなので、世の中のことを教えくれるそうです」

「そっか、お勉強ねぇ～　俺なら逃げ出しちまうぜ」

といかにも嫌そうな顔をした。

「そういえば、姫様の護衛は今日発表らしいな。
昨日の試合で『爆風のレックス』が優勝したから、レックス殿だろうけどな」

「どうなんでしょうね」
と苦笑まじりに曖昧に返事をした。

「集合っ！！」
大きな声がかかり、それぞれ談笑したり身体をほぐしていた騎士団や衛士隊の人が整列した。
どうしたものかとキョロキョロしている二人をランバートが手招きをして隣に立たせた。

「おはよう」

「「「おはようございますっ！！」」」

朝の挨拶が終わったあと騎士団長が
「今日は先代様から昨日の結果についてお話がある」
とランバートに視線を送った。
「まず昨日の入隊試験の結果だが、合格者はひとりだけだった。名前はダンクル。なかなかの成績であった。衛士隊で鍛えてやってくれ」
ランバートはダンクルに視線を送り挨拶を促した。

「ダンクルと申します。未熟者ですが宜しくお・お願いしましゅ」
と噛みながら深々と頭をさげた。
「まかしとけっ」
などと声がかかり拍手で迎えられ、衛士隊の最後尾に並んだ。
「次にフローの護衛についてだが、昨日の試合内容から全員力量不足であると判断した。
そこで、昨日からワシの客人として逗留しているアーサー君に当分の間フローの練習相手を務めてもらうことになった。
皆も仲良くしてやってくれ」
ランバートはアーサーに視線を送り挨拶を促した。
「アーサーです。よろしくお願いします」
と挨拶した。
「先代様っそんな少年が姫様の相手などと納得できませんっ」
「我等が力量不足というのも納得できませんっ」
「狩人風情に姫様の相手なぞ許せませんっ」
「レオンよ、ワシの客人と知って『狩人風情』などという言葉を吐いたんだろうな」
ランバートは鬼のような形相で睨み付けていた。凍りついた雰囲気

の中でアーサーは

「まあまあ　ランバート様、僕が三人と試合でもすれば納得していただけるんじゃないですか？」

問いかけた。

「アーサー君がそういうなら……」

「お爺様、私も見てみたいわ」

キラキラと目を輝かせフローリアはランバートを見た。

「わかった。誰がアーサー君と試合をするんじゃ？」

「「「わたしが」」」

昨日試合に参加した3人が答えた。

「3人一緒で良いですよ」

とアーサーはあっさり答えた。3人は馬鹿にされたと思い真っ赤な顔で

「あとで言い訳はきかんぞっ」

と言いながら木剣を準備した。

「さあはじめましょうか？」

と素手で声をかけた。

「我々相手に素手とはっ　嘗めるにもほどがあるっ！」

と『疾風のレオン』が飛び出した。

目で追えないほどのスピードで攻めるレオンの攻撃をなんなくかわし、すれ違いざまに首筋に手刀を落とした。レオンはアッサリ意識を手放した。

次に『爆風のレックス』がアーサーの背ほどもある大剣を振るいアーサーに襲い掛かった。

驚異的な腕力で縦横無尽に振り回される大剣をかいくぐり、懐に潜り込んだアーサーは踏み込んだ勢いそのままで拳を腹に叩き込んだ。

グエェェェと呻きながらレックスはのた打ち回った。

最後に残った『千手のリック』は驚きながらも、剣を正眼に構えアーサーの様子を窺った。

アーサーの身体がブレたと感じた瞬間、手首に衝撃がはしり剣は叩き落されていた。

あまりにも短時間に決着がつき、騎士団や衛士隊の面々はアングリと口を開け呆然としていた。

「アーサー君　すっご～～～～い」

「想像以上じゃ」

「凄まじい腕ですな」

とフローリア、ランバート、騎士団長は感嘆の言葉を漏らした。

アーサーは気を失っているレオンに活をいれ、レックスの傍に寄って行ったシロが癒しの魔術で治癒していた。

「なにがあったんだ？」

とレオンは不思議そうな顔で周囲に尋ねた。

「アーサー君の技量に不満があるものはいるか？」

「「「とんでもございません」」」

「アーサー君　解説をお願いでしるかしら？」

「レオンさんはスピードに頼って動きが直線的なので、ギリギリでかわして手刀を首筋に落としました。
次のレックスさんは腕力で剣を振り回してたので隙が多く、懐に飛び込んで拳を、最後のリックさんは様子見で攻撃の意志がなかったので速攻で攻めました」

「3人の弱点を見事についたわけじゃな」

「アーサー殿、自惚れておった3人には良い薬となりました。感謝します」

「皆　自分の力を過信しないよう精進するのじゃ」

「鍛錬を開始するっ　はじめっ！」

全員鍛錬場に散らばり、それぞれ鍛錬を始めた。

第2章　11話

アーサーは集合場所に残っていたフローリア達に近づいて、鍛錬場の端に控えていたクレアに手招きをした。

「ランバートさん、姫様の鍛錬にクレアさんも付き合っていただいてかまいませんか？」

「それは構わんが、どうしてだね？」

「ふたり一緒のほうが、自主鍛錬の時にもお互いアドバイスし合えると思いまして……」

「それもそうじゃの。クレアはどうじゃ？」

「わたくしも一緒でございますか？」

と目をまるくして

「わかりました。鍛錬できるよう着替えてまいります」

と走り去って行った。

「それでは、まず最初に今まで教わったものを見せていただけませんか？」

とフローリアを見た。

「もうっアーサー君。『姫様』禁止って言ったでしょ」

といいながら少し広い場所に移動して公爵家の型を披露した。

「ランバートさん、動作のところどころに『精霊武術』の型が混ざっているようですね」

「さすが、よくわかりましたな。ワシの代で精霊神殿騎士達が使っていた型をとりいれたんじゃよ」

「僕が習ったのは『精霊武術』でしたから、教えやすいです」

「どの属性かね？」

「４属性全てです」

「それは興味深いな。今度拝見させて貰いたいですな」

「ぜひ我々騎士団にもご教授願いたいものですな」

「団長さん、それはかまいませんよ」

フローリアの型が終わり息を整えているところにクレアが帰ってきた。

「アーサー君、どうだった？」

「よくまとまっていたと思います。
でも、柔軟性が乏しいですね。
最初は徹底的に身体をほぐしましょう」

「げぇっ　柔軟？一番苦手なのよね」

「だからやるんですっ　クレアさんと一緒に柔軟体操をやってください。はじめっ」

フローリアとクレアは早速柔軟体操にとりかかった。
まずは立ったままでの前屈……指先すら地面に届かない。
続いて開脚……

「柔軟体操とは……今まであまりやらせなかったな」

「ランバートさん、彼女達は男ほど力はないです。
その分しなやかさを強化して、力押ししてくる相手を受け流せるように柔軟性を増したいと思っています。
そうすれば隙も減って攻撃にも幅がでてきます。
朝食の後はスピード強化です。
しっかり絞らせてもらいますよ」

「ワハハ　思う存分やってくれ」

簡単な柔軟の後の股割りがはじまると「いたたたた」とか「ぎえええええ」とかおよそ若い女性らしくない呻き声があがった。

「アーサー君、どのくらい柔らかくなればいいの？」

と息もたえだえに聞く女性陣に、これくらいとアーサーが手本をみせた。

両足を真横に広げ、そのままの体勢で前屈をしてみせた。

「「無理……股関節はずれる……」」

「毎日すればできるようになります。頑張ってください」

とにこやかに微笑んだ。

朝食前の練習は、柔軟だけで終わり皆で朝食に向かった。

朝食は公爵家の食堂ではなく、騎士団用の食堂で全員で食べるのが恒例のようだった。

「姫様、随分悲鳴をあげておられましたね」

と騎士団の面々にからかわれながら、和やかな雰囲気で食事がはじまった。

「騎士団や衛士隊も柔軟やってみれば良いのよ」

とフローリアは半分むくれながら言った。

「それは良いお考えですね。よし明日から皆もやるように！！」

騎士団長の一声で団員達は「うえええぇぇぇ！」と返事をした。

アーサー達は朝食後少し休憩してから鍛錬場に戻った。

「今度は何をするの？」

「これから、お二人交代でシロを捕まえてもらいます。簡単でしょ？」

「それだけでいいの？」

「シロ、遊んでもらえ」

フローリアが先にシロを追いかけはじめた。ヒョイッヒョイッとシロは簡単にかわして行き、３０分後にはゼイゼイいいながらフローリアは膝をついた。

「姫様っ情けないですわ　わたくしがお手本をお見せします」

と元気にクレアが飛び出して行った。結果はフローリアと同じであった。

「アーサー君、これが役にたつの？」

「お二人は今まで自分より大きな相手としか鍛錬してないでしょ？」

「そうね、お爺様やお父様が相手だったからね。クレアも私より大きいし……」

「だから重心が高くて足元が不安定になるんです」

「そんなに足捌きが変？」

「無駄が多いですね。シロの動きについていけてないでしょ」

「だって早すぎるんだもん」

「瞬発力が足りないのと、柔軟性が足りないのでバランスが崩れてます。
それと、お二人の動きは直線的でフェイントもないですからね」

「もっと考えろってことね」

「僕とシロの組み手を見せますので、参考にしてください」

と早朝の組み手を見せた。

「すごいわ～、目を閉じてすべての攻撃を受け流せるなんて……それに無駄な動きがないわ」

「アーサー様、凄すぎです」

二人は尊敬の目で見ていた。騎士団や衛士隊の面々も鍛錬を忘れて見入っていた。

「フローリア様、クレアさん　剣は手の延長と考えてください。体術が基本ですから頑張ってくださいね」

「「はいっ　お師匠様っ！」」

笑いながら午前中の練習は終了した。

第2章　12話

昼食は公爵家の食堂でとることになった。

ランバートとアーサーが待っていると、クレアとフローリアが支えあうように入ってきた。

「フロー、随分扱かれたようじゃな。クレアも一緒に座れ」

「わたくしも一緒でございますか？」

「おお、鍛錬の感想も聞きたいからの」

「お爺様の鍛錬の倍はきついです」

「わたくしも……身体中が痛くて……」

「ええ～まだ序の口ですよ」

「「アーサー君（様）の鬼っ！！」」

「だってまだ基礎の準備段階ですよ？」

「「はぁ～」」

「それにしても、アーサー君の組み手は素晴らしかったな。あの流れるような動きは舞をみているようじゃった」

「あれは、ただシロの攻撃を流していただけです。5歳の時にはで

きましたよ」

とサラリと言った。

「「わたしたちは5歳以下……」」

「身体が慣れてくれれば、すぐできるようになりますから、安心してください」

「「がんばりますっ」」

「アーサー君、午後からはフローリアに色々教えてもらってくれ」

「よろしくお願いします」

普段はフローリアが家庭教師から勉強を習っている学習室に場所を移し、まずはアーサーの知識の程度を測るため簡単な質問から始まった。

「アーサー君、文字は読み書きできる？」

「はい、大陸中の言葉なら問題ないです」

「大陸中全部？」

「はい」

驚いた顔で（今度教えてもらおうっと）などと思ったのは内緒であ

る。

「大陸の地理は？」

「国の名前や場所はわかりますが、領地とか領主とかは知らないです」

「この国のことも？」

「ええ、森の名前や森のボスは知ってるんですけど、人間のことは……縄張り争いしたことないですから……」

「アハハ　森の獣とは領地争いなんてしないものね。じゃあ爵位のことは？」

「貴族が支配者ってことは知ってます。森でいうボスのことでしょ？すべての獣の頂点が『神獣』でこれが王様、森のボスが貴族、森の獣が平民って感じですか？」

「そうね。それで良いと思うわ。
それじゃあ、まず貴族の説明をするわね。
貴族の種類は『公爵』『侯爵』『伯爵』『子爵』『男爵』の５種類で、階級もこの順番よ。
この階級の差は絶対的なもので、上位の貴族に無礼をはたらくことは許されないわ。
殺されても文句言えないってことね。
もちろん理不尽に殺すことは許されないけどね」

「じゃあ、この前の子息をリアが殺しても問題にならないってこと？」

「そう、あの馬鹿息子は公爵家の領民を理不尽に殺そうとしたし、私に無礼を働いたから問題ないわね。
ましてや爵位最下位の男爵家が最高位の公爵家にした振る舞いだから、だれからも咎められないわ」

「怖いですね」

「それから、この国では貴族の数が決められてて公爵４家、侯爵８家、伯爵１６家、子爵３２家、男爵４０家の１００家だけなの」

「思ったより少ないですね」

「跡継ぎがいなかったり、罪を犯したりして爵位を返上させられたりした場合だけ新しい貴族ができるわ。
他国のように分家した場合に爵位を授けることはないから貴族は増えないわね」

「じゃあ、長男以外はどうするんですか？」

「当家のように男子がいない貴族に婿養子にいったり、子供のいないところへ養子にいくことが多いわね。
あとは騎士になるとか役人になるとかね」

「爵位によっての違いってあるの？」

「上位貴族と呼ばれるのは伯爵まで、子爵と男爵は下位貴族と呼ばれてるわ。
下位貴族は王から呼ばれない限り王との謁見はできないわ。
公爵家は王族の親戚筋になるから、王位継承権をもってるわ。

大きな違いはそれくらいね」

「領地はどうやって決めるの？」

「これは代々受け継がれているだけだけど、爵位が上になるほど広い領地を与えられてるわ。
貴族の収入は領地での税収がほとんどね。
お父様のように国の役職についていれば国からの報酬もあるけど」

「税収が収入のほとんどだから、バーニング男爵領のように領民が生活できないような税を徴収する人もいるってことですね」

「税の額は国から決められてるの。
所得の４割ってね。
それの半分を国に収めるようになってるの。
バーニング男爵については、お父様配下の者達が証拠集めをやってるから、もうすぐ裁かれるから安心して」

「それで見逃したんですね？」

「アハハ　お父様の邪魔しちゃダメだからね。
アーサー君のお陰で公爵家に対する不敬罪まで追加できるわ。
貴族に関してはこれくらいかな？」

「貴族同士は仲が良いんですか？」

「難しい質問ね。
表面的には争ってないけど、派閥はあるわね」

「派閥？」

「お互いの利害で結びついた人々によって形成する集団のことよ」

「よくわかんないなぁ～」

「たとえば政治で力を持った貴族と仲良くなれば、自分も政治で力を借りることができるとか、武力で力を持った貴族と仲良くなれば……とかよ」

「へぇ～、群れ同士のライバル関係？」

「そうそう、そんな感じ。実際はお互いの親族同士を結婚させて仲良くなったり、貢物をして媚を売ったりするみたいね」

「レジアス公爵家も派閥に入ってるの？」

「あはははは　うちは公爵家だから派閥のボスね」

「それじゃあリアのお婿さんになる人は大変だね」

「私より強くて正義感があって領民に優しくて……」

「リアより強いってだけで充分難しそう……」

クレアがお茶を用意して初めての勉強は終了した。

第2章　13話

「アーサー様、姫様の授業はいかがでした？」

「わかりやすくて良かったですよ」

「アーサー君、頭良すぎよ。すぐに全部覚えちゃうんだもん」

「姫様、そのうち姫様が生徒になるんじゃないですか？」

「クレアったらひどいわ」

「だって姫様、語学とか物事の理とか苦手じゃないですか？」

「あちゃ～　クレアがいじめる～」

「そういうの僕得意ですよ。いつでもお教えしますよ？」

「アーサー君、この後って何か予定ある？」

「特に何もありませんよ」

「じゃあ、魔術か精霊術おしえて」

「いいですよ」

「わたくしもご一緒させていただいてよろしいですか？」

「ええ。クレアさんも一緒のほうがリアも楽しいでしょうから」

アーサーの魔術講座がはじまった。

「自分の持ってる魔力を感じることできますか？」

「私は全然わかんないわ」

「わたくしは少しだけ感じることができます」

「クレアさんは精霊に魔力を与えてますから、なんとなく感じるんでしょうね」

「いいなぁ～」

「まず、足を肩幅に広げて自然に立ってみてください。
そのまま少し腰をおとして目を閉じて、ゆっくり深く息をしてください」

ふたりの様子をみながら

「ゆっくりと心を落ち着けて、意識を自分の中に向けてください」

徐々に穏やかな表情になっていくのをみながら

「お腹のあたりに温かいものを感じませんか？」

フローリアは難しい顔をしはじめた

「リア、探そうとしないで、気持ちを落ち着けて感じるだけでいいから……」

「……」

「……」

「……ん？」

「……なにこれ？」

「はい、目を開けてください。どうでしたか？」

「アーサー様、暖かい塊を感じました」

「アーサー君、何かが身体の中で渦巻いてたっ」

「それが魔力です」

「これがあれば、変なことばブツブツ唱えて魔術が使えるようになるのね」

目をキラキラさせてフローリアは喜んでいた。

「それはちょっと違うかな。僕が知ってる魔術は呪文使わないから……」

「でも、魔術士ってみんな呪文使うんじゃないの？」

「そうですね～わたくしが知ってる魔術士はみんな呪文唱えてます

わ」

「いいかい、もし魔術に呪文が必要ならシロは魔術使えないよ？シロは治癒魔術、防御魔術、攻撃魔術、結界全部使えるんだよ」

「そう言われてみればそうね。じゃあなんで呪文を唱えるんだろ？」

「きっと、古代の人が魔術を教える時にイメージを言葉にして教えたんじゃないかな？」

「イメージ？」

「たとえば『風よ集いて全てを切り裂く刃となれ』って言えば頭の中でイメージできるでしょ？」

「うん、でも何で難しい言葉なんだろう？」

「古代の人だから当然言葉は古代語でしょ。それが、そのまま伝わったと考えれば良いんじゃないかな」

「そういうことか。それと凄い技なんだぞって誇示できるしね」

「真実なんてそんなもんだろうね」

「それじゃあ、魔力には2種類あるのは知ってる？」

「体内魔力と魔気」

「そう、体内魔力を核にして大気中の魔気を集めて発動させるのが魔術なんだ。

自分の魔力を感じられなかったら、核にできないから魔術が使えない」

「そのために魔力を感じる練習をしたのね」

「そう、魔力で核をつくる時に発動したいイメージを込めてやれれば魔術は使えるようになるよ。
強さは魔力次第だけどね。
しばらくの間、この練習を続けて魔力を自然に感じれるようになれば魔術の練習もできるようになるよ。
魔力で体力強化もできるようになるしね」

「そんなことまでできるの？」

「狂獣が強いのは、魔力が暴走して身体が強化されてるからだしね」

「へぇ～　それで剣や槍も通じないって言われてるのね」

「なんかやる気がでてきたわ」

「柔軟もしっかりやってね。明日は練習前に終わらせといてね」

夕食の時間となり、3人は食堂に移動した。

「クレア　今日も一緒にすわりなさい」

「はい　姫様」

「あ～～～お腹すいたぁ～　お爺様早くこないかなぁ～」
「姫様　はしたないですわ」
「二人とも身体は大丈夫そうですね」
「ええ、昼食後精霊に治癒してもらいましたから……」
クレアの傍にいた精霊がアーサーにニコニコ笑いながら手を振っていた。
「おお、そろっていたか。遅くなってすまんかったな」
「お爺様　おっそ～～い」
食事をとりながら今日のことを話していた。
「アーサー君の勉強はそうじゃった？」
「私の教え方が良いから、完璧よ」
「姫様、アーサー様が優秀なだけです」
「いや、リアが分かりやすく教えてくれたからだよ」
「ワッハッハ　本当に優秀なようじゃの。
そのへんはお母上似かの？大変聡明なお方じゃったからのう。
お父上も聡明じゃったが、お母上には負けておった」
「へぇ～美人で頭も良くって優しいなんて完璧な女性だったのね」

「お前じゃ太刀打ちできんわい。お転婆で勉強嫌いで……」

「お爺様！！」

「ワハハハハハ」

「そういえば例の男爵から詫び状がきておったわ。
馬鹿息子の非礼を詫びたのは良いが、アーサー君を貴族に対する不敬罪で裁くから引き渡せなどと書いてきおった」

「「まあっ！！」」

「アーサー君は公爵家所縁の人間で、公爵家の客人である。
子息だけでなく、男爵まで当家に無礼を働くつもりなら、いつでも相手になってやると返事しておいた」

「ご迷惑かけて申し訳ありません」

「かまわんよ。ワシは事実を書いたまでじゃ」

「お爺様　はやく潰してしまいましょう」

「お前は血の気が多いのぉ～。もう少しすればロバートの奴がなんとかするわい」

こうして夜は更けていった。

第2章　14話

夜明け前から日課の鍛錬を終えて汗を拭っていたアーサーの耳に変な声が聞こえてきた。

ぐえええぇ～～～
ぎあああああぁぁ
いたたたた

集合前に、いつもなら軽く身体をほぐしている騎士団や衛士隊の面々が本格的な柔軟体操をしていた。

「小僧！！うらむぞっ！俺達まで……ぐえええぇぇ～～～～」

「アーサー君　おはよ……いたたた」

騎士団長とランバートは、その様子をみながら爆笑していた。

挨拶のあと、それぞれ鍛錬に散っていった。

「今日は、最初からシロとの鬼ごっこをやってください」

「今日こそ捕まえてみせるわ」

「わたくしもがんばります」

1時間後、大地に大の字に倒れてるふたりの少女の姿があった。

朝食のとき、散々からかわれた二人は気合をいれて午前の修行にむかった。

「まず、ふたり向かい合って、右足を前にだし右手の甲をお互いに合わせて立ってくれる？」

アーサーは、ふたりの立ち位置を調整し

「身体の力を抜いて、お互いに押したり引いたりしてみて」

言われた通り、ゆっくりと簡単な押し合いを繰り返した。

「相手の力の向きと重心を感じとれる？」

「なんとなくわかるわ」

「わたくしも」

「その状態から、お互いに攻撃しながら力の向きと重心を感じ取れるようにしてね。攻撃は力を入れて受け止めるんじゃなく、力の方向を変えて受け流す感じで……」

しばらく様子をみて

「目で見て動くんじゃなくって、身体全体で相手を感じるようにね」

「こ・これ…むずかしいわね……」
「なんですの？…これ…あれ！？」

「あの～アーサー殿」
「なんですか？」
「先ほど姫様達がやってたシロとの鍛錬を騎士団にやらせてみてはもらえんでしょうか？」
「いいですよ。シロっ相手してあげて！」
昼食前には騎士団全員が荒い息を吐きながら座り込んでいた。

昼食を終え、アーサーの勉強時間となった。
「アーサー君　昨日の貴族については大丈夫？」
「はい」
「じゃあ今日は大神殿と精霊神殿についてお話します」
「よろしくお願いします」

「まず、大神殿は『知の神』と『生命の女神』を祀っていて、精霊神殿は『神獣』や『精霊』等の神の使いを祀っているのは知ってる？」

「はい」

「大神殿は各国の首都にあって、主に貴族や王族などが支援してるの。それに対して精霊神殿は大陸中のアチコチにあって、一般の民が支援してるの」

「どうして貴族や王族は大神殿を支援してるの？」

「多くの貴族や王族は、支配者という意識から『神』の権威の象徴としてみてるの。精霊は『神』に使役されるもの、つまり使用人としてみてるのね」

「なんだか精霊が聞いたら怒りそうな話ですね」

「きっと怒るでしょうね。それに対して一般民は直接精霊の恩恵を目にすることが多いから精霊を大事にするの」

「たとえば？」

「鍛冶職人は地の精霊や火の精霊でしょ、農家は地の精霊や水の精霊、水夫は水の精霊や風の精霊っていうぐあいね」

「リアからは精霊を見下した感じは見れないよね」

「私はクレアにいつも治癒してもらったりしてるから、精霊の力を敬ってるの。それに、お爺様やお父様も『賢王』様や王妃様から教

えられてるから精霊神殿も支援してるわ」

「そっか、それでこの地には力ある精霊が多いんだね」

「精霊の話は後でゆっくり教えてね。それから、大神殿には『神の巫女』と呼ばれる神様とお話できる人がいるらしいわ」

「それは何人もいるの？」

「大きな国の神殿にひとりづつだから、今は４人かしらね。それから大神殿は貴族や王族に神の洗礼をしてくれるわ」

「洗礼？」

「この人は神を信じますから、加護してあげてねって儀式。特にこの国では大神殿の総本山があって『神聖王国』の名があるから大神殿の権威は強いわね」

「大神殿の神官達は『神の加護』をうけてるの？」

「そういう話よ。誰も確かめられないけどね」

「ふーん」

アーサーは難しい顔をして考え込んだ。

「どうしたの？」

「僕が精霊達から聞いた話と食い違うから変だなぁ～って」

「なにが違うの？」

「まず『神の巫女』だけど、王妃様が最後の巫女だったって聞いたよ」

「えっ！？どういうこと？」

「つまり今は神様と話ができる人間はいないってこと」

「本当なの？」

「精霊が嘘吐くと思う？　それから、さっきの話だと神と話ができるのが巫女で、それ以外に加護を受けた人間がいるってことだよね」

「そうなるわね」

「加護を受けた人は神様と話ができるはずだから、神と話ができない人は偽者ってことだよ」

「へえ～　ちょっと待ってクレア呼んでくるから……」

パタパタと部屋を出てクレアを連れて帰ってきた後、今の話をクレアに聞かせた。

「わたくしも精霊と契約してますけど、話せません。
これと同じ状態ではないのですか？」

「それはクレアの契約してるのが下位精霊で力が足りないからだよ。下位精霊は自分で具現化できないし、自我も弱いからね。僕には見えるけど、会話はできないよ。こちらの話は分かってくれてるみたいだね。それに神の力は比べ物にならないほど強いよ。加護だけして話できないなんてありえないよ」

「じゃあ大神殿の神官達は嘘吐いてるってこと？」

「そうなるね。加護を受けた人間の身体には、神の紋章があるというし」

「神の紋章？」

「痣みたいなものらしいよ」

「アーサー君、その話が本当なら、大変なことよ」

「姫様、神の名を使って不正をしている可能性もありますわね」

「大陸中を騙す、巨大詐欺組織じゃない」

「神様にとってもいい迷惑だね」

「神罰がくだることを祈っておきましょう」

脱線しまくった午後の授業は終了した。

第2章　15話

アーサーが城に来て7日が過ぎた頃、フローリアとクレアでロレンツォの町を案内してもらうことになった。

コンコン

「アーサー君、用意できた？」

「いつでも行けるよ」

「あら、そんな格好で行くの？」

アーサーは城に来た時に来ていた狩人姿だった。

「このほうが動きやすいからね」

実は、外出の知らせを聞き侍女さん達が着せ替えを始めようとしたのだが、面倒だったのでこの姿にしたのだ。

大通りを歩き露店を見たり、買い食いを楽しみつつ町を散策していた。

その間も周囲の店や歩いてる人達から「ひめさま～」と声をかけられフローリアも笑顔で対応していた。

「そういえばアーサー君の武器って、そのダガーだけなの？」

「一応ひととおりの武器は使えるよ」
「じゃあ武器屋に行ってみない？」
「面白そうですね」
3人は公爵家ご用達の武器屋に向かった。

武器屋の前でウロウロしている見知った顔をみてアーサーは声をかけた。
「ダンクルさん、何してんの？」
「あっ、これはアーサー様、姫様、クレア様」
「アーサー様はやめてよ。いつも通り小僧でいいですよ」
「いや～　前から使ってた剣にヒビが入っちゃって新しいのが欲しいなと思ってるんだけど、高そうだな～と」
「ダンクル？この前衛士隊に入った人だったっけ？」
「そうです。そのダンクルです、姫様」
「私達もここにひやかしに来ただけだから、一緒に入りましょうよ」
「よろしいのですか？」

「ダンクルさん、姫様がご一緒だったら安くしてもらえますわよ」
「あはははは　そういうことだから、ダンクルさんも一緒に行こう」
アーサーはダンクルの手を引っ張って中に入っていった。
店主らしき人が出てきてフローリアに挨拶をした。
「姫様、いらっしゃいませ。本日は何かお探しで？」
「適当に見せてもらうわ」
「ごゆるりとお探しくださいませ」

「ダンクルさん、今まで使ってた剣見せてくれる？」
「これなんだが……」
「うひゃ～　根元にヒビがはいっちゃてるね」
「そうなんだ。昨日鍛錬の時に受け損なって変な止め方したらこの通りさ」
「この剣じゃダンクルさんには軽くない？」
「そうなんだが、買った時は金がなくてな」
フローリアとクレアは陳列棚を見て指差した。

「あれなんかどう？」
店員が慌てて近寄ってきて、陳列棚から剣を取り近くに持ってきた。
「ダンクル、広いところで振ってみなさい」
「はい、姫様」
ブンブンと大きな音をたて振り回してみた。
「どう？」
「もう少し重いほうが……」
アーサーは陳列棚の上に飾ってある大剣を見て店員に取ってもらった。
「ダンクルさん、これは？」
受け取ったダンクルはズッシリとした手ごたえを感じ笑顔になった。
「少し振ってみてもいいかな？」
と店員に尋ね振りはじめた。
しばらく振ったあとで満足そうな顔をして店員に聞いた。
「これいくらするんですか？」
「白金貨2枚です」

「うへぇ〜〜〜〜〜　とてもじゃないが手がでねえ」

「店員さん、店主に安くするよう言ってきてくださいませんか？」

「ちょっと聞いてきます」

「僕も一緒に行って頼んでくるよ」

とアーサーは店員の後を追った。

「騎士団にも衛士隊にも大剣使いはいないから、買えれば面白いわね」

「姫様、面白いのはいいんですが、我々の給金では……」

「あはははは　それもそうよね」

「やっぱり普通の剣で我慢するしかないかな」

「金貨2〜3枚だったら私の小遣いで出してあげられるけど……」

「いえいえ、姫様にそんなことしてもらったら、みんなから袋叩きにされますよ」

アーサーが先ほどの大剣と普通の剣を持って帰ってきた。

「ダンクルさん、これ」

2本の剣を差し出した。
「？」
「僕からの入隊祝いだよ」
「そ・そんな……小僧にそんなことしてもらっちゃ……」
「あははは　気にしないでよ」
「アーサー君、そんな大金持ってたの？」
「うん、白金貨２００枚と魔力石たくさん持ってるよ」
全員が目を丸くした。
「アーサー様、でも何故普通の剣も？」
「それはおまけなんだって」
「おまけ？」
「それに大剣と剣の２刀使いなんて面白いなって」
「小僧……いや……アーサー様、大事に使わせてもらうよ」
「ダンクル、よかったわね」
「姫様、精一杯精進して強くなってみせます」

後にダンクルは『双剣の狂獣』という二つ名で大陸中に武名を轟かせることになるのである。

何度も頭を下げながら出て行くダンクルを見送った後

「アーサー様は剣をお持ちにならないのですか？」

とクレアはたずねた。

「一応持ってるけど狩りには使わなかったね」

「どうしてですか？」

「森って木が沢山あるでしょ？だから長い武器は使い辛いんだ」

「アーサー君、どうやって狩りしてたの？」

「素手」

「アーサー様の強さを知ってるから納得できますけど、普通は無理ですわね」

「そうね～　アーサー君なら納得できるわね」

「でも、姫様のお傍にいるときは見せかけでも剣を持っていただきたいですわ」

「なんで？」

「世の中には剣を見ただけで近寄らない悪人も多いからです」

「そんなもんなのかな？」

と言いながら何も無い空間から1本の長剣を取り出した。

黄金の鞘には立派な装飾が施され、黄金の柄には魔力石と精霊石がはめ込まれていた。

店主が駆け寄ってきて

「少しお見せいただけますか？」

とアーサーに問いかけた。

「うん、いいよ」

店主は鞘から剣を抜き刀身をみて不思議そうな顔をした。

「この剣の材質はみたことがありません」

フローリアとクレアも首をかしげた。

「この剣は芯にミスリル、外側はオリハルコンだよ」

「ミスリル？オリハルコン？それって神話時代の伝説の？」

「珍しいの？」

「このような物を何処で手に入れられたのですか？是非教えてください」

「貰ったんだけど」

「貰った？こんな凄い物を？」

「うん、地の精霊王がくれたよ」

「精霊王？」

「ノームって名前なんだけど、僕の友達だよ。
この剣なら剣技でも魔術でも使えるからってくれたんだ」

「この鞘と柄も金ではありませんな」

「それは神龍の鱗だって聞いてるよ」

「……」

全員唖然として声もでなかった。

第2章　16話

アーサーが逗留をはじめて一月が経過した。

「やったぁぁぁ　はじめてシロに触れたぁぁぁ」

「今度はわたくしの番ですわっ」

はじめの頃はドタバタと動きに無駄が多かったが、最近ではシロの動きに惑わされることもなくなり無駄な動きもなくなっていた。

「やりましたわっ　わたくしも触れました」

「リア、クレアさん、明日からはシロにも攻撃させるから覚悟しといてね」

「「うえええぇぇぇ」」

朝食の時も興奮さめやらぬ気持ちを抑えることができず、騎士団に自慢してはしゃいでいた。

休憩の後、いつも通りふたりで向き合って構えていると、アーサーはふたりに木剣を手渡した。

「久しぶり、剣をふるって対戦してみて？」

とまどいながらも、ふたりの対戦は始まった。両者の凄まじい攻防

に騎士団や衛士隊の面々が集まってきて観戦をはじめた。

「す・すごいっ」

「以前とは比べ物になんねぇや」

「俺達とは次元がちがうぜ」

口々に褒め称えたり、悔しがったりしていた。

対戦を終え、ふたりがアーサーの元に駆け寄ってきた。

「アーサー君、嘘みたいに身体が動くのよ」

「アーサー様、姫様の動きが手に取るようにわかりますのっ」

「それは、ふたりの努力の賜物だよ」

「なんで、こんなにちがうの？」

アーサーは種明かしをした。

「まずシロとの鬼ごっこで、無駄な動きがなくなったことと、足さばきが上達したこと。
次に相手の重心移動や力加減を感じて、攻撃がフェイントか本物か区別できるようになったこと。
それと身体が柔らかくなったことで、しなやかに受け流せるようになって、体勢が崩れ難くなったことだね」

「柔軟は辛かったけど、効果があるものなのね」

「わたくしは、楽しかったですわ」

「そうね、私も楽しかったわ。鍛錬って辛いもんだと思ってたから」

「このまま頑張って鍛錬続けてください。今日から剣を使った鍛錬もやって良いですよ」

「クレアと二人だったら、騎士団全員とやっても勝てそうな気がするわっ」

「おいっ　お前ら嘗められないように鍛錬しろよっ」

と騎士団長が檄をとばした。

昼食後ランバートに呼ばれたアーサーは書斎を訪れた。

中にはランバートと騎士姿の紳士が座っていたが、アーサーを見て跪き臣下の礼をとった。

「アーサー様、これが愚息ロバートでございます」

「殿下、お初にお目にかかります。ロバート・アーノルド・レジアスでございます」

「はじめまして。アーサーです。どうか普通にしててください」

3人はソファーに座り話はじめた。

「父からの手紙を見て、直ぐに参上するのが筋でございましたのに、遅くなって申し訳ございません」

「アーサー様の事情も書き連ねておりますので、安心してお話ください」

「それでは、新たにわかったことをお伝えします。シルフ、君の調べたこと話して」

スッと突然アーサーの横に現れた緑色の髪をした女性に驚きながらも

「あなたは？」

と声をかけた。

「アタイは風の精霊王シルフだ。
名前くらい聞いたことあるだろ？
アーサーの世話役のひとりだよ」

ランバートとロバートは驚きながらも深々と頭を下げた。

「『神の加護』を得た人間はすべて命を奪われてたよ。
アタイ達精霊と契約した人間も有名になった者も全員ね。
契約してた精霊や神にも気付かれず突然襲われた手口もあの事件と同じだったよ。
犯人は悉く自害したみたい。
ただ、自害した犯人から黒い魔力が抜けていくのを精霊が目撃してたらしい。
黒い魔力自体が何か意思を持っているように見えたって言ってたよ。

今『神の加護』を受けているのはアーサーだけだよ。
アタイ達も気をつけるけど、アーサーの周囲の人までは守りきれないかもしんない。
みんなも、身の回りには充分注意しなよ」
と話し終え姿を消した。

「大神殿からは、そのような話はでておりません。どういうことなんでしょうか？」

「大神殿の神官は『神の加護』を受けていないということです」

「それでは、どうやって神託をしているのでしょう？先日も陛下にある貴族を昇格させるよう神託があったと進言しておりましたが？」

「あはははは　神は人間の地位や名誉なぞ気にしてませんよ。
誰かに都合の良い神託でしょう。
以前にリアやクレアさんとも話したんですけど、大神殿は巨大詐欺組織だと」

「許せぬ行為ですな。国政にまで口出ししてくるとわ」

「ロバートよ、大神殿への寄付金の流れを調べて、神託と照らし合わせてみよ。もしかしたらバーニング男爵助命の神託がでるやもしれんぞ？」

「それは面白そうですな父上。早速、手のものを動かしましょう。
アーサー様、『神の加護』を受けた者の見分け方なぞないのでしょうか？」

アーサーは両手にはめた篭手をはずし、腕をみせた。
「右手にあるのが『知の神』の紋章、左手のが『生命の女神』の紋章です。『神の加護』をうければ身体のどこかに刻まれます」
「それで、いつも隠しておられたのですね」
「人に見られたくなかったものですから」
「アーサー様、王都においでいただけないでしょうか？」
「僕も、そろそろ行こうかと考えていました。しかし、フローリア姫とクレアさんの鍛錬が中途半端に終わってしまっては可哀想です」
「それなら問題ありませんよ。フローも王都に呼び戻すつもりでしたから。あいつ勉強を嫌がって武術の鍛錬を理由にこちらに逃げてきてただけですから」
「それなら、いままで通りリアの練習相手という名目で同行させてもらえますか？」
「殿下、何故身分をお隠しになるのですか？」
「ロバートさん、まだ敵の正体がつかめていません。
それに、今正体を明かせば政治利用されるでしょう。
そうなると敵を察知し難くなるんです。
今のままでしたら、僕に悪意を向けるものは少数ですが、正体を示せばそうはいかなくなるんです」
「確かに、その通りでございますな」

「僕の正体は、お二人が信頼されている方々にだけにしてください。伯父上にはどのように知らせてあるのですか？」

「陛下には手がかりが見つかったとだけお伝えしております」

「直接会って驚かせたほうが面白そうですね。

「問題ありません。それと陛下を驚かす段取りもお任せください」

3人は大笑いした。

第2章　17話

その後、ロバートから両親の思い出話などを聞かされ和やかな雰囲気で時間が過ぎた。

「ところでロバートさんは何故こちらへ？」

「明日、風王騎士団と合流してバーニングの捕縛に行きます。奴も年貢の納め時ですな」

「いよいよ明日か。してロバートよ、証拠は揃ったのか？」

「はい。物証も証人も山のようにそろってます」

「ロバートさん、男爵領はどうなるのでしょう？」

「バーニングは爵位と領地返上のうえ極刑でしょうな。家族の者も直接領民を害したりしておりますから同罪でしょうな」

「厳しいようじゃが、自業自得じゃな。国に内緒での蓄財は『謀反の意あり』として国家反逆罪、そのうえ多数の領民殺害じゃから情状酌量の余地もないな」

「僕達はいつ王都に行けば良いのでしょう？」

「夕食の時にでもフローには話しますので、明日にでも出発してください」

「わかりました。それなら明日の朝、騎士団や衛士隊の方々に挨拶

できますね」

「ロバートよ、アーサー君はフローやクレアだけじゃなく、騎士団にも指導してくてたんじゃ。皆、強うなったぞ。明朝の鍛錬は見て行けよ」

「それは楽しみですな。久しぶりにフローの相手でもしてみますかな？」

「お主負けるかもしれんぞ？わっはっは」

会談を終えて部屋に戻ると、フローリアとクレアがシロと遊んでいた。

「アーサー君、何の話だったの？」

「ロバートさんが来られていたので、ご挨拶を」

「ええっ！？お父様が来てるの？」

「はい。夕食まではランバートさんとお話があるそうです」

フローリアは何かあせった表情をし、クレアは苦笑してアーサーを見た。

「アーサー君、なにかあったら助けてね。お願い、特に勉強のことかとか」

「リア、ロバートさんに簡単な魔術をお見せすれば吃驚されるんじゃないですか？
ここにきて遊んでたわけじゃないってアピールにもありますよ」
「そ・それいいわね。話題が勉強にいかなければ大丈夫」
「しかたありませんわ。わたくしも協力させていただきます」
とふたりで打ち合わせをはじめた。

3人揃って食堂に入るとロバートが声をかけてきた。
「フロー、ひさしぶりだな、元気だったかい？」
「お父様」
フローリアは父の胸に飛び込み抱きついた。
「まあまあふたりとも席についてはどうじゃ？クレアもすわりなさい」
「フロー、こちらでの生活はどうだ？
カッコイイ先生に逆上せて弱くなったんじゃあるまいな？」
と娘をからかった。

「そ・そんなことありませんわっ　それに他にも頑張ったんだからっ　クレアいくわよ！！」

「はいっ姫様」

とクレアは壁に並んでいた蝋燭にむけて手を伸ばすと、蝋燭の火は一瞬で消えた。

続いてフローリアの手から火が飛び、次々と蝋燭に火をつけていった。

「どう、お父さま？」

「おおっ魔術かっ！！」

「ほかにも障壁をはったり、もっと大きな火を飛ばす攻撃魔術も覚えたのよ」

どうだっとばかり、ささやかな胸を張った。

「ワシも初めて見た時は驚いたぞい。我が家の人間で魔術を使えるなんて考えもせんかった。しかも無詠唱じゃぞ」

と指先に火を灯しロバートに見せた。

「おおおおおぉぉぉっ父上までっ！！俺だけのけ者かっ！？」

「機会があればロバートさんにもお教えしましょうか？」

「頼む、是非」

笑いにつつまれて食事がはじまった。

「フロー、明日の午後にはここを出て王都に向かえ！これ以上勉強を遅らせるのは許さんぞ」

「でもお父様、武術の鍛錬がまだ終わっておりませんわ」

「そのことなら心配いらん。アーサー君にも来てもらう」

ジトーとアーサーを見て

「知ってたのね」

「ナンノコトデショウカ」

「姫様、王都ではアーサー様に勉強も見て貰えば良いのでは？」

「クレア、アーサー君はそんなに博識なのか？」

「大陸中の言葉すべて読み書きできるそうです。それと魔術を使うには『世界の理』も知らねばならないそうです」

「それは凄いな。俺の仕事も手伝ってもらうかな。外交文書の翻訳とか……」

「お父様、ずるいですわ。アーサー君は私の師匠ですわっ」

「おおっ！？フロー惚れたか？これならジェフとの約束が果たせる

かもしれん」

「ジェフ様？約束？」

「ロバート、彼との約束を果たしておらんかったのか？」

とランバートは厳しい目でロバートを見た。

「フロー、ジェフとはアーサー君の父上のことだよ。父上、約束はアーサー君が行方不明だったんで果たせなかったんです」

「どんな約束じゃ？」

「アーサー君が生まれた時、もし俺に娘ができたら嫁にやるっていう約束です」

ハッキリと言い切ったロバートの顔を全員が呆然と見つめ、フローリアは『ボッ』っと音がしそうなくらい真っ赤になった。

「いつの間にそんな約束したんじゃ？ワシは聞いておらんかったぞ」

「アーサー君が生まれてすぐにジェフが俺のところに駆け込んできて、早速親馬鹿ぶりを発揮したときに交わした約束です。ちょうどフローがお腹にいた頃ですな」

と懐かしそうに話した。

「そんな約束、僕も初耳です」

「アーサー君、嫌なの？」

「そういう訳じゃなくって……驚いたっていうか……」

ワイワイガヤガヤと夜は更けていった。

第2章　18話

いつもの朝の鍛錬場にロバートの姿があった。

「おはようっ、今日は久しぶりに皆の鍛錬ぶりを見せてもらうぞ」

「「「おはようございます、ご当主様」」」

騎士団と衛士隊の面々はいつも以上に元気な挨拶で、鍛錬場に散っていった。

いつも通りシロとの鍛錬を始めようとしたフローリアに

「フロー、久しぶりに手合わせするか？」

とロバートが声をかけた。

「望むところです」

二人は木剣を取り対峙した。

ロバートは容赦なく攻め込んでいくのだが、フローリアは見事に受け流し要所要所で反撃をしていく。

ロバートの面がフローリアに決まったと見えた時、ロバートの咽喉元に剣先が突きつけられていた。

「ハアハア……勝てませんでしたわ」

「フウゥゥゥ……相打ちとは……すごい進歩だな」

「今日は勝てると思いましたのに……アーサー君、ごめん……勝てなかった」

パチパチと周囲から拍手が沸き起こった。

「ロバート様の剛剣をあれだけ流せれば大したもんです。大陸有数の剣士と互角なんですから誇っていいですよ」

「アーサー君、フローはこれで鍛錬半ばなのか？」

「はい。まだ身体の使い方に無駄がありますね」

「そうか……俺もまだまだ鍛錬せねばならんな。君とも手合わせ願いたいな」

息が整ってきたロバートはアーサーを見つめた。

「かまいませんが、体力は大丈夫ですか？」

「これでも剣士のはしくれ、対峙したら体力なぞ問題ない」

めずらしくアーサーも木剣を持ち、対峙した。

「はじめっ！！」

ランバートの合図でロバートは飛び出した。
アーサーはサラリと避け上段から剣を振り下ろし、ロバートは咄嗟に剣で防いだはずだった。
アーサーの剣はそのまま振り下ろされロバートの額の前で止まった。
「剣をすり抜けた？」
「なにがあったんだ？」
ロバートも周囲の者も呆然とみていると、ロバートの剣が半ばからずり落ちていった。
「木剣で木剣を切り落とした？」
「んな馬鹿な……」
「しかし……」
「昔の剣豪が同質のものなら切れると言っておったとか…まさか現実に…」
「まいった」
互いに礼をして手合わせが終了した。
「アーサー君、今のはなんだったの？」

「ただの上段からの切り下げだよ。
ロバート様が下から押し上げてくる力を利用しただけさ。
いつも言ってるように相手の力の向きを感じとって利用しただけさ」

「ふ～ん、私も鍛錬次第ではできるようになるかな？」

「リアもクレアさんも才能あるから大丈夫さ」

「アッハッハ　これほど強いとわな。フローが惚れるのも分かるな」

「お父様っ！！」

「体力の心配する間もなくやられてしまった。完敗だよ」

その後、騎士団との朝食の席でフローリア、クレア、アーサーが王都に帰ることが告げられた。

騎士団長とロバートが道中の護衛と王都にいる騎士団員や衛士隊員の交代を話し合っている間、アーサーやフローリア、クレアに近寄ってきた隊員達とが挨拶を交わしていた。

「団長っ、王都への交代要員にしてくださいっ」

「俺もお願いしますっ」

と騎士団長につめよる者達に苦笑しながらロバートは

「このままじゃ、ここに誰も居なくなるなるではないか。王都への交代要員は騎士団1隊、衛士隊1隊だ」

うーんと唸っていた団長が

「しかたない。食事が終わったら隊同士の試合をやるからなっ！！」

「「「おおっ」」」

「ロバート様、出発は明朝になりますが、かまわないでしょうか？」

「しかたあるまい。私はこの後『風王騎士団』と合流してバーニング領に行かねばならんから、明日の夕方にアークの町で合流しよう」

「了解いたしました。みんな聞いての通りだ」

「それにしてもアーサー君は人気者だな」

「それは強さを鼻にかけることもないですし、皆に鍛錬を楽しませてくれておりますから」

「鍛錬を楽しむ？」

「アーサー殿の鍛錬は楽しいのですよ。でも楽しいから落伍者もでないで皆鍛錬に励めるのです」

「楽してるわけではないのか？」

「いいえ。鍛錬の後は足腰たたないくらい疲れているのですが、翌

日の鍛錬を楽しみにしてるくらいなのです」

「俺も王都に帰ったら、参加させてもらうよ」

「アーサー殿の鍛錬方法をみたら驚かれますよ。わはは」

ロバートが立ち去った後、試合がはじまった。

試合を観戦しながら、騎士団長はアーサーに話しかけた。

「アーサー殿、今日までご指導ありがとうございました」

「いえいえ、僕は少しアドバイスさせていただいただけで、皆さんが努力されただけですよ」

「これからの鍛錬なのですが、シロが居なくなってしまいますのが残念です」

「それなら、ふたり一組になって、片方がシロのかわりをすれば良いのではないですか？」

「あれほど素早くは動けませんよ」

「逃げるほうも鍛錬になりますし、最初は難しいかもしれませんが、徐々に慣れていくと思います」

「確かにそうかもしれませんな。今度の騎士団対抗戦では優勝して

みせますよ」

「騎士団対抗戦？」

「ああ、４年に一度全国の貴族騎士団と王国の風王騎士団との対抗戦があるんですよ。
うちはいつも2位だったんです。
全国から選りすぐった風王騎士団には勝てませんでした」

「がんばってください　僕も応援しています」

話しているうちに試合が終了し、『疾風のレオン』の居る隊と新入隊したダンクルのいる隊が勝ち残った。

「よし、交代要員はすぐ準備にとりかかれ。その他は通常勤務だ、解散っ」

第3章　1話　～王都編～

翌朝、城門の前に騎士団と衛士隊が正装で並んでいた。

「ランバートさん、大変お世話になりました」

「何を言う。世話になったのはこちらのほうじゃ。これからもフローのこと頼みますぞ」

「お爺様、お元気で」

とランバートに抱きつき

「おお、偶には顔を見せに来るんじゃぞ。城の者皆待っておるからの」

「はい、お爺様も王都の屋敷に来てくださいよ」

「わかっておる。すぐに会える」

クレアも城のメイドや執事達に挨拶し、馬車に乗り込んだ。

衛士隊の馬車が、フローリア達の馬車を挟み騎士団は愛馬に跨り馬車を取り囲むよう隊列をつくり出発した。

馬車の中でシロは居心地悪そうにウロウロしていたが、フローリアが抱き上げて膝の上に置き撫ではじめると気持ち良さそうに大人しくなった。

＜アーサー、自分で歩かず移動するのは変なもんだな＞

＜そうだね、僕も初めてだから落ち着かないよ＞

と念話で会話しつつ外を眺めていた。

「アーサー君、どうしたの？」

「馬車ってはじめてだから落ち着かなくって……」

「すぐ慣れるわ。アーサー君にも苦手なことがあったのね」

とコロコロと笑った。

一行は昼前に街道沿いにある休憩所と呼ばれる広場で昼休憩をとった。

騎士団や衛士隊の面々は食事の準備や馬の世話とテキパキと動き回っていた。

アーサーとフローリア、クレアは手にバケツを持ち、小川で水汲みをしていた。

＜なにか妙な気配がするぞ＞

＜うん、僕も気付いてる＞

木の陰から2人の男が突然切りかかってきた。

避けようとした方向に巨大な火の玉が飛んできたが、シロの障壁ではじきとばされた。

「アーサー君」

「二人はさがってて」

なおも切りかかってくる二人の鳩尾に拳を放ったが、まるで鉄を殴ったような衝撃があった。

＜アーサー、この者達　おかしいぞっ！！＞

「ノーム、リア達を守れ　シルフ、辺りに結界をっ」

アーサーの声とともに二人の女性が現れた。

「わはははは　神獣や精霊の加護など役にたたんわっ」

「おまえ何者だ！！」

「俺様はバーニング男爵の次男キャメロン・エレク・バーニングじゃないか」

「違う　操ってるお前だ」

「気付いてたのか？わはははは」

3人の男達はパタパタと倒れ、身体から黒い靄がたちのぼりひとつになった。

「お前達が次々と加護された者をころしたのか」

「そうだ。この世に神などという無力なものはいらんからな。世界を混沌に戻す邪魔をするものは全部滅ぼしてやる」

「僕が守ってみせる」

「無駄だ。俺達には実体がないから、どんな攻撃もきかんぞっ」

黒い靄から炎の塊が飛び出し、シロを掠めて飛んでいった。

＜アーサー、全力でいくぞっ＞

ムクムクとシロは巨大化し、本来の姿に戻り黄金の目で黒い靄を見据えた。

シロは黒い靄に飛び掛り爪や牙で切り裂いていくが、すぐに元通りになってしまう。

次も同じように攻撃していき、切られた部分が戻ろうとした瞬間『ギヤァァァ』と悲鳴をあげて分断されたままになった。

＜アーサー、神気なら効果があるぞ＞

「ウンディーネ、浄化の霧で奴を包んでくれ」

小川から霧が立ちこめ結界の中を満たし、なにも見えなくなった。
霧の中から一瞬目映い光が輝き神々しい空気が結界内を包んだ。
「みんな、もう良いよ。」
結界が解かれ霧が晴れたあとには、馬鹿息子と護衛の二人が倒れていただけだった。
「アーサー君、どうなったの？」
「ああ、なんとか倒せたみたい」
巨大なシロに驚いていると、のっそりとフローリアとクレアに近づき顔をひと舐めして子狼にもどった。
騒ぎを聞きつけて集まってきた騎士達に倒れてる男達を引き渡し馬車の近くまで戻った。
「アーサー君、いろいろ説明してほしいんだけど」
「あとで、馬車の中で話すよ」
簡単な昼食をとり、一行は出発した。
捕縛された男達は縄をうたれ、口には猿轡をかまされて衛士隊の馬車に押し込まれた。
「さて、アーサー君説明してもらいましょうか」

「大陸中で精霊や神の加護を受けた人々が殺されてるのは知ってる？」

「うん、お爺様から聞いたわ。アーサー君のご両親もそうだったことも聞いたわ」

「どうやら、あの黒い靄が犯人らしいんだ。
人じゃないから犯人ってのも可笑しいけどね。
あの黒い靄が人間を操って殺してたみたいで、犯行の後は自殺させて痕跡を消す」

「あの黒い靄はなんなの？」

「わからないけど、魔力の塊が意思を持ってるような感じだったね。世界を混沌に戻すとか言ってたよね」

「どうやって倒したの？霧でなんにも見えなかったわ」

「ウンディーネの浄化の霧にシロが『神気』を流したんだ」

「ウンディーネ？」

「姫様、水の精霊王のことでございます。私の精霊が震えておりました」

「じゃあ、ほかの女の人達は？」

「シルフとノームだね。風の精霊王と地の精霊王だよ」

「ええっ！？精霊王って……」

呼ばれなかった火の精霊王はイジケテいた。

「シロのあの姿は？」

「あれがシロの本来の姿さ。あのままじゃ人間の町を歩けないだろ？」

「確かに、あれで歩かれたらパニックになるわね。それにしても普通の魔狼にしては大きすぎるわ」

「姫様、白い毛並みに金の瞳は『神の使い』といわれています」

「さすがクレアさん、よく知ってますね。シロの母親は『神狼エルザ』なんだ」

「じゃあ『魔狼の森』のボスの子っていうのは嘘なの？」

「それも本当さ。エルザは普段、魔狼の姿で『魔狼の森』のボスをやってるから」

「なんだか、アーサー君の周りって信じられない世界ね」

「アーサー様は何者なんですか？『神狼』や『精霊王』を従えた人間って聞いたことないです」

「僕の普通の人間だよ。王都で僕の叔父さんに会えるらしいから聞いてみればいいよ」

第3章　2話

夕方アークの町についた一行は、ロバート達と同じ宿に逗留することになった。

捕縛した3人を風王騎士団に引き渡すため、隊長が風王騎士団の元に行った。

「旅の途中で捕縛したバーニング家次男と従者2名を引き渡したいのですが」

「ご苦労であった。居城に行った時に姿を消していたので捜索するよう指示しておいたんだ。手間が省けたよ。感謝する」

「フローリア姫やアーサー殿に対する暴行未遂も罪状に加えておいてください」

「もちろんだ。娘を狙われた公爵殿が許す訳もあるまい。あはははは」

一方、ロバートの部屋にやってきたフローリア達は今日の顛末をロバートに報告した。

「アーサー君には驚かされてばかりだな。これも血筋か？」

「あははは　父上もそうだったのですか？」

「ああ、人を驚かすのが好きで、よく奥方に怒られておったよ」

「お父様、王都にアーサー君の叔父様がおられるって本当ですの？」

「ああ、突然あわせて驚かせてやる」

「お父様もアーサー君のお父上と変わらないじゃない」

「わはははは」

それから2日で王都に到着した。途中、休憩時間にフローリアＶＳ風王騎士団やクレアＶＳ風王騎士団の対戦が行われたりして楽しみながらの旅であった。

「ここが王都か～」と窓から外をみながら楽しんでるアーサーに

「アーサー君、王都の感想はどう？」

「人が多くって驚いてるよ。初めて見る物ばっかりで面白いよ」

窓の外を指差しながら、アレコレと説明してくれるフローリアとクレアにフンフンと頷きながら見ていると大きなお城が見えてきた。

「あれが王城よ。綺麗でしょ？」

「大きいね～　ランバート様のお城の何倍もあるね」

「お城の手前に青い屋根の屋敷があるのがわかる？」

「大きなお屋敷ですね」

「あれが我が家よ」

フローリアは、へぇ～と目を丸くするアーサーを笑いながら見ていた。

大きな門を潜り抜けたところで

「ここから先は貴族の居住区なの。平民は大商人であっても住むことは許されないわ」

「やっぱり身分って大事なんだね。クレアさんの家は？」

「わたくしの家もこの中なんですよ。一応貴族の子女なんですよ」

「クレアはね、うちの縁戚のアッサム子爵の次女なんだけど、行儀見習いとして私が１０歳の頃から私の侍女を務めてくれてるの」

「アッサム家は王妃様を輩出した家柄なんですよ」

またもや目を丸くしたアーサーを見て二人は笑いころげていた。

途中で城にむかうロバート率いる風王騎士団とわかれ、レジアス公爵家に到着した。

屋敷の前には綺麗な庭園が広がり、白く大きな屋敷に青い屋根が見事な調和で優美さを誇っていた。

馬車から降りた3人に

「「おかえりなさいフローリア様、クレア様。いらっしゃいませアーサー様」」

とメイドや執事が声をかけた。

「とりあえず湯浴みがしたいわ」

「かしこまりました」

「アーサー君、夕食まで寛いでてね」

とフローリアとクレアは自室に向かった。

「アーサー様、お部屋にご案内いたします」

とメイドが案内し、アーサーの為に用意された部屋にむかった。

「アーサー様、着替えをここに置いておきますので、湯浴みでもなさってお寛ぎください。御用があれば、いつでもお申し付けください」

と一礼して部屋を出て行った。

アーサーは湯浴みで旅の汚れを落とし、用意された服に着替えソファーに腰掛けた。

「みんな出ておいで」

精霊王４人がアーサーの前に現れた。

「みんな、先日の黒い靄をどう思う？」

「アーサー様、『知の神』に伺いましたが、おそらく創造神が世界を作った時に残された混沌の一部ではないかとのことでした」

「やっぱりそうか。
お義父さんの『理』に入っていなかったから、精霊も感知できなかったんだな。
お義父さんも『理』に入っていないものが存在するなんて思ってなかっただろうしね」

「御子様、あのものには魔術や武術などは通じません。いかがするおつもりですか？」

「君達も『神気』は使えるよね」

「わたくし達まもちろんですが、上位精霊ならば少しは使えます」

「今度出会ったら、魔術に『神気』を混ぜて攻撃してみてもらえるかな？」

「どういうことでしょうか？」

「この前の戦いで、ウンディーネの霧の中で『神気』を開放してみたんだ。そしたら、黒い靄は消えてしまったからね」

「わかりました」

「それから、ノーちゃん。『神気』を込めた剣って作れる？」

「素材にアーちゃんが『神気』を込めてくれたらつくれるよ」

「それじゃあ、レイピアを2本おねがい」

「それってフローリアとクレアの分？」

「そう、彼女達は僕といることが多いから、身を守る武器が必要なんだ。近いうちに上位精霊が契約してくれると助かるんだけどね」

「そういうことなら、お二人と精霊神殿においでください。相性の良い者を探しておきます」

「頼んだよ」

「……」

「サラマンダー、どうしたの？」

「……」

「サラマンダーは、まだいじけてるようです」

「サラマンダー、次は豪快に相手をやっつけてくれ」

「おお、御子様のお申しつけならば何でも焼いてみせますぞ」

単純な火の精霊王であった。

第3章　3話

精霊王達と話した後、アーサーは部屋で寛いでいた。

コンコン

「アーサー様、お食事の用意ができましたので、ご案内します」

と緊張気味にメイドが声をかけた。

「は～い、直ぐ行きます」

と返事をし、シロを伴って食堂に向かった。

「シロは子犬と一緒ですから、怖くないですよ？」

「いえ、決して怖いなどとは……」

とメイドに声をかけたが、メイドの緊張はほぐれることはなかった。

「おっ、アーサー君、似合ってるじゃないっ」

「アーサー様、すてきですわ」

とフローリアとクレアが声をかけた。

「お父様は少し遅くなるらしいので、先に食べましょう」

配膳された食事を食べながらも、控えていたメイドからの視線が気になった。

「リア、さっきから凄く見られてるんだけど……」

「みんな、お客様に失礼よ」

「「「申し訳ございません」」」

「まあ、気になるのは分かるけどね。
アーサー君のお父上はお爺様の弟子でお父様のご友人でもあったのよ。
そして今は私とクレアに武術を教えてくれてるの。わかった？」

「「「はいっ！！」」」

「アーサーです。よろしくおねがいします」

「「「こちらこそ、大変失礼いたしました」」」

「アーサー様、こちらのメイド達は姫様が大好きですから、アーサー様が恋人じゃないのかと心配していたのですわ　うふふ」

「全然、そんなことないのにね」

とアーサーは零したが、フローリアは不満そうな顔をしていた。

食後のお茶を楽しみながら、敷地内の説明を受け明日からの鍛錬場所の確認を行ってから各自部屋に戻った。

馬車での疲れをとるため、屈伸などの軽いストレッチをしていると

「アーサー様、公爵様がお呼びです」

と声がかかり書斎に案内された。

「ロバート様、お呼びですか？」

「その『様』付けは止めていただけませんか、殿下」

「『殿下』ってのもやめてくださいよ、ロバートさん」

人払いしているため、ロバート自ら入れたお茶を飲んで談笑していると

「ご主人様、お客様をお連れしました」

と声がかかり赤い髪の男がドアを開け入ってきた。

「ロバート、俺を呼びつけるとはいい度胸だな。くだらん用事だったらゆるさんぞ」

と笑いながらソファーに近づいてきて、アーサーに目をやり固まってしまった。

「陛下、アーサー王子です」

「おお……」

「伯父上、お初にお目にかかります」

と頭を下げたアーサーに国王は涙を流しながら抱きついた。

「ア・アーサー　よく無事で！　ずっと探していたんだぞっ」

「伯父上、ご心配をおかけしました」

「それに初めて会うんじゃないぞ。お前が生まれて直ぐに会っておるからの」

「まあまあ、とりあえず座ってお茶でもいかがですか？」

とロバート自ら3人分のお茶を入れなおし、にこやかに笑った。

「ロバート、お前はひどい奴だな。何故内緒にしおった」

「それは陛下の驚く顔を見るためですよ」

とサラリと言い放った。

「ロバートさん、父上のことは言えませんね」

と3人は笑った。

「アーサー、早速城にもどり国民に発表せねばならんな」

「伯父上、それはお待ちください」
アーサーはこれまでのことを説明した。

「それでは、その『黒い靄』もようなものが、兄上や義姉上を？」

「精霊達の調べでは、そのようです」

「兄上達の事件もそうだが、大神殿も許せんな。実際俺が結婚せんのも大神殿のご神託とやらでおかしな貴族の令嬢を薦めてくるからじゃしな」

「前々から、可笑しいとは思っておりました。
王妃様がご健在だった頃は国政に口出すようなことはございませんでしたからな」

「しかし、ご神託と言われれば『嘘じゃ』とは言い難いからなぁ～」

「僕のことを託宣させてみればいかがですか？」

「今まで、散々させてみたが、神にも分からぬとぬかしおったわ」

「陛下、おそらく今日入牢させたバーニングに助命の神託だでるのではないかと思います」

「なんでじゃ？」

「バーニングが大神殿に高額な寄付をしてるからですよ」

「どういうことだ？」

「貴族からの大神殿への寄付と今までの神託の時期が一致しているんです」

「なんということだ。それで如何にか対処できるのか？」

「神託を受けた本人を連れてこさせ『神の紋章』を確認させるのです」

「神の紋章？」

アーサーが篭手をはずし紋章をみせた。

「伯父上、『神の加護』をうけたものには、このように『神の紋章』が刻まれます」

記憶を手繰るように目を瞑って

「そういえば義姉上は肩が出る服は着られなかったな」

「おそらく肩に紋章があったんでしょうね」

「この紋章は刃物や魔術でも傷がつきません」

とナイフを抜き自らの紋章に刃を突きたててみせた。

「そうか、その紋章がなかったり傷がついたりすれば偽の神託として処分するわけじゃな」

「陛下、その通りです。これで神殿の奴らに一泡吹かせられますね」
ロバートと国王は悪い笑みを作った。

「そういえば伯父上は結婚されないのですか？」
「うむ、相手がおらんこともないんじゃが、例の神託で反対されておった」
「それじゃあ、問題ないじゃないですか。神託の嘘を見破れば良いだけですから」
「そ・そうか　早速結婚の準備もせねばならんの。わはははは」
「陛下もいよいよ結婚ですか……次は……」
とアーサーを見るロバートがあった。

第3章　4話

夜明け前、アーサーはいつものように鍛錬に励んでいた。
珍しく長剣を振り、丁寧に型を確かめるように行った。
人の気配を感じると、長剣を空間魔術でしまい、いつもの徒手の型に切り替えた。
「小僧、いつも早いな」
「ダンクルさん、おはようございます」
「おう、おはよう。いつ見ても俺達とは迫力が違うな」
「そんなことないですよ。みなさんも強くおなりですよ」
「そうかな？自分では感じないぞ？」
「みんなが強くなってるからじゃないですか？」
「確かに、身体のキレは良くなってるような気はするんだがな」
ぞろぞろと他の人々も集まって、それぞれ柔軟体操をして身体をほぐしていた。
「集合っ！」
王都の隊長が声をかけ、全員が整列した。

「おはようっ　昨日、ロレンツォから交代要員が到着した。
交代で領地に戻る隊は昼から引継ぎをして、帰省準備だ。
明日にはロレンツォに向けて出発だ」

帰省組はニコニコと笑って帰省を喜んでいた。

「それでは、鍛錬はじめっ」

隊長の声を聞いて、全員いつもの鍛錬を始めた。

ロレンツォから来たメンバーは、二人一組になり徹底した柔軟体操をはじめ、姫様とクレアはシロを相手に鬼ごっこをはじめた。

「なあ、あれなにやってんだ？」

「剣も振らずに体操だけ？」

「今度は、身体を押し合ってる？」

「姫様なんて子犬とじゃれてるぞ？」

「こらっお前ら人のこと見てないで自分の鍛錬しないかっ」

隊長の怒鳴り声に慌てて鍛錬を再開した。

朝食を食べながら談笑していると

「ロレンツォでは随分楽な鍛錬しかしてないようだな」
「なにおっ」
「あんな鍛錬じゃ、たかが知れてるってことだ」
「いい加減にしろよ」
「弱い奴とは仕事で組みたくないんだよ。命にかかわるからな」
「その言葉、そのまま返してやるぜ」

「貴様ら、やめんかっ！」
隊長の一言で静まりかえった。
「そこまで言うなら、この後試合をしてもらう。
騎士団、衛士隊合わせての勝ち抜き戦だ。
それぞれ騎士団から１０名、衛士隊から１０名選抜しろ、帰省組は審判だっ」
「「「おお！」」」
「隊長、勝ったらご褒美でるんですか？」
「酒樽をくれてやる」

食後少しの休憩をして、ロレンツォ組と王都勤務組が左右に分かれて座り、帰省組は審判の位置についた。

レジアス公爵家の騎士団は5隊からなり、2隊は王都、3隊は領地での勤務となる。

1隊は20名で構成され、下部組織として衛士隊50名が指揮下に入る。

その中から騎士10名、衛士10名が選抜されて今回の試合が実施された。

「勝負は一本勝負、負けた奴は交代、最後まで残った組の勝ちとする。一番手前へ」

ロレンツォ組は新人のダンクルが出て巨大な木剣を構えた。

「おーおー面白そうなことやてるじゃないか。俺も見物させてもらうぞ！」

とロバートがアーサーの横に座った。

「「「公爵様！！おはようございます！！」」」

皆の挨拶に手をあげて答え

「勝った組には、俺からも酒を振舞ってやるから気合いれていけよ

！」

「「「はいっ」」」

「はじめっ！！」

ダンクルは相手の突きをアッサリかわし首筋に剣を止めた。

「それまで！！」

その後、次々と相手を倒し5人抜きをしたところで

「ダンクル、俺達の出番がないじゃないか」

と仲間から声がかかったところで審判にむかい

「選手交代します」

と告げ、次の衛士に交代した。

次の衛士も5人抜きで交代し、3人目の衛士は騎士を相手に2人抜き、終わってみればロレンツォ組は13人も残っていた。

「俺達ぁ出番なかったなぁ～」

などとブツブツ言うロレンツォ組の面々に対し

「それなら私とクレアがお相手するわっ」
とフローリアが言い放ち、クレアが前に出てきた。
ロバートは「お転婆めっ」などと言いながらニヤニヤ笑ってた。
結局、クレアが6人抜き、フローリアが残り全員を抜いて勝負は終わった。
「おいおい、お前ら大丈夫か？女の子二人にやられちまうなんて」
「申し訳ございません。公爵様、姫様とクレア嬢は強すぎです」
「あはははは　そうだろうな。フローは先日俺と引き分けたからな」
「ええっ！？公爵様と引き分け？」
「アーサー君にいたっては、勝負にもならんかった」
「……」
王都にいた面々は驚き呆然としていた。
「俺達の鍛錬方法はアーサー殿に教えられたもんなんだ。効果は今見ただろう？」
「俺達にも教えてくれっ」
「明日から一緒にやろうっ」

単純な武術馬鹿は意気投合した。

「ところで、酒樽はどうなるんだ？」

「心配するな。今夜の歓送迎会に酒樽はとどけてやる」

「「「公爵様、ありがとうございます」」」

「これからも鍛錬にはげめよ」

「「「がんばります」」」

「ところでアーサー君、いつまでフローに正体を隠しておくんだい？」

「もういいかなとは思うんですが、タイミングが難しくって」

「王都では、お母上のお顔を知ってる者が多いから、アーサー君の顔をみれば気付かれるのも時間の問題だ。早めに話してやってくれないか？」

「はい、わかりました。他人から知らされるよりは、僕自身で伝えたいですからね」

「よろしくたのむよ」

第3章　5話

昼食後、少し話したいことがあるとフローリアとクレアを自室に呼んだ。

部屋に入りクレアがお茶を用意してくれ、皆緊張した面持ちでソファーに座った。

＜シルフ、遮音の結界を頼む＞

＜はいよ＞

「これから話すことはロバートさんやランバートさん以外誰にも言わないで欲しいんだ」

「「わかったわ」」

「昨夜、ロバートさんの計らいで伯父上にお会いすることができたんだ」

「よかったわね～　どんな方だったの？」

「それは、君達もよく知ってる人だよ」

「「私達が知ってる？」」

「伯父上の名前はアルフレッド・ボガード・ローレンシア」
二人は目を見開いてアーサーの顔を見た。
「僕の名前はアーサー・フォンライン・ローレンシアって言うんだ」
二人はあわてて跪き頭を下げた。
「そんなことしないでよ。普通に接してほしいな」
「「しかし」」
「ランバートさんやロバートさんは普通に接してくれてるでしょ」
「「わかりました」」
アーサーはフローリアを見て
「リアは父上の親友の娘」
次にクレアを見て
「クレアは僕の従姉、それでいいんだ」
フローリアとクレアはお互い顔を見合わせて
「「これからもよろしくね、アーサー君（様）」」
とニッコリと笑った。

「それにしても驚いたわ。アーサー君が王子様だったなんて」
「わたくしは、なんとなく気づいてました。お父様の書斎で叔母様の肖像画をみたことがあったので……」
「クレアったら酷いわ。私に内緒事するなんて」
「やっぱりロバートさんの言うとおり、母上の顔からバレてしまいそうだね」
「アーサー様は本当によく似てらっしゃるから」
「僕は母上の顔を覚えてないから、分かんないや」
「姫様のお母上も王妃様とは親友だったのですよ」
「そうなんですか？」
「王妃様が亡くなられた後も、王妃様の遺志を継いで国民の為に色んな活動をされておられました。
5年前も流行病が王都に広まった時も、自ら看護なさってご自身も病で……」
「そうだったんですか。母上の遺志を継いで……リア、辛い思いをさせてしまったね」
「アーサー君、母上は私の誇りなの。死の間際まで国民を心配してたわ。
私も母上のように、みんなの役に立つよう生きるつもりよ」

「わたくしも、その当時お手伝いをさせていただいたのです。
でも、当時１２歳のわたくしには大したお手伝いもできなかったのです。
それで姫様のお母上がお亡くなりなった時、姫様をお守りするよう心に決めたのです」

「じゃあリアは、これからいっぱい勉強しなきゃね。
人々の助けになるような知識も必要だからね」

「なんでそんな話になるのよ」

「あはははは」

「これから、ふたりにお願いがあるんだけど良いかな？」

「なに？」

「精霊神殿に連れて行って欲しいんだ」

「精霊神殿？」

「二人に相性の良い上位精霊がいたら契約してもらおうと思ってるんだ」

「精霊と契約？私が？」

「わたくしは既に精霊と契約してますよ？」

「僕と一緒にいると、この前戦った『黒い靄』に襲われる可能性があるんだ。
上位精霊なら『神気』が使えるから身を守ることができそうなんだ」

「精霊と契約なんてワクワクするわ」

「わたくしと契約してる精霊はどうなるんですか？」

「そのままで大丈夫ですよ。すっかり懐いてるから放すのは可哀想でしょ」

「それなら安心して契約できますわ。すぐに馬車の用意をさせてきますね」

クレアはパタパタと部屋を出て行った。

3人は精霊神殿に到着し、アーサーを先頭に中に入って行った。
誰の案内もなく神殿の奥に向かってあるいていると

「一般の方は、これより先はご遠慮願えませんか？」

と声をかけられた。

振り向くと、柔和は顔をした神官が立っており3人を見ていた。

「お前ら　こっから先は俺様のように強い精霊の加護を受けた人間しか入っちゃいけないんだぞ」

と神官の横に立っていた少年が威張っていた。

なお無言のアーサーに文句を言いかけたとき

「ベヒモスよ、吾等に向かって大きな口を叩けるようになったもんだな」

と真っ赤な髪をした美女が姿を現した。

「ひっ！？サラマンダー」

「吾を呼び捨てにするとはいい度胸だな」

「サラマンダー様、ご勘弁を」

少年は慌てて姿を消した。

「神官様、僕達は精霊王に連れられてここに参りました。このまま奥に進んでもよろしいですか？」

「もちろんでございます。その容姿、もしかして……」

アーサーは頷いた。

「僕のことは誰にも話さないようにお願いしますよ」

「かしこまりました」

と一礼して去って行った。

「サラマンダーさん、こわすぎっ」

「あはははあの小僧は昔から生意気なんで少し怖がらせたほうがいいんだ」

神殿奥の祭壇のある部屋にたどりつくと、残り3人の精霊王が姿を現した。

ウンディーネはフローリアとクレアを見て

「お二人とも魔力や魂の清浄さも問題ないようです。お二人にふさわしい精霊を紹介いたしましょう」

と、誰かを呼ぶような動作をした。

4人の少女が姿を現し、精霊王の前に跪いた。

「青い髪をしているのが、わたくし配下の上位精霊　ミスト、茶色い髪をしているのがノーム配下のソイル、赤い髪をしているのがサラマンダー配下のフレア、緑色の髪をしているのがシルフ配下のウィンでございます」

「私はフローリアです」

「わたくしはクレアと申します」

「ウンディーネさん、契約ってどうやるんですか？」
「簡単ですよ。お互いに一緒にいることを望めば良いだけですから」
「そんなに簡単なんですか？」
「魔力が不足していたり、魂に穢れがあれば精霊が拒否しますし、そもそも現れることもないですから、あとはお互いが認め合うだけです」
「フローリアさんは、誰と契約したいですか？」
「よくわからないけど、フレアさんとウィンさんが気になってるの」
「わたくしはミストさんとソイルさんが気になってます」
「それが相性なんですよ」
とニコニコ笑い、少女達を見てフローリア達の傍に行くように促した。
少女達はジッとフローリアとクレアを見て、ニッコリわらって傍に寄って行った。
お互いに名乗りあいフローリアがフレアとウィンの髪を撫でた時、3人を一瞬目映い光が包んだ。
「今のは何？」
「お互いの魂が繋がった証です。これでフローリアさんの契約は終

了ですね」

同じようにクレアもミストとソイルと契約をはたした。

「これで私も精霊術使えるの？」

「力の使い方は精霊達が教えてくれますよ。少しづつ覚えていってください」

クレアが元々契約していた精霊を心配していたら、ミストが小さい女の子を肩に乗せているのに気付いた。

「ミストさん、その子はもしかして」

「クレア、この子が契約してた精霊よ。同じ水の属性だから、私の妹みたいなものよ」

「可愛がってあげてね。ずっと一緒だった子だから」

「まかしといて！！」

精霊達は一旦姿を消し、アーサー達は神殿を後にした。

第3章　6話

帰りの馬車の中で、アーサーから精霊との付き合い方を教わり嬉々として屋敷に帰った。

夕食までの間、アーサーの部屋で精霊を呼び出し、色々話しをしたり精霊術の基礎を教わったりして過ごした。

ロバート抜きの夕食の時、ふと気になっていたことをフローリアに尋ねた。

「そういえば、リアは友達いないの？」

「子供の頃から武術ばっかりだったから、友達はクレアだけね」

「他の貴族のご令嬢とかご子息とかは？」

「晩餐会で会うくらいで、普段が交流がないわ」

「姫様は普通に接するのですが、相手が媚を売ってきたりして大変なんです」

「そうそう、私と結婚すれば公爵家を継げるから、そういう目でしか見てくれないわ」

「あはははは　身分があるのも大変なんだね」

「そういうアーサー君だって身分がバレたら大変よ。なんたって王

子様なんだから」

「そういうのは嫌だな～」

「アーサー君も友達作れないかもね」

「リアやクレアさんがいてくれるでしょ。
他にも沢山の仲間や友達に支えられてるからね」

「シロやウンディーネさん達のこと？」

「それ以外にもランバートさんやロバートさんに騎士団の人達、みんなが助けてくれるよ」

「私達が助けられてばかりだと思うよ」

「リア達と出会えて、僕にも守りたいものができたんだ。漠然としてた思いが具体的になった気がするんだ」

「私も及ばずながらお手伝いします」

「わたくしも、ただ守られてるよりはお手伝いさせていただきます」

「ありがとう。頼りにしてるよ」

「「はい」」

「話は変わるけど、昨夜伯父上が結婚するぞっって帰って行ったけど、お相手は誰なんだろう？」

「陛下が？もしかしてローズ姉さんのことかしら？」
「ローズさん？」
「私の従姉でシュベルト伯爵家の長女よ。前々から噂はあったから」
「そうなんだ～、上手くいけばいいね」
「そうね、私も応援しなくっちゃ」
食事の後、それぞれ部屋に帰って行った。

アーサーが部屋に帰ると、ソファーに二人の男女が座っていた。
金髪に金の瞳の男性がアーサーに声をかけた。
「アーサー、久しぶりだな」
「お義父様、お義母様、おひさしぶりです」
「坊や、元気そうね」
と優しい笑みを零した。
「アーサー、あの『黒い靄』のことじゃが、やはり『混沌』の残滓のようじゃ」

「この世界が作られる前の『混沌』のことですか？」

「そうじゃ。創造神様が世界をつくったおりに、見逃してしまったのじゃろうな」

「それがどうして今頃でてきたのでしょうか？」

「ただの濃い魔力だったものが、人間の欲望を吸収して意思を持つようになったのじゃろう。人間ほど欲望の強い生き物はおらんからな」

「それで、人間を操って戦を巻き起こし、混沌とした世界へ？」

「人間同士が争えば、自然が壊され他の生き物達も生きていけなくなる。

そうなれば世界の理を乱す者として、ワシが人間を滅ぼさねばならなくなるからな」

「坊や、神が人間を滅ぼすとき、どうすると思う？」

「大地震や洪水などでしょうか？」

「そうなると滅びるのは人間だけじゃないわね」

「でも、お義母様、何も生き物がいなくなっても、『混沌』には戻らないんじゃないでしょうか？」

「何も生き物がいなくなってしまえば、我々神も必要なくなるでしょ。

神すらもいなくなった世界を『混沌』に変えるのは時間がかかっても容易いことなのよ」

「そうですね、ただ破壊して混ぜ合わせていけば良いだけですものね。
それではお義父様もお義母様も手伝っていただけるのですか？」

「アーサー、今の段階では無理じゃ。
今は人間の間だけの問題じゃからの。
『黒い靄』仮に『澱』と呼ぶが、こやつらが直接人間や他の生き物を攻撃するならば、我等も介入できるが、いまのところ直接手をくだしているのは人間じゃ。
種族内の問題に神は手をくだすことはできんのじゃ。
神は理を作り出すが、理に縛られる」

「それでは『澱』と同じように間接的になら、お手伝いいただけるんじゃないですか？」

「そういうことじゃ」

神は2本のレイピアを取り出した。

「アーサーがノームに頼んだものに、ワシが手を加えたものじゃ。
このレイピアから魔術を発動させれば『神気』を含ませることができるようにしておる。
これなら精霊と離れておっても戦うことは可能じゃ。
柄には精霊石を2つ埋め込んであるから、いつも精霊を身近におくこともできるぞ」

「ありがとうございます」

「坊やの可愛い彼女を守る為ですもの、なんでもないことよ」
「作ったのワシなんじゃが……」
「それから、お願いがあるんですけど……」
「なに？」
「伯父上がご結婚されるらしいんですが、大神殿が例の偽神託で邪魔をしそうなんです」
「あら、それなら紋章でやっつけるんじゃなかったの？」
「あははは　それとは別に、僕のダガーのように神の紋章の入ったものを贈れないかと」
「坊やからの贈り物としてならいいわよ」
とアーサーのダガーよりは小ぶりな短剣を2振りとりだした。
「1本は『知の神』の紋章、もう1本は私の紋章よ。結界を張るくらいしか力はないけど、身に危険が迫ったら勝手に結界を張ってくれるわ」
「ありがとうございます。これで両親のような事態は防げますね」
「そうね。なにか不安があったの？」
「どうも大神殿が気になってるんです。もしかしたら『澱』の巣な

のかもと……」

「それはあるかもしれんな。
人が祈りには純粋なものだけでなく欲望もあるからな。
特に貴族などの欲望の強い人間が集まる場所なら可能性は高いな」

「坊や、気をつけるのよ。私達に世界を破滅させないでね」

「はい、全力をつくします」

「それと、はやく孫の顔みせてね。うふふ」

笑い声とともに2人は姿を消した。

「孫って……」

第3章　7話

翌朝、フローリア達とシロの鬼ごっこに声援を送っている精霊達がいた。

「がんばれ〜」
「おしいっ」
「もうすこしっ」
「神獣手加減しろっ」

などと騒いでいるが、他の者からは見えていないようだった。

「随分仲良くなったようだね」

とアーサーが声をかけると、慌てて跪き「「「「御子様、おはようございます」」」」と挨拶した。

「畏まらなくっていいよ」

「はい、お二人はとてもお優しくって我々もお傍にいるのが嬉しいです」

「それはよかったね。これからも仲良くね」

「「「「はい、もちろんです」」」」

シロとの鬼ごっこが終わり息を整えているふたりに近づき

「精霊達とも仲良くなったみたいだね」

「うん、みんな可愛くって」

「あははは　姫様、お母さんみたいな口ぶりですね」

「せめてお姉さんって言ってよ」

アーサーは笑っている二人に2本のレイピアを差し出した。

「アーサー君、これは？」

「昨夜、神から授かったんだ。詳しい使い方はあとで話するよ」

「私がもらってもいいの？」

「わたくしにもですか？」

「二人に渡すよう授かったからね。柄に精霊石が付いてるから、精霊達も一緒に居れるよ」

アーサーが精霊達に手招きすると、スーと精霊達は精霊石に入っていった。

二人は手にしたレイピアの美しさに見入っていたが、やがて鞘から抜き軽く振って手ごたえを確かめていた。

「凄いわっ、扱いやすい」

「軽いですわ、まるで羽のようですわ」
「ありがとう、大切に使わせてもらうわ」
「ありがとうございます」
「そのレイピアを天にかざして、神にお礼を言えば良いよ」
「「神様、ありがとうございます」」
一瞬レイピアが輝いたような気がした。

朝食をとりに騎士団食堂には、先にロバートが来ていた。
「「「おはようございます」」」
「おはよう、今日も鍛錬頑張ってるかい？」
「もちろんですわ」
「フロー、クレア見たことない剣を持ってるな？」
「さっきアーサー君からもらったのよ」
「見せてもらえるかな？」
フローリアは、「はいっ」と差し出した。

すばらしく綺麗な外見に似合わず、異常に重く両手で支えるのがやっとであった。

「こんな重いもの使えるのか？」

「重い？私にはとても扱いやすい重さですよ？」

「このレイピアは神が認めた者以外使えません」

とアーサーは苦笑して言った。

「そうか神剣ということだね」

「ロバートさん、少しお願いがあるんですけど……」

「なんだい？」

「伯父上に会いに行けませんか？」

「会わせることは問題ないが、城内でその姿を見られたら問題になるかもしれんな」

「お父様、魔術士みたいにフードを頭からかぶせれば？」

「おおっ、それなら良いかもしれんな。今日の昼からでも良いかな？」

「はい、お願いします」

午前中いつもの鍛錬を終えたアーサーは、フードを目深に被った怪しい格好で王城の中を歩いていた。

衛兵に守られた扉の前で、衛兵に声をかけた。

「陛下にお客様をお連れした」

コンコン

「誰だ」

「ロバートです。お客様をお連れいたしました」

「入れ」

衛兵が扉を開け、中に入った。

お茶が用意されメイドが立ち去るときに、しばらく部屋に誰も近づかないように伝えた。

メイドが退出したのを確認してアーサーはフードを取った。

「アーサー、よく来てくれたな」

「お忙しいところ申し訳ございません」

「他人行儀な話し方すんなよ、叔父と甥じゃないか」
「今日は伯父上にお渡ししたいものがあって参りました」
「なんだ？」
「僕から伯父上への結婚祝いです」
と懐から2本の短剣を差し出した。
「結婚祝いとは、気が早いな」
といいながら短剣を手に取り眺めていた。
「おそらく大神殿が伯父上の結婚に否を唱えるのは、政治的なものではないかと思ったんです」
「どういうことだ？」
「お相手はシュベルト伯爵家のローズ様でしょ？」
「よく知ってるな。それも神の加護なのか？」
「はい、といいたいところですが、フローリアとクレアが教えてくれました」
「さすがに女子はそういう話には敏感だな」
「シュベルト伯爵家はレジアス公爵家の親戚でしょ。これ以上王家との縁を強められては困る者共が大神殿に依頼したのではないかと

考えたのです」

「ありそうなことだな」

「その短剣には、それぞれ『知の神』『生命の女神』の紋章が刻まれています。神から授かったとすればどうなると思います？」

「誰も否とはいえんな。しかし、そんな嘘は……」

「嘘ではございませんよ。その短剣は神から授かったものです」

「本物なのか？」

国王は目を見開き、短剣を抜いて紋章をみつめた。

「その短剣は、身に着けた者に危険がせまれば結界を張って守ってくれます。

父上や母上のようにならないようにと神が授けてくれました」

「そのような大事なものを俺が貰って良いのか？アーサーが持っていたほうが良いのではないか？」

「僕はすでに持ってますよ」

と腰のダガーを見せた。

「それなら、この短剣を授かったことも一緒に発表すれば、一切の横槍も入らぬな」

「陛下、大神殿としても祝辞を述べる以外ないですね」

「よしっ、すぐにでも発表するぞっ。すぐにローズを呼びだせ。発表じゃぁぁぁ」

「陛下、舞い上がりすぎです」

「なにを言っておる、何年も待たせてしまったんじゃぞっ。可愛い甥っ子に祝いまで貰って直ぐに行動せねば男じゃないわいっ」

すぐにシュベルト伯爵とローズ姫が呼び出され、「今すぐ婚約発表するぞっ」と鼻息の荒い国王を呆然として見ていた。

第3章　8話

国王の執務室に呼び出されたシュベルト伯爵とローズ姫が呆然としているのを見て、ロバートは国王を宥め落ち着かせた。

「陛下、こちらの少年は？」

「カシュア、見て分からんか？」

はて？ともう一度アーサーを眺め、段々と目を大きく見開いていった。

「も・もしやっ！？」

「そう、俺の可愛い甥っ子だよ」

慌てて臣下の礼をとり跪いた。

「頭をあげてください。シュベルト伯爵」

未だ事情がわからずキョトンとしているローズにむかって

「ローズ、これが行方不明だったアーサーだよ。正真正銘僕の甥だ」

「アーサー・フォンライン・ローレンシアです。お会いできて嬉しいです。ローズさん」

「ローズ・バレンシア・シュベルトと申します。お会いできて光栄です」

「申し送れました。わたくしはカシュア・オランタ・シュベルトと申します」

「まだ、皆には秘密にしておる。色々事情があってな」

「カシュア殿、今知ってるのは、俺の家族とクレア嬢とここにいる者だけなんだ」

「兄上を害した黒幕を倒すまで、迂闊に発表できんのだ。アーサーも一度襲われておるからな」

「そういうことでしたら、口外はいたしません。ローズもわかっておるな？」

「もちろんです。誰にも言いませんよ」

「ところで、なんで急に婚約発表なんですか？」

「アーサーからこれを貰ってな」

と短剣をとりだした。

「綺麗な短剣ですが？」

「これは、神より授かった短剣なんだ。俺の結婚祝いに授かった」

「『神剣』ですか？」

「そういうことだ。これで大神殿も横槍は入れれん」

と1本をローズに渡した。

「これを持っておると、危険が迫れば結界を張ってくれるそうだ。兄上達のようにならぬようにと神が授けてくださった」

「ローズさん、抜いてみてください。伯父上も」

二人は短剣を抜いてみた。

「刀身に紋章が刻まれているのがわかりますか？」

「おお」

「それが神の紋章です。伯父上のが『知の神』、ローズさんのが『生命の女神』です。

その剣はいかなる衝撃でも魔術でも傷はつきません。

肌身離さず持っておいてくださいね」

「わかった」

「ありがとうございます。アーサー様」

「アーサー君、今朝フロー達に渡したレイピアとは違うようだが……」

「彼女達のも『神の加護』はついていますが、相手と戦う能力も付与されています。

申し訳ないのですが、僕の傍にいるだけで危険なので、身を守れるようにと神が授けてくれました」

「アーサー、大丈夫なのか？彼女達の力なぞ知れておろう」
「陛下、フローは私と互角の腕前ですぞ。
クレア嬢もそれに匹敵します。
先日も二人で当家騎士団の１隊と対戦して無傷で勝利したくらいです」
「とんでもないお転婆娘達だな　あはははは」
「ロバート、急で悪いんだが今夜王家主催の晩餐会を開いてくれ。
そこで婚約発表をするから」
「かしこまりました。さっそく招待状をだしておきます。アーサー様はどうされますか？」
「そのままでは、すぐにバレてしまうな」
「陛下、わたくしとフローリア達で変装させますわ。身分は考えておいて下さい」
「わかった、そうしてくれると有難い」
「公爵様、フローリアとクレアを直ぐ呼んでいただけますか？陛下、客間を借りますわよ」
とローズはパタパタと立ち去っていった。
「伯父上、完全に尻に敷かれますね」

「言ってくれるな……」

しばらくして戻ってきたローズにアーサーは再度フードを被せられ、客間に連行された。

ずらりと並んだ衣装を前にローズは腕まくりをして、アーサーの身体に合わせ始めた。

「大きさは少し手直しが必要だわね」

「色はなんでも似合いそうだから困ったわね」

などとブツブツ言い、服をとっかえひっかえアーサーに合わせていった。

「ローズさん!?この服はどこから?」

「あなたの父上のものですよ。だから遠慮なさる必要はございませんわっ」

「遠慮してるわけじゃないんだけど……」

ドタンと大きな音でドアが開きフローリアとクレアが入ってきた。

「ローズ姉さん、婚約おめでとうっ」

「ローズ様、おめでとうございます」

「ふたりともありがとう　今は時間がないわっ。アーサー様を仕上げなくっちゃ」

「「わかりました」」

フローリアは持ってきた荷物の中から鬘をとりだしアーサーに被せてみた。

「もう少し明るい茶色のほうが良いのではないですか？」

とクレアは別の鬘を取り出してきた。

「そうね、そっちのほうが良いわね」

「そうすると服の色は……」

「フローリアは何色なの？」

「今日は赤ですわ」

「じゃあ、それにあわせてね。アーサー様にエスコートしてもらうんでしょっ」

「わかったわ、ローズ姉さんも急いで用意しなくっちゃ」

「わたくしは、王妃様の衣装をお借りするわ。アーサー様よろしいですか？」

「どうぞ、好きに使ってください……」

慌しく用意が進められ、アーサーは晩餐会の前に疲れ果てていた。

その頃、シロは公爵家で騎士団と遊んでいた。

第3章　9話

王宮の大広間に貴族や子息・子女達がぞくぞくと集まっていた。
招待されたのは伯爵以上の貴族２８家と先代王妃の実家アッサム家、各国の大使であった。

「急な晩餐会とは珍しいですな」
「何か発表されるのですかな？」
「例の男爵事件のことかもしれませんぞ」
「それはないでしょう。後日審判の場に召集がかかるはずですから」
「それもそうですな」
「陛下の気まぐれかもしれませんな。あはははは」

アーサーにエスコートされフローリアとクレアが入場してくると、貴族の子息・子女達が挨拶に寄ってきた。

「ごきげんよう、フローリア様」

「フローリア様、今日もお綺麗ですね」

などと口々に挨拶し、フローリアも挨拶を返していた。

クレアも皆に挨拶するものの、軽く会釈だけですまされている。

集まった子息・子女達はチラチラとアーサーを見て気にかかるようで、思い切って一人がフローリアに問いかけた。

「フローリア様、こちらの殿方は？」

「この方は、事情があって詳しくはお話できないんですけど、他国の貴族の方で我が家に武術修行にこられてるアーサー様です」

「アーサーと申します。
公爵家でお世話になっています。
今日は修行の依頼を快く引き受けてくださった国王陛下にお礼を申し上げる為に参上させていただきました」

とアーサーは軽く会釈した。

「公爵家の武術は有名ですから修行も大変でしょう？」

「皆様お優しいので、楽しく修行させていただいております」

とニコリと笑顔で返答した。子女達は頬を染めて撃沈していた。

「僕も公爵家の鍛錬に参加させてもらったことがあるけど、君はついていけてるの？」

「アーサー様は、私はおろか父上も打ち負かす程の腕前ですのよ。
我がレジアス騎士団のほうが指導してもらってるくらいですの」

フローリアの言葉に子息達は悔しそうな顔をした。

次々と寄って来る貴族や子息・子女達に挨拶を繰り返していると、国王の入場を告げる声が会場に響き渡り、全員が会話を止め入場口に目をやった。

入場口の扉が開き、ローズをエスコートしたアルフレッド国王が入

場してきた。

会場にどよめきがはしり今夜の主旨を理解した。

「皆のもの、今夜は急な呼び出しにも係わらず集まってもらって感謝する。
もう気付いていると思うが、今夜は俺とシュベルト伯爵家息女ローズの婚約を祝うための夜会だ。
みんな楽しんでいってくれ」

と手をあげ挨拶した。ローズは会場に向かって深々とお辞儀をした。

貴族達は我先にと国王のもとに向かい、お祝いの言葉を贈りはじめた。

国王に挨拶がすんだものは、ロバートと一緒にいたシュベルト伯爵にもお祝いの言葉を贈りに殺到した。

王妃の席を狙っていた子女達は鋭い目でローズをみていたが、フローリア達公爵家所縁の者達はローズを暖かい目で見て挨拶が一段落するのを待っていた。

アーサーはロバートに呼ばれニヤケタ顔をしている叔父のもとに行った。

「「陛下、ご婚約おめでとうございます」」

「おお、ロバートにアーサー。ありがとう」
「アーサー君、このまま済むと思うかい？」
「いえ、大神殿から誰かくるでしょう」
「やっぱりな」
「陛下、大神殿の者が来て『神剣』の話をもちだした時、僕が合図しますから、ローズさんと一緒に短剣を抜いて紋章を皆に見えるよう翳していただけますか？」
「それはかまわんが、なにかあるのか？」
「少し皆を驚かせようかと……」
「なにか悪さを考えたな～　兄上とそっくりじゃな。あははは」

和やかな雰囲気で話していると、でっぷりと太った貴族が声をかけてきた。
「陛下、ご婚約おめでとうございます」
「うむ」
「レジアス公爵殿、そちらの少年は？」
「陛下のご紹介で預かっている他国の修行者でアーサー殿です。デ

ロリアン公爵殿」

「アーサーと申します」

「俺の知り合いの子息でな武術の才があるので引き受けたんじゃ。フローリアの婿にどうじゃと勧めておるところじゃ」

「さようでございましたか。フローリア嬢には愚息を貰ってもらおうと思っておりましてな、公爵家同士の縁を強めていただこうかと思っておりますんじゃ」

「こればっかりはフローリアの意思もありますし、フローリアの出した最低条件がフローリアより強いことですからなぁ～」

「それは難しい条件ですな。その条件を満たせる若者など居りますまいに……」

「フローリアは俺と互角ですからな。今のところ俺を打ち負かせたアーサー殿しか条件をみたしておりません」

「レジアス公爵殿を打ち負かす？その若さで大陸有数の剣士以上とは信じられませんな。愚息にも修行に励むよう伝えておきますわい」

と忌々しそうに去って行った。

「ロバートさん、今のは？」

「婿の押し売りですよ」

「リアも大変ですね」

まもなくすると会場入り口から神官服を着た男が慌しく入ってきて、真っ直ぐに国王も元にやってきた。

「陛下、此度は重大な発表をなさったようですな」

「ん？今日は大神殿には招待状を出してないはずだが？」

「先ほど多数の方から使いをいただきまして、一大事とまかりこしました」

「それで、祝いを述べにきてくれたのか？わざわざのお越し感謝する」

「いえ、以前からお伝えしている通りご神託で、ローズ様とのご婚姻は災いを招くとお伝えしたはずです」

「誰に対しての災いだ？」

「もちろん、この国の災いでございます」

「どのような災いかな？」

「神の意思に反すると、どのような災いが起こるかわかりませぬ」

「それで、俺の婚姻に口出しをするというのか？」

「いえ、国の行く末を決める大事なれば、ご神託を踏まえていただかねばと」

「それなら問題ないぞ」

「どういうことでしょうか？」

「俺達は神より祝福を得たのでな」

「神の祝福ですか？」

「そうだ、皆の者も聞いてくれ」

国王はローズに手招きして呼び寄せた。

「今日の婚約発表は『神の祝福』を得たからなのだ。神より祝いとして『神剣』を授かった」

「『神剣』でございますか？大神殿からはそのようなものお出ししておりませんぞ」

「神の加護を受けた者は大神殿以外にもおるということだ」

「大神殿を通さぬとは不届きな。それは本物ではないかと……」

「このとおり神の紋章もはいっておる」

チラリとアーサーを見ると頷いたので、ローズとふたり短剣を抜いて目の前に翳した。

目映い光が会場を埋め尽くし、会場内に清浄な風が吹き抜けた。

「「「おお～～～～～」」」

「これで納得いったかな？神官長」

「わかりました。陛下、今度その者にお引き合わせくださいませぬでしょうか？」

「それは約束できんな。この『神剣』を授けてくれた者の意向もあるのでな」

「それから、5日後にバーニングの審判を行うゆえ、皆参加してくれ。さあ、無粋な話はここまでじゃ。みんな楽しんでくれっ」

不機嫌そうな顔をして退出する神官長を見送り、国王達は笑いを堪えていた。

「アーサー、面白いことするじゃないか」

「お気に召しませんでしたか？」

「笑いを堪えるのに必死じゃったぞ、なあローズ」

「スッとしましたわ。アーサー様、ありがとうございました」

会場の隅に移動していたロバートは、蹲って肩を震わせてお腹を押さえ涙を流していた。

第3章　10話

神官長が帰った後も夜会は続いていた。

アーサーは子女達に囲まれ、フローリアは子息達に囲まれて身動きできない状態になっていた。

「アーサー様には許婚がいらっしゃるの？」

「どこの国からいらっしゃたの？」

「陛下とはどのようなご関係？」

アーサーはウンザリしながらも、爽やかな笑顔でのらりくらりと話しをかわしていた。

見かねたクレアがアーサーの傍により

「アーサー様、姫様がお呼びです」

と周囲の子女達から睨まれながらも、申し訳なさそうに礼をしてアーサーを連れ去った。

「クレアさん、助かったよ」

「どういたしまして、従弟殿　うふふ」

フローリアの近くまでやってきた二人は、様子がおかしいことに気

付いた。
小太りの、いかにもお坊ちゃま風の少年が数名の取り巻きを従えフローリアと話していた。
「陛下も婚約なされたことだし、我々も発表しようではないか」
「何を発表するんです？」
「何を言ってるんだい？父上からレジアス公爵に話はいってるはずだが？」
「さあ、なんのことかしら？」
「公爵家同士の縁をふかめようと」
「縁ですか？武術の交流戦の申し込みですか？」

「クレアさん、あの方は？」
「ああ、デロリアン公爵の次男ですね。前々から縁組のお話があるのですが、ご当主様も姫様も相手にされておりません」
「ああ、先ほど父親がロバートさんに子息を押し売りしてたよ」
「あらあら、懲りもせず……」

「交流戦！？そんな話は申し込んだこともないが？」

「あら残念、最近申し込みが少なくって張り合いがございませんわ。これでは婿選びも難航しそうですわ」

フローリアは周囲を見回し困ったような顔を向けたが、アーサーを見つけニコリと笑った。

「あら、アーサー様。楽しんでおられますか？」

「はい、陛下やローズ様ともお話させていただきました。お幸せそうで喜ばしいかぎりです」

「おい、貴様っ、今は俺がフローリアと話しておる。さがっておれ」

どちらさま？という表情でアーサーはフローリアを見た。

「貴様、デロリアン公爵家のご令息がさがれといっておるのがわからんのかっ！」

取り巻きたちも威勢よくアーサーにさがるよう命じた。

「フローリア、デロリアン公爵家の『知略』とレジアス公爵家の『武勇』がひとつになる良い機会と思わぬか？」

「『知略』？レジアス公爵家は武門の家柄、弱い殿方には興味ありませんわ」

「武術に優れた者など金で集めれば良いではないですか？」

「それは当家の在り方を否定されるということですね」
「んなっ！？そういうわけでは……」
「では、どういう意味かしら？」
「指揮官の戦略を実行できる兵は金で買えるということです」、
「それでは、その戦略とやらを見せていただきましょう。
明朝、あなたを含め１０人を集め、試合をしていただきます。
当家は私とクレアでお相手させてもらいます。よろしいですわねっ」
「そんな急には……」
「あなたのいうお金で集めればよろしいのでは？
女二人に恐れをなして逃げるのも戦略かしら、おほほほほほ
魔術士を雇われても構いませんわよ。
それに、陛下からの依頼で当家がお預かりしてるアーサー様を『貴様』呼ばわりするような『恥略』なぞ当家には必要ありませんわっ」
「へ・陛下のお客人！？」
「陛下のお客様に無礼を働いたのです。
ことわることは許しませんわ。
明朝、当家の鍛錬場でお待ちしております。
皆様方も、お時間がございましたら観戦にお越しください」
フローリアは悠然とアーサーの腕をとって立ち去った。

子息達は蒼い顔をして慌てて帰っていった。

様子を見ていたロバートとアルフレッドが近づいてきた。

「フロー、面白そうなこと始めたな」

「フローリア嬢、俺も見に行っていいか？」

「陛下がですか？きっと暇つぶしにもなりませんわよ」

「あはははは　あの生意気な親子が恥をかくのを見たいだけじゃ」

翌朝、朝食前の練習が終わった頃、デロリアン公爵家一行が到着した。

試合のメンバーはデロリアン公爵の次男と取り巻き2名、あとは高そうな武具をつけた5名の剣士と2名の魔術士であった。

応援にはデロリアン公爵本人や取り巻きの親達が来ていた。

観戦者は国王をはじめ、近衛騎士団長や多数の貴族達がきていた。

フローリアが試合場に進み出て試合開始の宣言をした。

「それでは始めましょうか。
試合は１０対２の対決、場外もしくは戦闘不能となった者が脱落です。
もしデロリアン公爵家が勝てば、私への縁談をお請けいたしましょう。
負ければ二度と私に近寄らないでいただきます。
よろしいですね」

観客からの拍手の中、両者が前にでてアルフレッドの声で試合開始となった。

「団長、この試合どう見る？」

「陛下、剣士の力量はお嬢様達にはかなわないでしょうが、魔術士がやっかいですね」

デロリアン公爵家が雇った5人の剣士がフローリアとクレアに対峙し、後方で魔術士が呪文を唱え始めた。

剣士の影から火球が飛び、フローリアとクレアを直撃したように見えたが、そのまま火球は通りすぎ味方の剣士を直撃した。

戸惑う剣士をあっさりと打ち倒し、残った3人に貴族には剣も使わず急所に蹴りを叩きこんだ。

「準備運動にもなりませんわ」

と何事もなかったかのようにフローリアは言い放ったが、見物していた男達は股間を押さえ蒼い顔をして試合場をみていた。

パチパチパチ

「フローリア嬢、最後のはゾッとする攻撃だな。こんなにあっさりと済んでしまっては観客も退屈ではないか。折角だから何か見せてくれんか？」

「そうですわね～　私と父上との対戦とか？」

「それは面白そうだな。ロバート、見せてくれるか？」

「のぞむところです。前回引き分けておりますから、今日は親の威厳を見せてやります」

息詰まる攻防が繰り広げられ、３０分が経過したころ、お互いの首に剣と突きつけ試合終了となった。

「また、勝てませんでしたわ」

「くそっ、また引き分けか」

おしみない拍手のなか、両者悔しそうに戻ってきた。

「凄まじいもんだな。大陸有数の剣士と互角とは」

「陛下、おそれいります」

「公爵殿、お嬢様とクレア様を騎士団に推挙してもよろしいですかな？」

「団長、これ以上お転婆を刺激せんでくれ。あはははは」

アーサーがアルフレッドに近づき話かけた。

「伯父上、大神殿に使いをだしたのはデロリアン公爵でしたよ」

「やはりな。奴は権力欲の塊だからな。俺とロバートが仲良くなってはこまるんじゃ」

「つぎは、いよいよ裁判ですね。
あの神官長からは、嫌な邪気を感じましたので、ご注意ください」

「アーサーも当日は城に来て近くで見ておいてくれ」

「わかりました」

第3章　11話

デロリアン公爵家との試合があった午後に、国民に国王陛下婚約の発表があった。

『昨日、アルフレッド国王陛下とシュベルト伯爵家令嬢ローズ・バレンシア・シュベルト様が神の祝福を得て正式にご婚約された。婚姻の儀は2ヶ月後の吉日に執り行われる』

国民は歓喜の声を上げ、商店街では記念セールが行われるなど国中がお祝いムードにつつまれた。

大神殿の一室に数人の男達が集まっていた。

「神官長、うちの娘を王妃にしてくれるのではなかったのかっ」

「エレク伯爵様、そう言われましても、あのように『神剣』なぞもたれて『神の祝福を得た』などと言われれば如何しようもない」

「あの『神剣』の入手先はわからんのか？」

「デロリアン公爵様、各国の大神殿にも聞いてみましたが、どこも心当たりがないそうです」

「あの忌々しいレジアスが関わってるんじゃないのか？」

「無関係ではないと思いますが、『神の加護』も『精霊の加護』も

受けていないので、レジアス公爵だけでは無理だと思います」
「誰じゃ、誰が手を貸しているんじゃっ！」
「公爵様、夜会の時にいた他国の修行者は？」
「レイノルド伯爵、あの少年が何者か知っておるのか？」
「いいえ、どの大使に聞いても知らぬそうでございます」
「それは怪しいな。手の者を使って探ってみてくれ」
「おまかせください」
「その件はまかせるぞ」
「４日後のバーニングの件はどうする？」
「予定通り、神託を下します」
「今度は失敗せんじゃろうな」
「いくら『神剣』を持っていようとも、『神の加護』をうけているわけではございませんから、神託が嘘とは申せません。あの言い訳は今回限りです」
「バーニングが死ぬのは構わんが、財産をみすみす国に渡すのは惜しいからの」
大神殿の中を風が吹き抜けたのは誰も気付かなかった。

「陛下、各国の大使がお越しです」

「よし、謁見の間にお通ししろ。すぐに行く」

アルフレッドはローズを伴い謁見の間に向かった。

「「「陛下、この度はご婚約おめでとうございます」」」

「お祝い感謝する。今日お越しいただいたのは、皆様方の国家元首の方に婚姻の儀にご参加いただきたくお願いするためです」

「「「もちろん国許より参加の意向の知らせが届いております」」」

「正式な招待状と親書をお渡しいたしますので、よろしくお願いします」

「「「はい」」」

「なお、親書にはきっと皆様の国でも役立つ情報が書かれておりますので、お役立てください」

「「「はい、早速国許に届けさせていただきます」」」

「ご足労かけました」

と謁見の間から執務室に戻った。

「アルフ、有益な情報とはなんですの？」
「ああ、アーサーから聞いた偽神託の見破り方だよ　あはははは」
「まあっ！？これでは大神殿は崩壊してしまいますわね」
「神すら関心をもっていない大神殿なぞ必要ないじゃろ」
「それもそうですわね」
ふたりで笑いあった。
「そういえば、最近お城を頻繁に抜け出しているそうですけど、どこにいらっしゃってるんですか？」
「ん？浮気はしてないぞ」
「それは心配してません」
「あはははは　アーサーのところだよ」
「今朝も行ってきたぞ。ロバートの娘とデロリアンところの子豚が試合したんでな」
「子豚って！？わたくしも連れてってくれればいいのに……フローの雄姿が見たかったわ」
「子豚達１０人が娘ふたりに簡単にやられてしまって、最後には男の急所を思い切り蹴り上げておったわ」

「まあ、あいかわらずのお転婆ぶりね」
「試合の後、ロバートとフローリアの親子対決を見たが、凄まじかったぞ。
両者手加減なしで引き分けおった」
「ええ！？ロバート叔父様と引き分け？
それじゃあフローリア一人で騎士団１隊の戦力なの？
昔から才能はあったけど、前に会ったときからは段違いの進歩ね」
「フローリアの先生はアーサーらしいぞ。ロバートはアーサーに瞬殺されたらしい」
「おそろしい強さね。あの二人が結婚したら、最強夫婦ね。うふふ」
「夫婦喧嘩で城が壊れるな」
「それでアーサー様のことは、いちまで秘密にされるんですの？」
「それはロバートとも話しているんだが、彼の使命もあるんで無理強いもできんからな」
「アルフっ、今から出かけるわよっ」
「は・はひ！？」
「さっさと準備なさいっ」
「ど・どこにイカレルノデショウカ？」

「アーサー様のところに決まってるわ。伯父上も引っ張って行きますわよっ」

レジアス公爵家の応接間にアーサー関係者が召集された。

「今日集まってもらったのはアーサー様のことです。いつまで秘密にされておくつもりですか？」

「ちょっと待ってください、ローズさん。僕の使命のことはお聞きですか？」

「『澱』といわれるもののことですね」

「それもありますが、もし人間が『澱』の企み通り戦を起こし、世界の理をおこすようなことがあれば、神は世界を滅ぼします。それに、僕に関われば命を狙われる危険があります。それを避けるために僕は周囲を巻き込むわけにはいけないんです」

「アーサー様、すでにここにいる人間は巻き込まれてますわ」

「そ・それは」

「それに、人間が起こすかもしれない過ちを防ぐためなら、私達みんなで解決するべきだわ」

「そうだな。アーサー、もっと俺達を頼ってくれぬか？」

「アーサー君、私はいつでも力になるわよ」

「およばずながら、わたくしも全力でっ！従弟でしょ」

「アーサー君には助けてもらってばかりだからな。ここで力を貸さんでは公爵家の名がすたる」

「アーサー様、それに『澱』については対抗策を考えてるんでしょ？」

「皆さん、ありがとうございます。僕は自分ひとりでやるのが当たり前だと思ってました。それが僕に与えられた使命だと」

「アーサー様、ここにいる皆はあなたが王子だから協力しようっていう人達じゃないのよ。
みんなアーサー様が好きで大切に思ってるから協力したいの。
その人の絆を作ったのは、アーサー様なのよ。
それもアーサー様自身の力なのよ」

その場の全員が力強く頷いた。

アーサーは涙をながし皆に深々と頭を下げた。

第3章　12話

アーサーは表情を固くして何か覚悟したように口を開いた。

「それでは、もう少し僕のことを話しておきます。
もうご存知の方もいらっしゃいますが、僕は『神狼の森』で育ちました。
そこで僕を育ててくれたのは神狼エルザと4人の精霊王です。
戦いの基礎は精霊王が実戦はエルザと神龍アレクが鍛えてくれました。
僕の篭手と脛当はアレクの鱗で作ったものです」

「アーサー君の強さが納得できたよ」

「ひとつ質問してもいい？アーサー君を養って『神狼の森』で育てるようにしたのは誰なの？エルザ？」

「エルザは乳母です。僕の養父母は『知の神』と『生命の女神』なのです」

「神様の養子！？」

「はい。あの事件の時『知の神』は僕を天上界に転移させて助けてくれました。
天上界に転移した僕の身体は神の力『神気』を帯びてしまったんです。
肉体を持った神というか、神の力を持った人間というか……
そのままでは人間の世界に帰れないので『神狼の森』で育てられました。

そしてこれが僕の本来の姿……」

アーサーの白銀の髪と鳶色の瞳は金色に変わった。

アーサーの足元に居たシロも立ち上がり本来の姿を晒した。

「これが、僕の秘密にしていたことです。
僕の使命は『人間を正しく導く』ことなんです。
『澱』はその使命を果たすための最大の敵なんです。
伯父上、神が人間の国の王位継承権を持つわけにはいかないのです。
分かっていただけましたか？」

アーサーはシロを撫でながらアルフレッドに言った。

「アーサー、よくわかった。
でもお前は俺の甥であることは変わらんよ。
そして俺がお前を手伝いたいという気持ちも変わらん」

「わたくしも驚きはしましたが、気持ちはかわりません。
人間と協力する神がいてもいいじゃありませんか」

全員真剣な表情でアーサーを見て頷いた。アーサーは安心した顔で元の姿に戻った。

「ありがとうございます」

「王位継承権のことは仕方ないな。
俺は結婚したら退位してお前に国を返すつもりだったんだが、世継ができるまで王様やってやる」

「アルフ、そんなこと考えてたの？」
「ああ、アーサーと再会できてから、ずっと考えてた。
もともとアーサーが王太子だったからな」
「ロバートさん、お預けしてあるものを伯父上にお渡しくださいませんか？」
ロバートは金庫から箱を取り出しアルフレッドに渡した。
アルフレッドは箱を開け中を見た。
「これは王太子の短剣だな。これを返上するということか？」
「そうです」
「しかたないな。ただし、受け取るのは世継ができた時だ。継承権放棄はそれまで秘密にしてはもらえんだろうか？」
「どうしてですか？」
「今、継承権を持つ王族はアーサーだけなんだ。
アーサーが居ないと継承権1位はデロリアンになってしまうんだ」
「そういうことなら結構ですよ」
「それから、『澱』とやらへの対抗策は何かあるのか？」
「奴らは意識を持った魔力の塊です。
つまり直接の打撃や魔術はききません。

唯一対抗できるのは神の力『神気』だけなのです」

「それじゃあ、俺達は無力じゃないか」

「現状対抗できるのは、上位精霊と神獣と僕」

アーサーはフローリアとクレアに目をやり

「リアとクレアさんに渡したレイピアです。
このレイピアから魔術を発動すると『神気』を混ぜて発動します。
伯父上とローズさんの短剣は攻撃力はありませんが、『神気』の結界を張れます」

「じゃあ、無力なのは俺だけだな」

何もない空間から1振りの長剣を取り出しロバートに渡した。

「ロバートさんはこれを使ってください。
僕の使ってた剣です。
リア達のレイピアと同じ力があります。
その気になれば国くらい滅すことができますよ」

ロバートは長剣を受け取り、鞘から抜き刀身を見つめた。

「凄い剣だ。見たこともない材質だ」

「『神の山』にだけある鉱石にアレクの鱗を混ぜて『地の精霊王』が鍛え上げ、『知の神』と『生命の女神』が『神気』を込めてあります」

「なんとも凄い剣だな。使い方を誤ったら大変だな」
「それをお父様に渡したら、アーサー君が困るんじゃないの？」
「大丈夫だよ。新しい剣を作ったから…みんな出ておいで」
４人の女性がアーサーの周りに現れた。茶色の髪をした少女がアーサーに剣を差し出した。
「アーちゃん、これっ！上手くできたよ」
アーサーは剣を受け取り、頭を撫でてやった。
「彼女達が精霊王です」
フローリアとクレアの横にも４人の少女が現れた。
「私達と契約した精霊達もいるわよ」
「アーサー様、これが、こちら側の戦力なのね」
「いざとなればエルザやアレクも手伝ってくれます。それに大陸中の上位精霊も」
「それで、『澱』とはどこにいるんだ」
「大神殿の神官長から『澱』の強い気配を感じましたから、おそらくは大神殿でしょう」
「大神殿ならもうすぐ崩壊しますわよ」

「「「え？」」」

「アーサー様から教わった偽神託の見分け方を各国にお伝えしましたから」

「それじゃあ、大神殿は大陸中で権威を失ってしまうな」

「あはははは　人間って凄いや。僕は各個撃破しか考えてなかった」

「ね、協力するって大切でしょ？」

「そうですね。これからも頼りにさせてもらいます」

「問題解決ね。それでいつアーサー様をデビューさせる？」

「そうだな～　できるだけ派手に……」

「困った血筋ね」

「それにしてもローズさんの行動力は凄いですね」

「そこに惚れたんじゃ」

「ローズ姉さん、良い王妃になりそうね」

「あら、リアは女神様になるんじゃないの？」

「女神？」

「だってアーサー様は神様でしょ。神様の奥さんは女神さんじゃない」

「ローズ姉さん、神様の奥さんになんてなれるわけないでしょ」

青い髪の美女が進み出て話した。

「アーサー様が娶られることをお望みになれば可能でございます。いつも『生命の女神』様は『早く孫の顔がみたいわぁ～』なんておっしゃってますから」

「神様じゃ婿には来てもらえんな。クレアを養女にして婿さがしかな」

「ロバート叔父様が後妻を迎えれば良いのではありませんか？まだお若いのですからお世継も作れますわよ。それならばレジアス家の血筋も耐えません」

第3章　13話

翌朝、朝食前の鍛錬をすませ食後の休憩の後、鍛錬場でロバートが剣を振るっていた。

力強い型の後、鍛錬場の端に向けて裂帛の気合とともに剣を振った。

バキバキバキ

鍛錬場の外にあった林がなぎ倒され嵐の後のような状態になっていた。

見ていた人々は口をアングリと開け、ロバート自身も目を見開いていた。

「お・お父様!?今のは?」

「な・なにがおこった?」

「ご当主様、すごいです」

「「「すっげぇ〜〜〜」」」

ロバートが困惑した顔でアーサーを見た。

「ロバートさん、すごい気迫でしたね」

「気迫であんなことに?」

「一流の剣士の気迫は、体内で凝縮した『気』を発することですよね？」

「まあ、そういうことだな」

「その『気』というのは、体内にある魔力のことなんです。その魔力の塊を剣から発して衝撃波が発生したというのが今の現象です」

「俺の魔力？」

「そう、ロバートさんは大きな魔力をお持ちですから」

「迂闊にこの剣を振るったら大惨事だな」

「ロバートさんくらいの達人でないと無理ですけどね。あははは」

「ねえねえ、アーサー君、私も魔術上達したのよ。フレアちゃんとウィンちゃんが教えてくれたの」

「わたくしも、ミストさんとソイルさんに習いましたのよ」

フローリアは手から旋風をだしたり火球を出したり、クレアは氷の槍を飛ばしたり、土で壁を作ったりしてみせた。

「どう？」

「随分上達しましたね」

「彼女達には及ばないけどね。それでね、レイピアから発動するのってどうやるの？」

「う～ん。僕は初めからできたからなぁ～」

と腕組みをしてしばらく考えた。

「今は魔力を手に集中させてるよね」

「うん」

「剣を身体の一部と思って、剣に集中できない？」

二人は剣を構えて力を込めてみたりしながら百面相をはじめた。

「剣先が人を向いてるから、上に向けてやってよ。もし発動したら大変だよ」

二人は剣を天に向け、百面相を再開した。

「もっと身体の力を抜いて、リラックスして。目を閉じて魔力の流れを感じてみて」

ゴオオオオォォォォォ

物凄い竜巻が天にむかって駆け上っていった。

「やったぁぁぁ」

シュッシュッシュッシュッ

無数の氷の槍が空に向かって飛んでいった。

ドスッドスッドスッドスッ

「「「ぎゃあああぁぁぁぁ」」」

天高く上がった氷の槍は重力に逆らわず落ちてきて鍛錬場に突き刺さった。

「やりましたわっ」

「「「クレアさん、殺す気ですかっ」」」

騎士団や衛士隊の面々は真っ青な顔してクレアに抗議した。

「その程度、避けれるでしょ、実際、みなさん無傷ですし」

シレっとクレアは対応した。

その後、騎士団1隊＋衛士隊1隊VSフローリア、騎士団1隊＋衛士隊1隊VSクレアとの自由組手が実施され本日の鍛錬は終了となった。

午後からアーサー達は精霊神殿に出かけた。

神官長に面会を申し出て、応接間に通されしばらく待っていると偉

そうな男の子を連れた神官長らしき人が入ってきた。
偉そうな男の子はアーサー達をみるなり「ゲッ！！」と言い残して姿を消した。
「これはこれはフローリア様とクレア様ようこそお越しくださいました」
とにこやかに近づいてきて、アーサーの前に立ち止まり跪いた。
「殿下、お目にかかれて光栄です。よくぞご無事で」
「頭をあげてください。よく僕のことがわかりましたね」
「はい。お母上と瓜二つのお姿、それに強い力で守られておられますゆえ」
「母上のことご存知なのですか？」
「はい。ご幼少の頃から当神殿に何度もお立ち寄りでしたから」
「そうですか」
「いつも精霊達に囲まれて、楽しそうにされておられました」
「母上も精霊と相性がよかったのですね」
「はい、すべての属性の精霊が慕っておりました。まあ、とりあえずお掛けください」

皆がソファーに座りお茶が用意され本題に入った。

「神官長さん、大陸中で『神の加護』や『精霊の加護』をうけた者が害されているのをご存知ですか？」

「はい、存じております」

アーサーやフローリア、クレアから今まで分かっていることを神官長は驚きながらも最後まで聞いた。

「そのような大変なことがおこってるなんて、想像もしていませんでした」

「僕の両親のことは、発端にすぎなかったんです」

「人間の愚かな欲望が、とんでもない化け物を育ててしまったんですね。なげかわしいことです」

「それで、大陸中にある精霊神殿の方々にご協力を願いたいのです」

「我々にできることであれば、なんなりと」

『澱』に対抗できるのは『神気』だけであること

上位の精霊が『神気』をつかえること

必要であれば神獣が助力してくれることを伝えた。

「精霊神殿の信者は一般の方々が多いですよね。できれば、その方々を守っていただけないでしょうか？」

「わかりました。できるだけのことはさせていただきます。ベヒモスでておいで」

生意気そうな少年が現れた。

「今の話聞いてましたね。そなた達も協力願えますか？」

「精霊王が協力するって言ってんだから、断ったら怖すぎるって！」

ベヒモスの頭にチョップをかましながら赤い髪の女性が現れた。

「ベヒモス、私が怖いから協力するのか？」

「イエ、トンデモゴザイマセン」

「こんな奴でも火の上位精霊だ。少しは役にたつだろう。我等精霊すべて協力は惜しまない」

「ありがとう。サラマンダー、頼りにさせてもらうよ」

「これから、どのように動きましょうか？」

「とりあえず、風の精霊達に情報を集めてもらってから具体策を立てましょう」

「わかりました」

第3章　14話

バーニング男爵の審判を2日後に控えた午後に、各国の大使から国王に謁見の申し出があった。

「「「陛下、突然の謁見にも関わらずご対応くださり恐縮です」」」

「かまわん。して、用向きは？」

「グランディア帝国王からの返事をお預かりしてまいりました」

「シンカ共和国大統領からの返事をお預かりしてまいりました」

「ソヴィエ連邦大統領からの返事をお預かりしてまいりました」

近衛騎士が文書を預かり、確認して国王に渡した。

「わざわざ、ご苦労であった」

この大陸では、通常の連絡には水晶を使った通話が普及していたが、公式な招待等には手紙が主流であった。

大使は預かった招待状と親書を水晶で本国に送り、折り返し届いた手紙を持参したのであった。

アルフレッドは執務室に戻り、各国からの返事を読みニヤリと笑っ

た。

「アルフ、変な笑い方してどうしたの？」

「ああ、ローズも見てみろよ」

返事を手渡しローズは読んでみたが、おかしなところは見当たらなかった。

「これのに笑うようなとこがあるの？普通にお祝いのメッセージと婚礼に参加していただけるって書いてあるだけじゃない」

「親書に対する礼の直後に参加すると書いてあるだろう？」

「それがどうしたの？」

「親書には何が書いてあったかしってるだろ」

「ああっ！？そういうことね」

「早速、水晶を用意させてくれないか？直接段取り等を話したいからな」

「それじゃあ伯父上達も呼ばなきゃね」

「ああ、手配を頼めるか？」

「ええ、まかせておいて。各国にも時間調整してもらう必要もあるし、夕方くらいになっちゃうわね」

ローズはパタパタと慌しく執務室を立ち去った。

「あの行動力は相変わらずだな。フローリア嬢もよく似てるからアーサーも苦労するな」

と呟いた。

ローズに呼び出されたアーサー、ロバート、フローリア、クレアは会議室に通された。

通話用の水晶が3つ用意されローズが水晶でなにやら打ち合わせをしていた。

「あら、早かったのね」

「ローズ、なにかあったのか？」

「伯父上には話してなかったかしら？各国に送った親書のこと」

「ああ、あれか。返事が来たようだな」

「お父様、なんのこと？」

「ああ、各国宛に送った親書に例の偽神託破りの方法を書いて送ったんだよ」

「なんか聞いた覚えがあるような、ないような」

「お前は、武術よりも頭を鍛えなきゃならんな」

「ひっどーーーーい」

あはははは

「ローズさん、それでこれから直接話し合うんですか？」

「そういうことね。各国がタイミングを合わせなきゃ意味がないでしょ。とりあえず準備ができるまで、お茶でも飲んでて」

とメイドを呼びお茶を用意させた。

「ローズ様、もうすっかり王妃様のようですね」

「ローズ姉さんは王妃様っていうより女王様？」

「俺も王妃様って呼ばなきゃならんな。ご無礼しました王妃様」

「伯父上も心強いですね」

ローズが水晶で通話しているのを良いことに、みんなでからかって時間潰しをした。

アルフレッドが会議室に入って来た時には、ローズが額に青筋をたて皆に説教をしていた。

「なにやってんだ？」

「わたくしが水晶で段取りをしているのをいいことに、わたくしをからかって遊んでましたのよ」

「「「「ごめんなさい」」」」

気分を引き締め全員が水晶のまわりに集まって各国との会談がはじまった。

「アルフレッド殿、此度はご婚約おめでとうございます。我がグランディカ帝国を代表してお祝い申し上げる」

「ギルニア殿、ありがとうございます」

「アルフレッド殿、此度はご婚約おめでとうございます。シンカ共和国の民一同お祝い申しております」

「マルカス殿、ありがとうございます」

「アルフレッド王、此度はご婚約おめでとうございます。ソヴィエ連邦諸国を代表してお祝い申し上げます」

「シュトロエン殿、ありがとうございます」

一応の挨拶が済み、本題に入った。

「親書を読んだ時は驚きましたぞ」

「親書に書かれたことは誠ですか？」

「これで大神殿の奴らに好き勝手はさせないで済みます」

「親書の内容は事実です。『神の加護』を受けたものから聞いたことですので、間違いございません」

「その者は信用できるのですか？疑うわけでは無いのですが、あまりにも重大なことなので、万が一にも誤りであったなら取り返しがつかないことになるのです」

「皆様は１５年前に暗殺された兄上と義姉上のことを覚えていらっしゃいますか？」

「もちろんですとも。とても美しく聡明なお二人でございました」

「『神の加護』を受け巫女から王妃になられた方でしたな」

「彼女の神託に何度助けられたことか……感謝してもしきれない」

「このことを教えてくれたのは、二人の子供。つまり俺の甥です」

「「「おおっ、ご無事だったのですね」」」

「ご信用いただけますか？」

「「「もちろん」」」

「それでは具体的な策を話しましょう」

大神殿の偽神託の話

『澱』の存在

『澱』の拠点が大神殿であるらしいこと

神獣や精霊の協力

そして万一、人間同士が争い生態系を壊すような世界の理を破れば、神が全てを滅ぼすこと。

それこそが『澱』の狙いであることを告げた。

各国の元首達は、想像以上の重大さに青くなりながらも深夜まで会議を行い、実行のタイミングや緊急連絡の方法など連携部分について次々と決定していった。

第3章　15話

翌日、アーサー達は精霊神殿に来ていた。

「神官長、各国の協力も得られることになりました」

「殿下、さようでございますか。いよいよですな」

アーサーは昨夜各国との会議で決まった内容を伝えた。

神官長はバタバタと大陸各地の精霊神殿に指示を出し、協力体制を整えるのに全力を尽くした。

王城でも各騎士団長とロバートが集まり、役割分担を確認し準備作業の指示を飛ばしていた。

せわしなく走り回っているロバートは不意に呼び止められた。

「レジアス公爵、この騒ぎはなんですかな？」

「おお、デロリアン公爵　ただの訓練ですよ」

「訓練にしては殺気立っておるようじゃが？まるで戦でも始まるようですな」

「明日の審判を利用して、婚姻の儀の警備体制を試しておるだけです。万に一つも失敗は許されませんからな」

「それにしても大掛かりな訓練ですな」
「15年前のような事件を繰り返さないためです」
「あのようなことは、あってはならんですからな。レジアス公爵も大変ですな」
「お騒がせして申し訳ないが、急いでおりますので、これにて失礼」
「騒がしいことだな……ふふふ」

アーサー達が公爵家に戻ると、騎士団や衛士隊もいつもの砕けた雰囲気とは違い、気迫に満ちた顔つきにかわり翌日の準備に余念がなかった。

アーサーの部屋でフローリア、クレアと打ち合わせをしているとシルフが現れた。

「アーサー、大神殿の偉そうな奴から『澱』の気配が感じられたよ。下っ端や神殿衛士は操られているだけみたいだ」

「大神殿以外はどうだった？」

「一部の貴族から気配を感じるんだが、かなり希薄なんで操られているだけだろうな。
ただ、この国の貴族のひとりからは強い気配を感じるぞ」

「どんな人？」

「太って偉そうにしてる奴だ。デブリン？公爵？とか呼ばれてた」

フローリアが笑いを堪えながら「デロリアン公爵」と助け舟をだした。

「そうそう、そのデブリアン公爵」

「シルフ、わざとだろ……」

精霊王達にも明日の予定を伝え、各属性の上位精霊への指揮を頼んだ。

「それにしても人間とは賢いものですね」

「吾等精霊や神獣は個々が強いゆえ協力など考えもつかん」

「人間がここまで多くなったのが分かる気がするな」

「アーちゃん、ノーちゃんも頑張るね」

夕食に帰ってきたロバートにデロリアン公爵も要注意であることを伝え各自部屋に帰った。

王城に地下牢でバーニング家は、パン1切れとスープだけという食事を与えられた。

「おい、番兵！こんなものしか出せんのかっ！俺は男爵だぞっ！」

「はやくここからだしやがれ！」

「俺が何をしたって言うんだっ！」

「役に立たん番兵め。ここから出たら不敬罪で切り殺してやる」

まったく反省の色もない声で叫んでいたが、番兵は取り合う様子もなく無視していた。

「父上、我々はどうなるんでしょう？」

「心配いらん。税のことで少しお咎めをうけるくらいじゃ」

「領民を斬り捨てたことは？」

「不敬罪じゃ。貴族の裁量に任されておる」

「それなら安心ですね」

「問題はお前じゃの」

「お・俺？」

「公爵領で無茶しておるからな」

「それは父上が詫びを入れて終わったはずでは？」

「ばかもんっ！お前がなんで捕まったか忘れたのか？」

「おぼろげにしか覚えてません。気がついたら縄を打たれて馬車の中でした」

「お前は公爵家の令嬢一行を暗殺しかけたんじゃぞ」

「本当に何かボーっとしか覚えてないんです。城を出てからずっと……」

「そんな言い訳通るわけないだろうが！」

「そんなことといわれても」

「最悪、お前は死罪じゃな」

「そ・そんなぁ～」

「冗談じゃ。大神殿が助命の神託を出してくれるはずじゃ」

「本当に大丈夫なんですか？」

「なんの為に多額の寄付をしてきたと思っておるんじゃ」

「他の貴族達も弁護してくれますよね」

「ああ、デロリアン公爵様やレイノルド伯爵、エレク伯爵なども弁護してくれるはずじゃ」

「少し気が楽になってきました」

「彼らにも賂(まいない)を渡しておるからな」

「それにしても忌々しい旅の狩人め、奴がいなかったら公爵領でも問題なかったはずなのに」

「ランバートの糞爺が引き渡しを拒否しやがったからな」

「審判の時に証人として呼び出し、不敬罪で裁けませんか？」

「それはいいな、匿ってるレジアス家に恥をかかせることもできるしな　ぐふふふ」

さらに牢に閉じ込められ何も知らない彼らの話はエスカレートしていった。

「陛下はシュベルトの娘以外結婚せんというから、世継などできん」

「なぜ結婚できないのです？」

「大神殿の神託で結婚すれば不吉なことが起こることになっておるのだ」

「他の嫁は考えられないのですか？」

「大神殿の神託で吉とでるのは、デロリアン公爵派閥の令嬢だけだ」

「それじゃあ陛下が結婚しても大丈夫ですね」

「うむ、そのとおりじゃ。世継がなければ継承権1位はデロリアン公爵じゃしな」

「また、事件がおこるかもしれませんね」

「そうじゃな。また神が英断をくだすかもしれんな」

この会話が風の精霊を通じて、筒抜けになってることなど考えもしない馬鹿親子であった。

第3章　16話

いよいよ審判の日がやってきた。

朝から伯爵以上の貴族がぞくぞくと王城に集まってきた。

大した刑罰も受けないだろうと楽観視するグループと、国王が強行に厳罰に処するのではないかとするグループで予想しあっていた。

デロリアン公爵達は特に話に参加することもなくサロンでお茶を飲んで寛いでいた。

衛士が大声で『審判の間』に入るよう案内の声が響かせ、ぞろぞろと貴族達は『審判の間』に入って行った。

「静粛にっ！」

「陛下の御成りである」

壇上にある扉に向け、一同は頭を下げ国王が出てくるのを待った。

片手を挙げながらローズを伴ってアルフレッドが入って来た。

部屋をグルッと見回し、アルフレッドは玉座に座り、ローズは玉座の横に用意された椅子に腰掛けた。

「これよりバーニング男爵ならびに一族の審判を開始する」

アルフレッドの宣言の後、一同は顔を上げ一段下にある審判の場を見下ろした。

「被告人をこれえ」

バーニング男爵、男爵妃、長男、次男、次男の護衛2人を含むの6人が被告席に連れ出された。

「陛下、何故我々がこのような場所に立たねばならんのです」

「被告人は許可無く発言しないように」

ロバートが一喝し、続けて罪状が読み上げられた。

「これより罪状を読み上げる。被告人アルト・エレク・バーニング男爵及びその家族とその家人

1．国家反逆罪

国により定められた税率を大幅に破り、不正に蓄財したこと国に対し反意ありとみなし国家反逆罪を適用する。

2．殺人罪

領主の課した重税により生命の危機を感じ、他国に逃れようとした無抵抗の領民を虐殺した為殺人罪を適用する。

3．暴行罪

領主の理不尽な行いに不平を漏らしたとして、婦女子を辱め男子には暴力をふるった為暴行罪を適用する。

4．不敬罪

レジアス公爵領において、無抵抗の領民に剣を向け街中で魔術を放ったうえ公爵家を侮辱する言葉を言い放った為不敬罪を適用する。

5．殺人未遂罪

領地から王都に戻る旅にあったレジアス家フローリア一行を襲撃し暗殺しようとした為殺人未遂罪を適用する

……

……

……」

細かい罪まで延々と告げられた。読み上げられた罪状に顔を蒼くしながら「でたらめだ！」と叫ぶ男爵に

「許可無く話すなと言っておる。次に許可無く口を開いたら猿轡をするぞ」

とロバートが制した。

「これが証拠です」

と男爵家の帳簿や領民からの調書等山のような証拠を差し出した。

「少しよろしいですか？」

と男爵妃が手を挙げ発言を希望し、ロバートは許可した。

「主人の罪状はわかりましたが、わたくし達は何故この席にいるのでしょうか？」

「奥方とご長男は2の殺人罪と3の暴行罪ですな。

奥方は納品にやってきた服飾店や宝石店の店主に支払いもせず家人に命じ殺害しておりますな。

ご長男は領民を逃亡の恐れありと陣頭指揮で殺害に直接関与されて

おります。
また、その際若い婦女子に乱暴もはたらいております。
ご次男とそこの家人2人は4と5ですな。
これは説明もいりますまい。ご納得いただけましたかな？」

「なにを証拠にそのような……」

「奥方には、店よりの被害届、注文書、納品書、それと被害者の調書、殺害を指示された家人の供述調書もございますぞ？」

「……」

「ご列席の皆様方に罪状について質問や意見のあるものはおられるか？」

一人の初老の貴族が手を挙げた。

「よろしいかな？」

「はい、エレク伯爵」

「バーニング男爵領は小さい領地でございますれば、多少多めの税を課さなければやっていけないのではなかったのでしょうか？」

「国で決められた税の倍が多少ですかな？」

「倍はやりすぎだと思うが、国を謀る意思などなかったと思いますのじゃ」

「貴族省に提出された過去１０年分の収支報告には、規定の税収分しか記載がございませんでした」

「それは苦しい財政状態で、陛下にご心配を掛けないよう配慮したものだと……」

「苦しい財政状態ですか？捕縛にむかった居城内は贅のかぎりがつくされておりましたぞ？」

「不正な蓄財はあったとしても、反意はなかったと信じております」

「領地とは、陛下よりお預かりして管理させていただいているものです。
税収が少ないならば質素に暮らせば良いだけのこと。
税率に文句をつけるなど陛下に対する不敬にあたりますぞ。
他にご意見のある方はおられますかな？」

中年の貴族が手を挙げた。

「国家反逆罪は重いように思うな。税法違反くらいの適用にはならんのでしょうか？」

「飢饉でもないのに餓死者がでるような状況です。国家の政策に反抗したといわれても仕方ありませんな」

他にも厳しすぎるのではとの声が上がったが、ロバートは頑として受け付けなかった。

「レジアス公爵、減刑の声が結構あがっておるようじゃが？」

減刑の意見を言っていた貴族達が笑みをこぼした。

「陛下もああ言っておられるのだし、税法違反に減刑してはいかがかな？」

とデロリアン公爵は問いかけた。

「わかりました。皆様の収支報告書と領地で実際に課せられている税を全て調べ、万一違いがあればバーニング男爵に共謀し国家に反逆を企てたと認める条件なら構いません」

殆どの貴族が蒼い顔をして俯いた。

「「「そのままで結構だ」」」

第3章　17話

自ら不正な税を徴収していることを白状したような返事に苦笑しながら

「他に意見のある者はあるか？」

とのロバートの問いかけにバーニング男爵の次男が手を挙げた。

「4と5についてですが、僕は公爵家に害をなす意思などありませんでした。
レジアス領地内の事件は狩人が無礼を働いたので手打ちにしようとしただけです。
ご令嬢を暗殺しようとしたこともなく、無礼を働いた狩人を倒そうとしたら、近くに令嬢がいらっしゃただけです。
すべては狩人が悪いのです」

「領地の件、暗殺未遂の件、両方とも娘は目撃しておるが、見誤るほど未熟者だということか？」

「まだお若いですから、見誤られても不思議はないかと思います。
その狩人を呼んで私に尋問させてください」

「娘は俺と互角に戦える剣士ですぞ？見誤ることはありえぬが、証人を呼ぶことには同意しよう」

ロバートは近衛騎士に目配せをし審判を続行した。

「証人が来るまで、他になにかないか？」

貴族達に手をあげるものはなく、ロバートは大神殿の神官長に目をやり

「何かご意見はございますか？」

と問いかけた。

「バーニング男爵家は敬虔な信者でございますから、託宣をしてまいりました」

「ほお、では神のご神託を賜れるのですな。ご神託をうけた者から直接聞きたいゆえ、ご本人をこれへ」

近衛騎士に先導され『神の巫女』が入って来た。

「神の巫女殿、ご神託をお聞かせくださいますかな？」

神の巫女は恭しく一礼し、胸の前で手を合わせ目を閉じ語りはじめた。

「バーニング家の者の行い許しがたきことなれど、命を奪うことは許されん。
爵位、領地を返上し、本人達は大神殿の下働きをして罪の償いをさせるべし。
財産はすべて大神殿に寄贈し神を敬う人々の為につかうべし」

語り終わり目を開け「以上です」と一礼した。

「神が人間の身分や財産のことを口にされるのは初めて聞いたな」

「レジアス公爵殿、神を愚弄するようなお言葉は控えなされっ」
神官長は真っ赤な顔で怒りを顕わにしたが、ロバートは無視し入り口の方を見た。
近衛騎士に付き添われ、白銀の髪をした狩人姿の少年が俯きながら入って来た。
「ご要望の証人が到着したようですな」
少年は部屋の中央で片膝をつき頭を下げた。
「そいつですっ　そいつが無礼を働いた狩人です」
ロバートが手で制し、少年に語りかけた。
「そなたが見たことを正直に話してくれるか？」
「はい。まずはご領地であったことですが……
路地から談笑しながら出てきたお3方が、大通りを歩いていた少女にぶつかり無礼打ちにしようと大柄の従者が剣を抜き斬りかかりました。
僕が咄嗟に飛び出し少女を助けましたら、僕に斬りかかってきたので已む無く投げ飛ばし気絶させました。
次に細めの従者の方が火球の魔術を放ちましたが、連れていた魔狼の子が魔術障壁で弾き返し魔術を放った従者を昏倒させました。
最後に貴族の方が抜刀して斬りかかってこられましたので、已む無く拳で一撃を加えました。
その後にレジアス公爵家のご令嬢が到着なされて場を治めてくれま

した。
次にレジアス公爵家のご令嬢に、ロレンツォから王都に同行させていただいている時ですが、ご令嬢と侍女のクレアさんと一緒に昼食用の水汲みをしているとき、林の中から3人が現れ襲撃をうけましたが、皆で協力し捕縛することができました。以上です」

「うむ、調べと齟齬はないな。いかがかな次男殿」

「嘘だっ　平民風情の言うことと、貴族の言うこととどちらを信じるのですかっ」

「この者は自分で平民といいましたかな？」

「自分で平民という平民なぞおりません」

ここでアルフレッドが割って入った。

「この者は嘘をつくような者ではないぞ？」

「なぜそのようなことがわかるのですっ」

「この者の父親は先代レジアス公爵の弟子で、そこのロバートの親友でもあった。俺も良く知ってる尊敬する人物だった。頭を上げて名乗るが良い」

アーサーはスッと立ち上がり貴族達を見渡し口を開いた。

「僕の名はアーサー。アーサー・フォンライン・ローレンシアです」

部屋中の空気が凍りついたように誰も微動たりともできなかった。

「なにを驚いておる？皆も一度会っておるぞ。俺の婚約発表の折にな」

と手にした鬘を振ってみせた。

「アーサーよ、先ほどのご神託聞いておったな？お前の意見はどうじゃ？」

「はい、伯父上。巫女殿にいくつか質問したいのですがよろしいですか？」

「かまわん。なんでも聞いてみるが良い」

アーサーは神の巫女のほうに向き直り質問をはじめた。

「これから聞くことに正直に答えてください。嘘があれば誰も貴方を救うことはできないので、心して答えてくださいね」

「はい、なんなりと」

「あなたは『神の加護』をうけていますか？」

「はい」

「『神の紋章』はどこに刻まれていますか？」

「『神の紋章』でございますか？」

「紋章を知りませんか？『神の加護』の印なのですが……おかしい

ですね」
巫女は神官長のほうを見てオロオロしはじめた。
「もう一度聞きます、あなたは『神の加護』を受けていますか？」
「……申し訳ございません」
「それでは、ご神託は誰から聞きましたか？」
「父上から指示をうけました」
「おいっ　父親をうらぎるのか」
「レイノルド伯爵を捕縛せよっ！」
ロバートの鋭い声が部屋に響き、近衛騎士によってレイノルド伯爵は取り押さえられ連れ去られた。
アーサーは悠然とアルフレッドに振り向き頷いた。
「神官長、どういうことかは詳しく聞かせてもらうぞ。
それまで大神殿内で待機しておれ。
風王騎士団、神官長をお送りしろ。
調べが終わるまで、大神殿にだれも近づけてはならん」
「ご神託は無効ということですな。陛下、ご裁可をお願いします」
ロバートはアルフレッドに向かい頭をさげた。

「裁定を申し渡す。爵位と領地は返上。財産は没収の上、本来の持ち主である領民に返還する。そして被告人は極刑に処す。以上だ」

判決を言い渡したアルフレッドは審判の間から退出した。

ロバートはアーサーのもとに駆け寄り臣下の礼をとり

「殿下、お手数おかけしました」

「ロバートさんも大変でしたね」

ロバートと一緒に退出するアーサーを見送る貴族達は硬直したままだった。

第3章　18話

審判を終え、アーサー達は会議室に集まっていた。

「アーサーの名乗りも終えたし、これで堂々と会えるな」

「はい、伯父上」」

「殿下、貴族達が近づこうと画策してまいりますからご注意ください」

「うん、わかってるよ」

「それにしてもアーサー様が名乗った時のみんなのお顔……面白かったですわぁ～」

「俺も噴出しそうだったよ」

審判など無かったかのように楽しげに歓談していた。

「……ローレンシアの方、誰かいらっしゃいますか？……」

通話用の水晶から声が聞こえてきた。

「はい、ローレンシア神聖王国のローズでございます」
「おお、よかった。こちらはシンカ共和国のマルカスです」
「今、陛下と変わります」
「アルフレッドです。いかがなさいましたか？マルカス大統領」
「たった今、打ち合わせ通り大神殿の偽神託を暴いてやりました。あはははは」
上機嫌な声が会議室に響き渡って、みんな笑顔で聞いていた。
「大神殿の奴ら、ぐうの音も出せずに蒼い顔で大神殿に帰っていきましたわい」
「それは上々。その後の手配は？」
「今、国軍が大神殿を包囲しておるところです」
「こちらも先ほど大神殿の奴らを追い返して、今、騎士団が包囲のために向かっておるところです」
「ほかの2国も上手くやってくれるといいですな」
他国の対応をアルフレッドとローズにまかせ、アーサーとロバート

は大神殿に向かう準備をはじめた。

ロバートは炎王近衛騎士団に王城の警護を命じ、風王騎士団にアーサーと共に大神殿へ向かうように指示を出した後、自らは地王陸戦隊を引き連れてデロリアン公爵家に向かった。

風王騎士団と共に大神殿前に到着したアーサーは、神殿を取り囲んでいる先発隊と合流した。

そこに、シロを従えたフローリアとクレア、公爵家騎士団が到着した。

風の精霊から他の2国でも包囲完了の報を聞き、静かに目を閉じた。

＜エルザ、アレク、ウンディーネ、シルフ、サラマンダー、ノーム聞こえるかい？＞

＜聞こえてるわよ＞

＜おお＞

＜＜＜＜はい＞＞＞＞

＜いよいよ『澱』を殲滅する時がきたよ。みんな気をつけてね＞

＜大丈夫よ＞

＜久しぶりに力が使えるわい＞
＜御子様こそお気を付けください＞
＜じゃあ、みんな一気にやるよ！＞

グランディア帝国の大神殿前では、神殿騎士が国軍との交戦をはじめていた。

「神敵めっ　神罰をくらえっ」

「なにおっ　神の名を騙る不埒者めっ」

両軍入り乱れての乱戦の中、上空に黄金の龍が現れた。

黄金の龍は自分の存在を誇示するかのように咆哮をあげ、大神殿の屋根に降り立った。

神殿騎士達は槍を投げたり、弓を射掛けたり、魔術を行使して猛攻を加えたが、龍はさして気にする様子もみせず、ただ視線をおとしただけだった。

大神殿の中から『澱』が滲み出て、周囲を包もうとしたとき

キン

という金属がぶつかったような音がして、黄金の龍を中心に半球の

透明な膜ができ大神殿を包み込んだ。
『澱』は膜の外にでようと試みるが、膜に阻まれ膜の中に充満していった。
黄金の龍は『澱』を睨み付け、怒りの咆哮をあげた。
魂を押しつぶされそうな恐怖が襲い、国軍、神殿騎士を問わず気を失ったり、その場に座り込んだりした。
その時、膜の中から目映い金色の光が広がり周囲を埋め尽くした。
光が消えた後には、黄金の龍の姿はなく神殿の中には神官服をきた干からびた人間が倒れているだけだった。

ソヴィエ連邦の大神殿でも、連邦軍と神殿騎士との戦いが始まっていた。
精霊神殿の神官達が精霊とちからを合わせ、大神殿を結界で取り囲んだ。
結界内では『澱』が不気味な動きをしながら、結界を破ろうと暴れまわっていた。
地の精霊王と風の精霊王は結界の強化に全力を尽くしていた。
「ウンディーネ、サラマンダー早くしてっ！私とノームが加わっても長くはもたないっ」

ウンディーネは浄化の水に『神気』を乗せ霧にして結界内に充満させた。

「サラマンダー、今よっ」

サラマンダーは両手をかざし『神気』を混ぜた浄化の炎を放った。

ズドオオオォォォン

炎は結界内で暴れ水蒸気爆発をおこし、全てを吹き飛ばした。

「サラマンダー、やりすぎじゃ……」

「御子様を苦しめた報いだ」

精霊達は疲れたように姿を消した。

シンカ共和国の大神殿でも、国軍と神殿騎士との戦いが始まっていた。

国軍が劣勢になろうとした時

ウオオオォォォォーーーーン

狼の遠吠えの声が聞こえた。

多数の魔狼が現れ、神殿騎士に襲い掛かった。

神殿騎士達が怯んだ隙に、精霊神殿の神官達は精霊に魔力を提供して大神殿を包む結界を作り上げた。

結界の中に５ｍはあろうかという黄金の狼が飛び込んで行った。

大神殿の中からでてきた『澱』は黄金の狼に触れると霧散して消えていった。

黄金の狼は『澱』の中心に向かい突き進んで行き、全身から目映い光を発した。

ウオオオォォォォーーーーン

大神殿から戻った黄金の狼は勝利の遠吠えをあげ、魔狼達を引き連れ去って行った。

後に残された国軍の兵士は、去っていく魔狼の群れを見送りつつ跪いて手を合わせ神への感謝の言葉を呟いた。

第3章　19話

地王陸戦隊と引き連れたロバートはデロリアン公爵家を包囲した。
屋敷から出てきたデロリアン公爵は、ロバートに向かって不機嫌そうに質問した。
「レジアス公爵、これはどういうことですかな？」
「要人警護ですよ」
「警護ですかな？我が屋敷にも手勢はおりますが？」
「大神殿が反意を見せましたので、もうすぐ戦闘がはじまるかもしれんのです」
「なにゆえ我が屋敷だけ？」
「デロリアン公爵は大神殿とご懇意ゆえ、逃げ込んでくるものがあるやもしれませんからな」
「そのようなもの我が屋敷に受け入れるはずもなかろう」
「デロリアン公爵が寄付をする度に神託がおりておりましたからな」
「おのれっ愚弄するかっ　騎士団よ、こやつらを蹴散らせっ」

屋敷から武装した集団が現れ、地王陸戦隊と交戦がはじまった。

「デロリアン公爵、随分と準備の良いことですな。
大神殿でも助けに行くおつもりでしたか？」

「ふんっ　神託のできぬ大神殿などどうでも良いわっ
俺様が直接アルフレッドとガキを倒して即位してやる」

デロリアン公爵は抜刀してロバートに襲い掛かった。

「そんな剣筋では子供でも避けれますぞ」

「どこまでも愚弄するかっ」

デロリアン公爵の怒りに呼応するように、屋敷よりでてきた『澱』がデロリアン公爵を包み込んだ。

「『澱』かっ」

ロバートはこれまでの嘗めきった態度から一変し、油断無く構えなおした。

「うはははは　貴様など恐れるほどもないわっ」

デロリアン公爵の剣から火球が飛び出してきた。

ロバートは軽く剣を振り、火球を跳ね除けデロリアン公爵の左腕を切り落とした。

「な・なに？人間ごときが俺様に傷をつけるとわっ　おのれっ」
無茶苦茶に剣を振るい、無数の火球をロバートに放った。
ロバートは冷静に火球を避け、体内の魔力を練り上げ咆哮をあげた。
ウオオオオォォォォォ
剣先から凄まじい衝撃波を放ち、デロリアン公爵を吹き飛ばした。
『神気』の混ざった衝撃波に襲われたデロリアン公爵は、屋敷の壁に激突し意識を失った。
地王陸戦隊は生き残った者に縄をかけ、デロリアン公爵も捕縛した。
ロバートの放った衝撃波を目撃した地王陸戦隊員は
「すげぇ～」
「もはや人を超えてる」
とか口々に感嘆の言葉を漏らした。
大神殿を取り囲んでいた風王騎士団と公爵家騎士団の前に、ゾロゾロと神殿騎士が現れ一斉に襲い掛かってきた。

ダンクルが神殿騎士の腕を斬り飛ばしても、まったく怯む様子もなくうっすらと笑みを浮かべて攻撃してくる。

「な・なんだ！？こいつらおかしいぞっ」

「……」

他の面々も異常に気付き、何度斬りつけても向かってくる神殿騎士に苦戦していた。

「みんなっ　離れてっ！！」

フローリアとクレアは騎士団を下がらせて、レイピアから魔術を放った。

ゴオオォォォォォ

数人の神殿騎士が、自らの身体を盾にして仲間を守り魔術を凌いでしまった。

シロは子狼の姿から、本来の姿に戻り攻撃を繰り返しているが、致命傷を与えても息絶えるまでは攻撃を止めない相手に手を焼いていた。

風王騎士団達に守られながら、精霊神殿の神官達は精霊に結界を張ることを命じ魔力の供給に全神経を注いでいた。

大神殿から『澱』が染み出てきて、結界を破ろうと巨大な火球を結界に連発し始めた。

『澱』はさらに膨張を続け神殿騎士を呑み込みはじめた。

「みんな結界の外にひいてっ！」

アーサーの声が響き、風王騎士団、公爵家騎士団は結界の外まで退却した。

結界内に残った、アーサー、シロ、フローリア、クレアは何度も魔術を放つが、当たった部分が消えるだけで、大きなダメージを与えることが出来ないでいた。

「殿下っ　このままでは結界がもちませんっ」

「リア、クレア結界の補助にまわってっ」

「アーサー君はどうするの？」

「僕はこのまま攻撃を続けるよ」

フローリアとクレアが結界を張っている神官達の方に駆け出していったのを確認して、アーサーは自分の力を解放した。

髪の毛や目の色だけでなく、全身が金色に輝き手に持った長剣も発光しはじめた。

『澱』は更に膨張し、直接、結界を中から押し始めた。

戦闘で大量の魔術を使ったクレアが魔力不足で意識を失い、結界に

ヒビが入り始めた。

「クレアっ　　クレアっ」

フローリアは悲痛な声を上げながらも結界を張り続けた。

＜俺も手伝おう＞

シロはクレアの倒れた場所に行き、結界を張り始めた。

「シロっ　アーサー君が一人になっちゃう」

＜『澱』を倒し、人間を正しく導くのがアーサーの使命だ＞

「そんなこと言っても助けなきゃっ」

＜アーサーを信じろ＞

アーサーは『澱』を斬り裂きながら、大神殿の中に突入していった。

＜神の子といえど、所詮は人間か　その程度で我は倒せんぞ＞

「多くの人間や精霊が力を合わせてるんだ。必ずたおしてやるっ」

＜我は人間の欲望を糧に世界を混沌に戻す。その元となった人間の力など無力だ＞

「人間の力は欲望だけじゃない」

＜我を倒したところで、人間に欲望がある限り我の同胞が生まれる＞

「その度に倒してやるさ」

＜戦いは混沌を生む。我の望むところだ＞

「人間はそこまで愚かではない」

結界に再びヒビが入りはじめ、すでに限界に達していたフローリアは、生命の維持に必要な魔力まで放出していた。

＜フローリア　魔力の放出をやめろっ＞

「絶対アーサー君を守る　そのためならどうなってもかまわないっ」

＜身体が崩壊するぞっ＞

「アーサー君にだけ頼っちゃいけない　私も戦わなきゃっ」

フローリアの存在が希薄になり始め、身体から光の粒が飛び始めた。

＜フローリア　本当に限界だっ　存在が消えてしまうぞっ＞

その時、結界内を埋め尽くしていた『澱』の中から少し光がのぞいた。

1箇所だった光が2箇所、3箇所と増えていき、やがて光は柱となって天に伸びていった。

＜終わったのか……＞

シロは子狼の姿に戻り意識を失った。

大神殿の戦闘が終わり、駆けつけたロバートが見たものは、意識を失った人々の山であった。

「フローっ　フローっ」

必死に探したが、フローリアとアーサーの姿はどこにもなかった。

第3章　20話

大神殿の戦闘のあと怪我人や意識を失った者を王城に連れ帰り、残ったもので大神殿の中を捜索した。

大神殿のアチコチに干からびた神官の遺体がころがっていた。

神官長の部屋からは、大陸中の貴族や商人、官僚からの神託依頼書が大量に見つかり、ご丁寧に寄付金の額まで記されていた。

だが、いくら探してもアーサーとフローリアの姿は見つからず、唯一見つかったのは砕け散ったフローリアのレイピアだけであった。

数日後、意識を取り戻し話せるまでに回復したクレアのもとへロバートが訪れた。

「クレア、大丈夫か？」

「はい、申し訳ございません。わたくしが傍についていながら……」

「クレアのせいではないよ。クレアはよく頑張った。礼を言う」

「わたくしがもっと強ければ、姫様をお守りできましたのに……」

「死んだと決まったわけではない」

「……しかし……」

「殿下は15年も行方が分からなかったんだぞ」

＜その通りだ＞

ロバートとクレアが入り口の方へふりかえると、ヨロヨロとした足取りでシロが入ってきた。

「シロ殿、どういうことですかな？」

ロバートはフラフラしているシロを抱き上げ、クレアの横に寝かせてやった。

＜もしアーサーが死んでいるなら、俺は森に帰ろうとするはずだ。だが、ここに居ることに違和感を感じていない＞

「シロ、それはどういうことかしら？」

＜俺の使命はアーサーの守護。アーサーが居なければ森に帰り、普通の神獣として過ごすのが当たり前だ＞

「それは殿下が帰ってくるということなのか？フローは？」

＜フローリアは身体が崩壊しかけていた。アーサーを守りたい一心で魔力を放出し続けていた＞

「……身体が崩壊……」

＜そんな思いをアーサーが無碍にするはずはない。アーサーの優しさは皆知っておるだろ？＞

「待つしかないのか」

「いつまでもお待ちしますわ」

清浄な空気の中で、少年と少女が眠っている。

「無茶しおったな～」

「ふたりとも限界以上に力を放出しましたからね」

「アーサーはともかく、人間の姫は無茶しすぎじゃ」

と髪を撫でようと手を伸ばした。

ぺしっ

「変態親父が触れるでないっ！汚れる」

「神が触って汚れるなどと……」

「それにしても、この娘の魂は綺麗ね。坊やと同じくらい澄み切ってるわ」

「そうじゃな。そうでなければ天上界（ここ）では耐え切れんじゃろう」

「坊やも必死だったのね。天上界（ここ）に連れてくるなんて」

「そのせいで、この娘も……」

「あら、可愛い娘が出来たこと嬉しくないの？」

「そりゃあ嬉しいぞ。パパぁなんて呼ばれてみたい」
「やっぱり変態かっ」
蔑んだ目で『知の神』をみつめる『生命の女神』であった。

「うう～ん」
アーサーの目がゆっくりと開いた。
あたりをキョロキョロと見回し、義父母の姿を見つけ微笑んだ。
「坊や、目が覚めたようね」
「『澱』は？」
「坊や達の頑張りで気配が消えたわ」
「よかった～　リアは？」
『生命の女神』はアーサーの隣を指差した。
アーサーはフローリアが眠っていることを確認して安心したように
フローリアの髪をなでた。

「リアも無事だったようですね」
「無事っていうか、坊やと同じになっちゃったわよ」
「僕と同じ？」
「そう、天上界に連れてきちゃったから」
「ああ、そういうことですか。それしか助ける方法が見つからなかったから」
「身体が崩壊しかけてたから、地上では助からなかったでしょうね」
「これからどうしたら良いのでしょう？」
「彼女には使命を与えるしかないわね」
「どんな使命？」
「戦女神なんてどうじゃ？戦闘服で男を踏みつけ……」
「「変態は黙ってなさい」」
「坊やのことを命をかけて守ろうとしたから『愛の女神』ってどうかしら？」
「リアの性格からしたら、やっぱり戦女神？」
「愛は戦って勝ち取るっこともあるのよ」

「それなら、ぴったりかもしれないね」
「もう加護も与えちゃったし」
「女の子に紋章を刻むのには抵抗があるなぁ～」
「大丈夫よ。彼女には魂に直接刻んだから。坊やのも刻み直しておいたわよ」
アーサーは両腕から紋章が消えているのに気付いた。
「一人前の神様が、他の神の紋章を身体に刻んであるのは可笑しいでしょ」
『生命の女神』は悪戯っぽく微笑んだ。
「それから、あなた達にも人間に加護を与える力があるのよ」
「僕達にですか？」
「そう、魂の綺麗な人間になら加護を与えられるわ」
「どうやって？」
「その時になれば自然にできるはずよ」
「わかりました」
「彼女が目覚めたら、森に行って彼女に『神気』の使い方、抑え方を教えてあげてね。それからじゃないと人間のところには帰れない

わ」

「わかりました」

しばらくして目を覚ましたフローリアに事情を説明し、2柱の神を紹介すると慌てふためいて平伏したり、拝んだりと皆を笑わせた後落ち着きを取り戻した。

「私が神様？」

「そうだよ」

「なにも変わってないような気がするんだけど」

アーサーは何もない空間から鏡を取り出しフローリアを写してやった。

そこには金髪に金の目をした自分が写っていた。

「これが私？なんか派手ね。似合うお洋服も変わっちゃうわ」

と見当違いなことを言いながら、自分の姿を受け入れるフローリアであった。

第3章　21話

フローリアはアーサーに連れられて『神狼の森』に来ていた。
大自然に囲まれた森林や山々の中で、アーサーやエルザに『神気』の扱い方を習い、魔狼達との狩りで戦闘訓練も行っていた。
人間の頃に覚えた『獣はこわいもの』という感覚が、なかなか抜けなかった森の獣達とも、毎日果物を持ってきてくれる小動物や、一緒に狩りに出かける魔狼達とも次第に打ち解け仲良くなっていった。
時々遊びにやってくる『神龍アレク』に乗せてもらい、空の散歩も楽しむ余裕が出てきた頃、そろそろ人間の世界に帰ることになった。
旅立ちの前に『神龍アレク』は門出の祝いだと鱗を1枚はがしフローリアに向かって投げると、アーサーとお揃いの篭手と脛当に変わりフローリアの手足に装着された。
驚きながら、アレクに頭を下げ礼を言い、頭をあげると笑顔の『生命の女神』が立っていた。
「リアちゃん、いよいよ旅立ちね。はい、これっ」
レイピアを差し出した。
「前のやつ壊れちゃったでしょ」
「ありがとうございます」

「森の生活はどうだった？」

「みんな優しくしてくれて本当に楽しかったです」

「それは良かったわ。これから人間の世界に帰っても、時々遊びに来てよね」

「はい、アーサー君と一緒に必ず帰ってきます」

「これからも坊やと仲良くね。新しい女神さん　あはははは」

「なんだか、まだ信じられないけど使命を果たせるようにがんばります。

エルザさん、森のみなさん、本当にありがとうございました」

みんなに見送られ、アーサーとフローリアは森をあとにした。

「アーサー君、どうやって王都まで行くの？」

「歩いてだよ」

「うえぇぇぇ　アレクさんに乗っけていってもらえばすぐじゃない」

「王都に突然神龍が現れたら大騒ぎになるでしょ」

「早く王都に帰ってお父様やクレアを安心させたいのになぁ～」

「僕達が王都に帰ることはシロが伝えてくれてるはずさ」

「そうなの？」

「シロなら気付いてるはずだよ」

「それならいいけど……」

かつてシロと歩いた道を進んで行き、パイク村にたどり着き、1件の食堂に入っていった。

「こんにちは～」

「あら、アーサー君　ひさしぶりね」

「エレナさん、お元気そうですね」

「私はいつも元気よ。アーサー君こそ可愛い彼女連れちゃって」

「あははは　彼女って「こんにちわ」」

「こんにちは、ようこそパイク村へ」

「エレナさん、皆さんはお元気ですか？」

「ええ、今日は狩りにでかけてるけどね。あの馬鹿は畑の手伝いをやってるわ」

アーサーはフローリアに以前あったことを説明した。

「ええっ、アーサー君お金の使い方も知らなかったの？」

「そうなのよ。はじめはおどろいたわぁ～」

「あははは　エレナさんのおかげで無事旅を続けられました」

「お礼を言われるようなことじゃないわ」

みんなが元気であることを確認して、アーサーとフローリアは村を後にした。

旧バーニング領で人々の笑顔が戻っていることに一安心しながら、王都を目指し進んでいった。

途中フローリアはシュベルト伯爵領やレジアス公爵領で城に立ち寄り王都に連絡しようとしたが「突然帰ったほうが面白い」とアーサーが言い、城に立ち寄ることはなかった。

大神殿での戦いの後、神官長の部屋でみつかった『ご神託依頼書』を国別にわけ、各国の大使に渡したあと、各国では大騒ぎになった。多くの貴族が降格されたり爵位を奪われ、官僚からも多くの処分者

がでていた。

あまりの混乱に、婚礼の儀を延期したほうが良いのではとの意見も出されたが、こういう時だからこそ明るい話題を提供するべきだとのアルフレッドの言葉に予定通り実施されることになった。

ロバートは、処分された貴族の領地替えや、領主不在となった領地に忙殺されていたが、官僚からも多数の処分者が出ていたため、寝る間もなく働いていた。

体力の回復したクレアは人手不足を理由に、婚礼の儀の責任者に抜擢され多忙な毎日を送っていた。

今まで儀式を執り行っていた大神殿が崩壊したため、精霊神殿が儀式を行うこととなり過去の儀式内容を参考に儀式の手順を決めたり、参加者の席順、婚礼衣装の手配、披露宴の準備と幅広く長年公爵家で培った知識と人脈を総動員し、なんとか目途がたつまでにいたっていた。

風王騎士団や公爵家騎士団は、大神殿との戦闘で多くの死傷者をだし人手不足となっていたが、ランバートが領地から騎士団と衛士隊を率いてきて人手不足を補った。

ランバートはそのまま王都警備の指揮をとり、治安維持と来る婚礼の儀の警備計画を立案し騎士団の訓練強化を実施した。

シロは騎士団の鍛錬に付き合い、毎日遊び感覚で過ごしていた。

鍛錬の途中、シロは顔をあげ鼻をクンクンさせたあと鍛錬場の入り口に駆け出した。

ワオオオオォォォォーーーーン

飛び掛ってきたシロを抱きとめ

「シロ、元気だったかい？」

というアーサーの顔をペロペロ舐め喜びを表していた。

フローリアは、駆け寄って来たランバートに抱きつきながら

「お爺様、ご心配おかけしました」

と言葉をかける孫娘に涙をながしながら頭を撫でてやる祖父の姿があった。

「フロー　よくぞ無事に帰ってきた」

「ちょっと遅くなっちゃったけどね」

「シロから待っていろと言われ、少しは安心していたのだが」

とアーサーを押し倒し舐めまくっているシロに目をやった。

「やっぱりシロにはわかってたんだぁ～」

「まあ、あの様子ではシロも心配してたんだろうがな」

フローリアはシロに近づき撫でようとしたが、シロに襲い掛かられ舐められはじめた。

「ランバートさん、ご心配おかけしました」

「殿下もよくぞご無事で」

「僕はすぐ元気になったんだけど、リアが体調を戻すのに時間がかかってしまいました」

「孫娘がお世話をかけたようですな」

「僕にもっと力があったら、被害を少なくできたのに……」

「なにをおっしゃいます。殿下がいらっしゃったからこれだけの被害で倒せたのですよ」

「そう言っていただけると少しは気が楽になります」

「お疲れのところ申し訳ないのですが、早速王城に向かい陛下にお会いください」

ランバートは二人とシロを連れて王城に向かった。

第3章　22話

国王執務室では、アルフレッド、ローズ、ロバート、クレアが集まり婚礼の儀の確認を行っていた。

コンコン

「誰だ」

「ランバートでございます」

「おお、入れ」

「お忙しいところ失礼いたします」

「ちょうど婚礼の儀の確認をしていたところだ。警備のことも聞いておきたかったんだ」

全員が難しい顔で資料に目をむけ、誰も入り口を見る者はいなかった。

「うんうん　順調に準備はできてるようですね」

「そうね、クレアも頑張ってるみたいだし」

後ろから資料を覗き込む人影に振り返り

「ア・アーサー！」

「ひめさま？」

「「ただいま～」」

全員が二人を見て固まった。

「おふたりともよくご無事で」

「アーサー、驚かせやがって」

「あはははは　血筋ですよ、伯父上」

なにも言葉を発せずロバートとクレアはフローリアに抱きつき涙を流していた。

「アーサー、今までどこにいたんだ？みんな心配したんだぞ」

「「ご心配おかけして申し訳ありませんでした」」

アーサーとフローリアは揃って頭を下げた。

「僕はしばらくして元気になったのですが、リアが重症で体力の回復を待ってたら遅くなってしまいました」

「アーサー君、それじゃあ私が悪いみたいじゃない」

あはははは

「フロー、身体はもういいのか？」
「ええ、すっかり元通り？いや、前より良くなってるわ」
「リアは『神狼の森』で毎日魔狼と狩りに行ってましたからね」
「なんとっ　前よりお転婆になったのか？」
「お爺様っ　突っ込むところはそこじゃないでしょ」
「アーサー様、何故『神狼の森』で？」
「リアの状態が酷くって、ここでは治癒できそうになかったんですよ。
『神狼の森』には精霊も多くって治癒には最適なんです。
エルザの治癒能力も高いしね」
「姫様、神狼エルザにお会いになったんですか？」
「ええクレア、エルザもアレクも優しくしてくれたわよ」
フローリアは『神狼の森』で過ごした日々を皆に話して聞かせた。
アレクの背に乗って空中散歩の話には、驚きと羨ましそうな顔をしたりしながら話に聞き入っていた。

「伯父上、ローズさん　いよいよあと7日ですね。おめでとうございます」

「おお、お前が間に合ってくれて本当に嬉しいよ」

「アーサー様、ありがとうございます」

「ローズさん　伯母上になられるんですから、呼び捨てで結構ですよ」

「なんだか伯母上っていうのは微妙だわね。オバサンになったみたいだわ」

あはははは

婚姻の儀の当日、儀式前に王城を祭壇の間にアルフレッドとローズ、アーサー、フローリアの姿があった。

「伯父上、ローズさん　祭壇前に跪いていただけますか？」

言われた通りアルフレッドとローズは跪き頭と垂れた。

二人の前にアーサーとフローリアが立ち声をかけた。

アーサーはアルフレッドの頭に手をかざし

「汝アルフレッド・ボガード・ローレンシア　良き王となり民を正しく導くことを誓えるか？」

アルフレッドは突然の儀式に驚きながらも「誓います」と答えた。

「我『道徳の神』の名のもとに汝に加護を与える」

アーサーの手から光の玉が出てアルフレッドの右手に紋章を刻んだ。

フローリアはローズの頭に手をかざした。

「汝ローズ・バレンシア・シュベルト　良き王妃となり皆に愛を与えることを誓えるか？」

「誓います」

「我『愛の神』の名のもとに汝に加護を与える」

フローリアの手から光の玉が出てローズの左手に紋章を刻んだ。

「伯父上、ローズさん　もういいですよ」

「アーサー今のは？」

「僕とリアは神から、人間を正しく導き、愛にあふれた世をつくるよう使命を与えられました。それで、神の加護を授けることを許されたんです」

「フローリア嬢も神の養子となったのか？」

「ええ陛下、天上界で身体を再生してもらいましたので、神の養子となりました」

「フローちゃんが女神さま？」
「ローズ姉さん、私神様になっちゃった。これからはアーサー君と一緒に使命を果たすの」
「結婚しちゃったの？」
「あはははは、神には結婚という概念がありませんから」
「でも、人間のお婿さんはもらえないわね」
「そうなりますね」
「じゃあ、計画変更しなきゃね。アレク、プランBに変更よ」
「お・おう！？……プランBってなんだ？」
「プランAはアーサー君がフローちゃんと結婚してレジアス家を継ぐ。
プランBはロバート叔父様がクレアを後妻にして跡継ぎを作るのよ」
「それでは、アーサーの居場所がなくなるではないか」
「公爵家が一つ空いたでしょ。新しい公爵家を興すのよ」
「アーサー、子供は作れるのか？」
「僕達二人が人間の子を望めば、人間の子供はつくれますよ」

「それでは王家の分家として公爵家を興すことは問題ないな」

「「もちろん」」

アーサーとフローリアは顔を見合わせて笑った。

婚礼の儀は、会場に精霊が清浄な空気を満たし、滞りなく行われた。

披露宴は王宮の大広間で行われた。

披露宴とはいっても、堅苦しい祝辞の続く退屈このうえない会をアルフレッドが嫌い、自由に語り合える立食パーティー形式で行われた。

正装したアーサーがフローリアをエスコートして入場すると、貴族達が次々やってきて挨拶を繰り返していた。

やがて新郎新婦の入場となり場内は拍手の渦に包まれた。

アルフレッドの挨拶が済み、パーティーがはじまるとアーサーとフローリアはアルフレッドの傍に呼ばれた。

「これが甥のアーサーです」

各国の元首に紹介されアーサーは各国の言葉で挨拶を交わした。

「アーサー殿下、大神殿事件の折は多大なご協力ありがとうござい

ました」

「アーサー殿下、神龍が現れたときには肝をひやしましたぞ」

「殿下、神狼達のお陰で我国も助かりました」

口々に感謝の言葉を述べ、アーサー自身の武勇も褒め称えた。

「あれは神が力を貸してくれたからですよ。僕にではなく神に感謝してください」

「神に感謝といわれても、大神殿は無くなってしまいましたぞ？」

「建物に感謝するんじゃなく、心の底から感謝の気持ちを表せば場所など何処でも良いのです」

「神は全て見ておられるということですな」

「神は人間の味方ではなく、世界を守護する者です。人間が道を誤れば人間の敵にもなります。このことを忘れてはいけません」

「その言葉大切にさせていただきます」

終章

国王の結婚式が終わった後、フローリアはレジアス家に戻りアーサーは王城で生活することとなった。

フローリアは、ランバート、ロバート、クレアと書斎で久しぶりの家族団欒を過ごしていた。

「皆様、ご心配おかけいたしました」

「フローよ、よく無事であったな」

「シロから身体が崩壊しかかったと聞いて、肝をひやしたぞ」

「姫様、わたくしが不甲斐無いばかりに……」

「クレアには罰を与えます」

「どんな罰でもお受けいたします」

「罰としてお父様と結婚してレジアス家の世継を作りなさい」

「お・おい、フロー」

「姫様？」

「実は私、人間じゃなくなっちゃって……あはははは」

「どういうことじゃ？」

「身体が崩壊しかけて存在を失いかけた私を、アーサー君が天上界に連れて行って直してくれたの。
それで、女神になっちゃったようなのよ」

「女神？」

「そう、使命まで授けられちゃって、女神じゃあ人間の婿なんて貰えないからね」

「どんな使命なんじゃ？フローのことだから戦女神か？」

「なんでそうなるのよ！アーサー君は『道徳の神』、私は『愛の女神』。
これから、ずっとアーサー君と一緒に人間を導くのが使命なの」

「それで、俺に後妻をもらえと？」

「そういうことよ。知らない女じゃ嫌だし、クレアなら安心してまかせられるわ」

「姫様……本当にわたくしなんかで……」

「嫌なの？」

「とんでもございません。ロバート様は素晴らしい方ですわ」

「じゃあ問題ないわね」

「フローよ、お前はこれからどうするんじゃ？」

「アーサー君と陛下が何か考えてるみたいよ」
「お前は気楽だのう。あはははは」

それから1ヶ月後にロバートとクレアの結婚式が執り行われることになった。

「おめでとう！お義母様」
「ありがとうございます、姫様」
「娘に向かって姫様はないんじゃない？お・か・あ・さ・ま」
「ありがとう、フローリア……これでいい？」
「そうそう、早く私の可愛い弟作ってね～
それから、結婚式の前にお父様、お爺様にも少しだけ時間をとってもらってね」
「それは構わないけど、何かあるの？」
「内緒よ　あはははは」

結婚式の当日、儀式用に作られた祭壇の前にアーサー、フローリアが立ち、その前にロバートとクレアが傅いていた。

参列席には国王夫妻とランバートが神妙な顔で４人の様子を見ていた。

「汝ロバート・アーノルド・レジアス　良き領主となり民を正しく導くことを誓えるか？」

ロバートは「誓います」と答えた。

「我『道徳の神』の名のもとに汝に加護を与える」

アーサーの手から光の玉が出てロバートの右手に紋章を刻んだ。

フローリアはクレアの頭に手をかざした。

「汝クレア・オランタ・アッサム　良き妃となり皆に愛を与えることを誓えるか？」

「誓います」

「我『愛の神』の名のもとに汝に加護を与える」

フローリアの手から光の玉が出てクレアの左手に紋章を刻んだ。

国王夫妻とランバートが笑顔で拍手を二人を祝福した。

「ロバートよ、神の加護を得たからには今まで以上に頑張らねばならんの」

「はい、父上」

「ロバート、誓いを破ったら神罰が下るらしいぞ」

「俺より陛下のほうが心配ですよ。あはは」

「ロバートさん、僕達の加護は大したものじゃないですけど、困った時には精霊や神獣達が助けてくれます。
もちろん僕達もできるだけの助力はいたしますので、頑張ってくださいね」

「もちろんだ。それから、娘の事頼みましたぞ」

「わかりました。王家に世継ができたら、僕は王太子を返上して新しい公爵家を興します。
その時にリアを妃にいただきたいのですが、お許し願えますか？」

「神様の頼みを断れるわけないでしょう。あはははは
それまでは婚約者ということでお願いします」

「アーサー、今夜の夜会で婚約発表するぞ！あはははは」

結婚式は国王夫妻の時ほどではないにせよ、盛大に行われた。

披露宴として行われる夜会には各国大使や貴族、高級官僚が招かれ

ていた。

国王の挨拶や各国大使からの祝辞が行われ、和やかな雰囲気で夜会は進んでいった。

「アッサム侯爵、この度はおめでとうございました」

「これは殿下、こちらから挨拶に伺うべきでしたのに、子爵であったためお招きなしで王城に赴くことができず大変失礼いたしました」

「気にしないでください。僕もクレアさんに色々助けてもらい感謝してるのですよ」

「クレアのお陰で昇格でき、そのうえ公爵家と親戚になれるなんて夢のようです」

「これからは伯父上とお呼びしてもよろしいですか？」

「もったいのうございます」

「今度、母上のことをゆっくりとお聞かせねがえませんでしょうか？」

「いつでもよろしゅうございます。姉上は我が家の誇りでございますから」

「よろしくおねがいいたします」

アーサーはフローリアに手招きをして呼び、国王夫妻の傍に行った。

「皆の者、聞いてくれ！」

ざわついた会場が静まり、全員が国王を注目した。

「レジアス家のお祝いはまだあるぞ。
この度、王太子アーサーとレジアス家長女のフローリアが婚約した。
皆も暖かく見守ってやってくれ」

会場が拍手と歓声で爆発した。

1年後に国王夫妻に王子が誕生し、アーサーは正式に王太子を返上し新たな公爵家を興した。

家名は乳母から名をもらいエルザリアとした。

――　了　――

終章（後書き）

やっと完結することができました。
こんな拙い文章をお読みくださった方々に、ひたすら感謝です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8410n/

金色の御子伝説

2010年10月8日23時06分発行